DS 721 M58

Miyao, Shigeo
Shina gaito fuzoku shi

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

支那街頭風俗集

宮尾しげを著

支那街頭風俗集

實業之日本社發行

DS
721
M58

LIBRARY
JAN 9 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

序

文字の國と謂はれてる支那も、孔子さまや孟子さまの時代は別として、今は哀けない事に、自分の名の滿足に書ける者は、たんと居ないと云ふ實情で。文字の書けると云ふのは大した者の中に入る。そんな事で手ッ取り早く、多くの商店では、商品の實物とか、畫とかを看板に出して、誰が見ても、これは何屋と云ふ事が一目で解る樣に仕組んでゐる。もつとも日本でも昔は、これに似た樣な看板が多かつたが、洒落氣たつぷりの物があつた事は幾分か進步的である。しかし支那方面へ旅行した日本人が、これら獨特の看板によつて隨分救はれて居る。言葉が滿足に通用しなくても、何屋が何處にあるのか判らぬ時、看板を目當に行けばすぐ解決する。しかし、これは永い事滯在してる時の事で、短期間では、そう簡單には行き兼る。そうした人の參考にもなり、また見てゐ

るだけでも樂しめるものとして、こゝに支那商牌集をまとめる事にした。目で見る看板の外に、耳で聞く商賣物として、行商人の事を加へて見た。主として北支から上海、南京方面へ掛けて飛び々々の採集なのと、店によつて形の幾分の變化、文字の相違などがあるので、こゝに集めた物で確定は出來ないが、似たり寄つたりであるから、大差は無いと思つて頂きたい。この一冊に集めた物は、全般に涉つたつもりであるが、描きもれもある事と思ふ、その點は前もつて御諒承を御願ひする。なほこれは滿洲國にも通用するので、滿支旅行者の參考の一助にも成れば著者の喜びとするところである。

宮　尾　し　げ　を

目次

支那看板集……一
附　支那看板について……一五四
街の物賣……一五七
支那芝居を見る心得……一八一
音聞北京芝居譚……一八二
支那人は芝居狂…孤軍奮鬪の昆曲劇…觀劇料とチップ…支那劇の約束…小道具のいろ〳〵…劇の種類…芝居を見にゆく迄…番附面の見方
支那芝居雜話……二一七
ちよいのぞき支那の風俗……二二七
支那影戲…人力車…買物符號…支那食物漫談
看板物賣索引……（卷末）

装幀並に畫　著者

装幀について——

包紙表面の圖案は支那の民間で一般に行はれてゐる暦の装飾畫をそのまゝ縮刷したもの、包紙の裏面及び本册の表紙は支那で手工として盛に行はれる切拔繪のお手本で、何れも著者が支那から持ち歸つたものである。

支那看板集

料理屋

向ふの料理屋も格によつて名前が違ふ「飯荘子」が一流所で「飯館子」が普通の料理屋である。

圖の左の方が、その二ツに當る店の看板であるが、殆んど今は級なしに料理屋の看板になつてしまつてゐる。店によつて少しづゝの變化はあつたにしても。北京、天津あたりの一流どこはあまり吊さないのが常法となつてゐる「包辦酒席」「應時小賣」などと書いた看板を出した家がある。包辦の方は宴會引うけますで、應時の方は一皿でも御注文に應じますの意である。この看板以外に、右圖の様に上の方だけ板で、それへ布をつけてあるのは一膳めしやと普通料理屋の合で、安料理屋の看板である。一尺位巾の布で長さは三尺位ある。この看板の布が風ではためいて、音を立てゝるのを見て、のどを鳴らしてる支那人を見た、魅力があるものと見える「包子舗」といふ看板を出した料理屋もある。これは肉餡を入れた饅重を賣つてる店だ。

藥屋（藥舖）

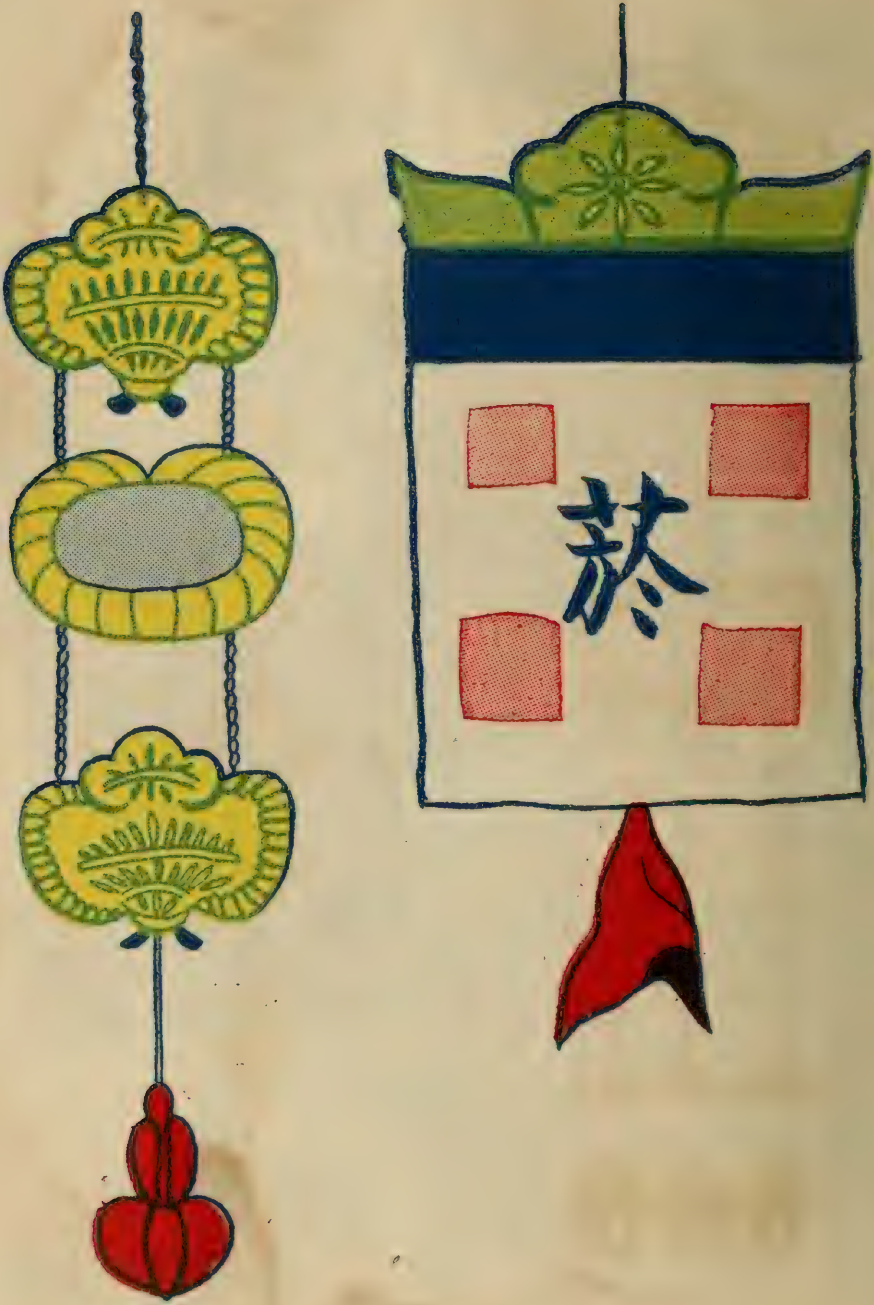
珠數屋の看板と、早合點をしてはいけない。これは丸藥を並べて見せたところだ。丸藥だから藥屋といふわけである。面白い事には、支那では日本の樣に七、五、三と云つた工合の奇數を喜ばず、必ず二、四、六と云つた工合に偶數を喜ぶ習慣になつてゐる。この丸藥は五ツづゝしかないので奇數ぢやないかと言つたら、中央にある大きいのが上下に一個づゝ通用するので、六ツだと云はれた。成程數へ方も色々あるものである。左圖の菱形の中に黑地（赤のもある）に丸、上下に三角形は、膏藥を示したものである。一尺角位の板製、上下の三角形は膏藥のついた紙を半分にしたところ、中の二つは擴げた形である。この看板と同じものが、日本の愛知縣にある田縣神社の田植の時、豐穰を祈る爲に生産力の御符として用ひられてゐ、更に印度でも、これに似たものが、避邪の禁厭として懸けられてゐると言ふ所からみると、單なる膏藥の表象以外、もつと深い意味がある事だと思ふ。看板の下の、双魚は緣起もので、店によつては紅布を付けてゐるところが有る。

烟草屋（菸舗）

「菸」の字は、烟草の事である。この烟草は葉の方で、兩切りや、刻みではない、これは烟草葉を賣る店の看板の一つである。支那人の烟草好きは特別で、小さい七ツ八ツの子供でも、平氣にスパ〳〵やつてゐるので吃驚してしまふ。花子（乞食）でさえ、金をくれないと見ると、手まねで烟草を喫ふ眞似をし「大人進上」と來るから、あきれてしまふ。

嗅ぎ煙草や（鼻菸舗）

喫ふ烟草にも、水烟草と云ふ、變り種があるが、も一つ嗅ぎ煙草といふのがある。小さな壜に入れてあつて、クンクンと鼻をピクツかせると、いゝ香がして煙草を喫つたと同じ効果があるといふのだ。相憎煙草に縁が無いので看板だけで、中味を調べて來なかつた事は、今に成つてうかつだつた。嗅ぎ煙草の壜といふものは小さいながら、中から繪畫や七言絶句が、描かれてゐて、その奇術畫が面白い、空き壜は古道具屋へ行けば賣つてゐる。


菸

質や（當舗）

日本と違つて、堂々となるべく人目につく大通りにある。看板は大小あるが、長さ二尺巾一尺五寸位が多い、板製で四角に眞鍮金具がついてゐる。「當」は云はずと知れた抵當の當である。店内は七八尺の高さまで、板圍ひとなつてゐて、客は僅に手首丈け出る位の所に一尺程の板があつて受渡所になつてゐる。これは盗賊よけの爲だと云ふ。品物を上から取らなくては金はよこさない。兩替屋と同じ様に晝間營業で日沒を境にして店を閉じる。「軍器不當」とあるのは軍器は受けつけぬの意である。今迄の支那の兵隊さんは軍器を平氣で質に入れる癖があつた。又「燈下不付」とあるのは場末や田舍で見うける。これは前にも言つた通り、燈がついた後は受け入れぬの事だ。質屋の隣に阿片屋があるのを見うけた。日本の湯屋と理髪屋が隣合つてると似てゐる。日本の昔噺に友達が寄合ひ「只今の御商賣は」と尋ねると「ハイ質屋と酒屋を致して居ります。して貴下は」と問ひ返すと「私はそれに似てる事をして居ります」「似てるとは」「ハイ質を入れては酒を吞んでます」といふのがある。質やと阿片やの隣合に似てゐる話である。

滙源
當
當
軍器不當

入れ齒屋（假牙匠）
入れ眼屋（假眼匠）

齒醫者、眼醫者と言へないが、する仕事は同じである。日本流に言ふと入齒屋、入れ眼屋であらう。一尺五寸平方角の板に、グロテスクな表現で商賣を表してゐる。日本だとモグリに近い商賣だ。我國にも目藥を賣る看板で、眉と目をかき、その下に御くすりと書いたのがあつた。眉と目の下、丁度鼻のところに御くすりとあるので、鼻の藥だらうと思つて、目藥を鼻へつけたが、効目が現れないので、藥屋へ怒鳴込んで行つたといふ咄が殘つてゐる。地方に行くと、眞鍮製の齒を金齒と稱して、惡くもない齒へかぶせる、見得坊相手の入れ齒屋があつた。勿論眞鍮製だから値段も安いものだ。こないだ迄、東京の淺草公園、六區の池の端にも有つた。

上のは眼と齒を入れるが、下のは齒だけ入れるの看板である。

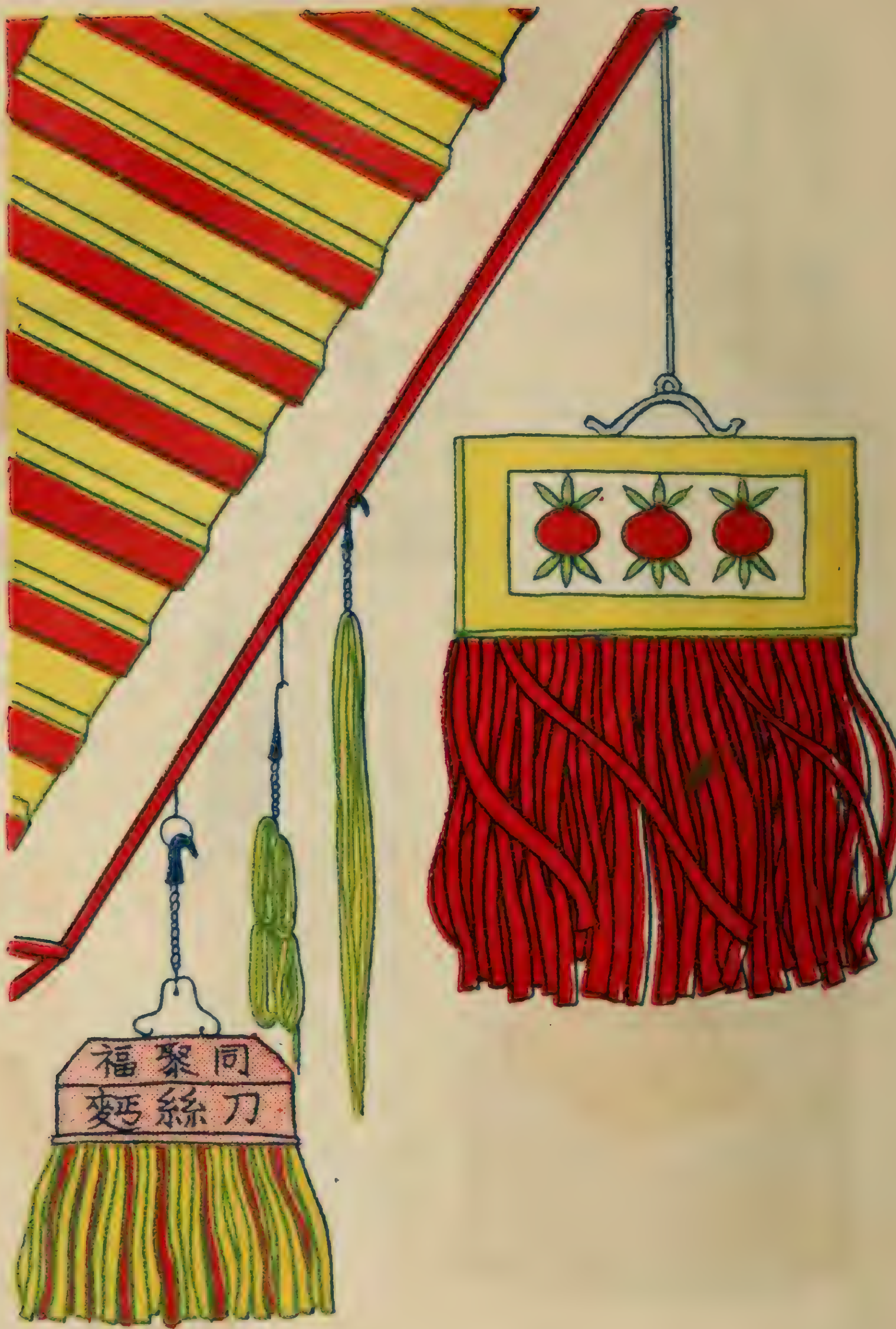
補鑲
眼牙

補如
牙生

切麺や（麺店）

板きれに、細長く、黄ろい紙、中には赤い紙のもある。そうした色紙を縦に切つて、ぶら下げてある。日本で言ふと「玉うどんあり」とでも言ふところである。この形は麺類を表現したもので、日本でも寛文年間に、これと同型のうどん、そばきりの看板があつた事は文献に殘つてゐる「饂飩屋にて、板に額あるひは櫛形した板へ、細く切りたる紙を附けたる出し」と、用捨箱と言ふ随筆本に記してある。

圖の手前の方のは一尺二三寸の板に赤紙が下つてゐる。このスケッチした店は荒物やを兼ねてると見えて、麺看板の間に、麻糸、繩の實物が下つてゐた。一番奥の看板も麺である。糸刀麺（チエスウミエン）刀で糸の様に細く切つた麺と、板に書いてあるが、糸は糸でも七八分の平紐の様な糸になつてゐる。うどんといふものは、汁で食べるものだと思つたら、あちらでは味噌をつけて食べるのがある。初めての時は馴れないので、咽喉へ引つ掛つて困つた。

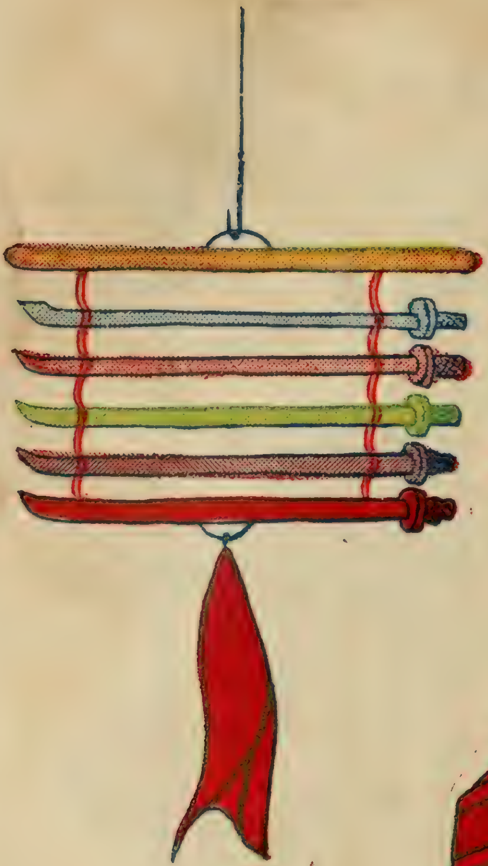

同聚福
刀絲麪

安宿や（客店）

宿屋と言つても、日本と同じ樣に上下がある。「飯店」とあるのは今ではホテルだ、本格は料理兼旅館である。「客棧」とか「客店」とあるのが宿屋だ、赤い布を一尺位の圓形の枠に、四分の一まで廻してあるのは、棧は棧でも安棧だ、日本流に云ふならば木賃宿で、出稼ぎ人や苦力が多く泊る。食事の用意はないから、本當に泊るといふだけである。

刀鍛冶（腰刀舖）

町の中には少い商賣で、場末に多く存在してゐる。大小各樣、色とりどりの刀が下がつてゐる。店では刀の鞘も作り。變つた形の槍や靑龍刀も作つてゐる。現在では實用品では無くなり、芝居の道具として殘つてゐるが、何處か支那らしい香のする商賣である。



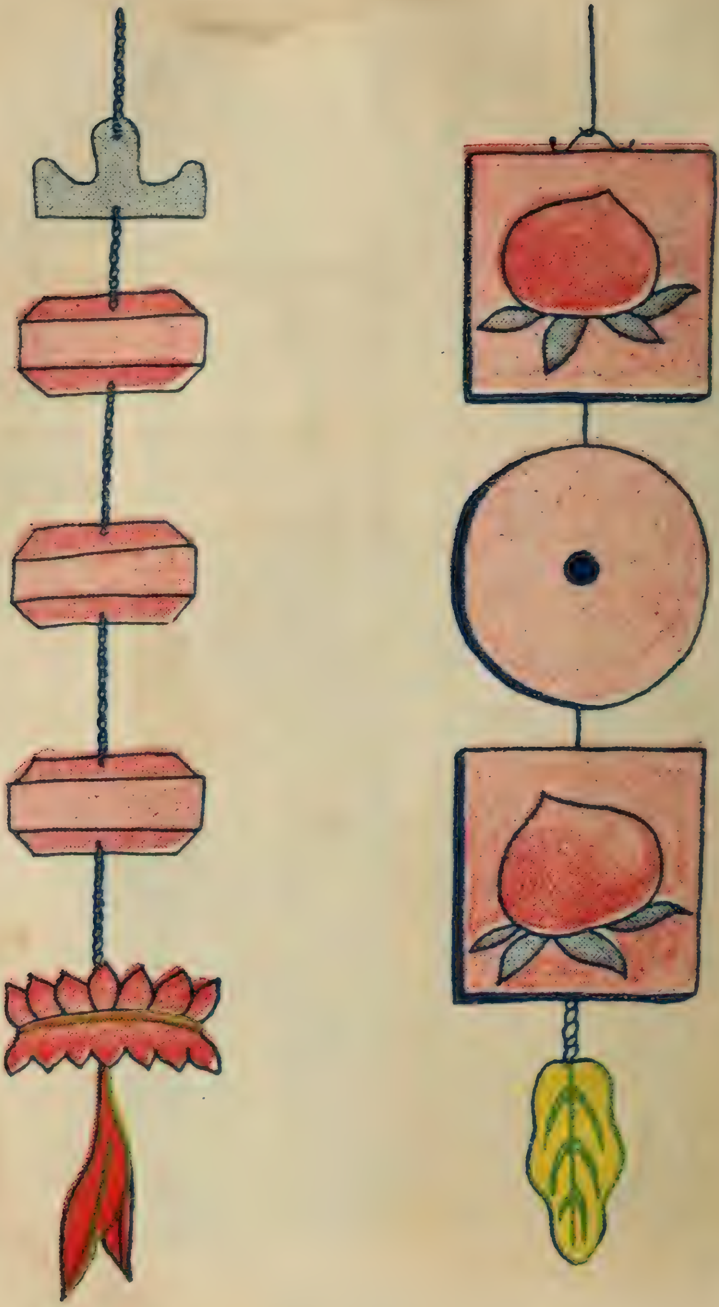
菓子屋（點心舖）

蒸菓子屋（蒸鍋舖）

日本でも菓子屋と稱されても種別がある樣に支那にもある。これは「蒸菓子屋」の看板である。蒸菓子屋はふかし立の饅重などを賣つてゐる、この饅重は中味は何も入つてないが、食事に食べるのは違ふ。白塗り板に桃を上下につけた所は効果的に見て成功だ、桃模樣は壽を表現するもので、支那の看板の飾りには、よく出てくるものである。話は違ふが、支那宮殿の扉の飾模樣に、福壽の模樣ちらしがあつた、福祿壽は、臣民の望むところで、王樣には祿は必要ないと云ふので、祿だけ拔かれてゐるといふのだ。面白い話である。看板の中央の丸は饅重の形を表したものである。

干菓子屋（糕乾舖）

油で揚げたり、砂糖でかためた干菓子を、主として賣つてゐる菓子屋の看板である。いづれも、その菓子の形を木で作つてあつて、色塗りがしてある、蒸菓子と干菓子になると、看板にも、こんなに違ひがある。



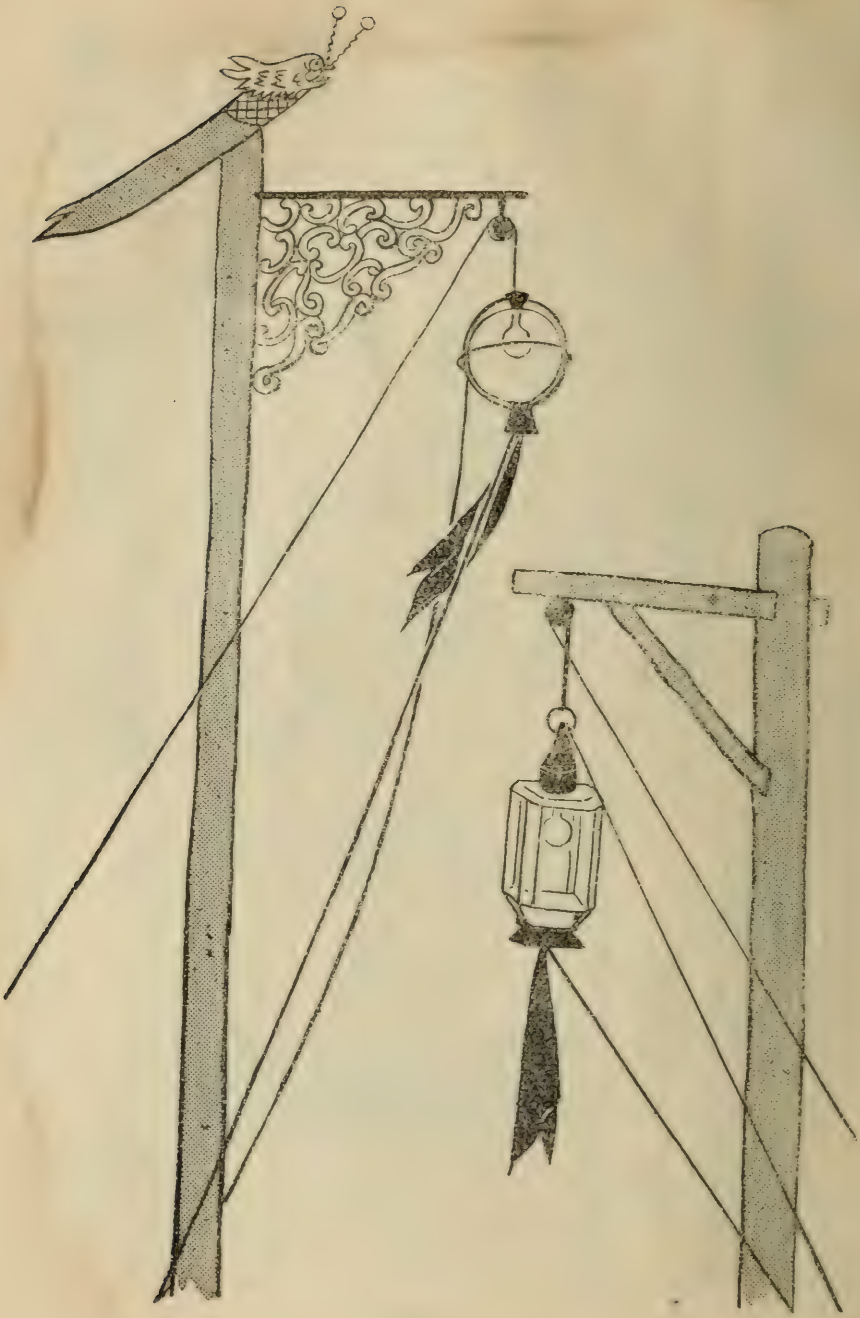
菓子屋の文字看板

菓子屋には、色々な文字看板がぶら下つてゐる。よく有る文字としては「糕花蒸糕」これは鶏の玉子を使つて作つた餅で、支那のカステラである。「八寶南糖」南方支那の八寶の一つ、即ち砂糖の事「糯米元宵」は、元宵節に食べる餅の事「西洋片糕」は西洋菓子「手奶餅干」これはビスケット「龍鳳喜餅」は結婚式祝用の菓子「大小八件」何か事件でもある様だが、これはカステーラに似た、蛋糕が色々あるといふ事だ「官禮茶食」とあれば、これは一般向きのお茶菓子及贈答用の菓子である。以上の様な文字を甘黨は心得おくべきである。ビスケットが欲しくても、筆談の際假名書では通用しない。龍首の看板の出た菓子屋は饅重も作るといふ菓子屋である。風鈴が下り、更にその下に桃の形、柘榴の形をブラ下げてゐる。桃は多壽、柘榴は多子を意味する吉祥紋である。

桂花蒸糕
八寶南糖
糯米元宵
西洋片糕

風呂屋（澡堂）

風呂屋は錢湯である。日本人は潔癖だから風呂へ入る事は日課の一つと心得てるが、支那人が風呂へ入るのは一種の贅澤で、命の洗濯である。我國なら何々湯と云ふところを、支那では「何々澡堂」とか「何々塘」の文字で現はしてゐる、どちらも浴湯の意味である。又看板に「盆地 兩便」「代剪髮處」「代賣開水」「清水池塘」なんていふ文字が書いてある。盆地兩便と云ふのは、盆は一人風呂、西洋風のバスである。池と言ふのは共同風呂で日本風の錢湯と同じだ。ブルジョア氣取り屋は、みんな盆へ行きたがる。池は中以下の者とされてゐる「代剪髮處」と云ふのは、理髮職人が居ると云ふ事である。湯に入つて理髮して、按摩して飯を食つて、一日のんびりするのが、支那人の風呂入りだ。試しにどんな種類があるか、北京のある湯屋の品目と價段表を記してみよう。何角とあるのは何十錢で、分は



何錢の事である。

官盆（最上風呂）六角。客盆（一人風呂）三角。池塘（共同風呂）一角。搓澡（流し）一角。修脚（爪切）一角。刮脚（足剃）一角。剃頭（理髪）一角五分。刮臉（顔剃）一角。

爪切りは大きなナイフで、見事に切つてくれる。流しは氣まりの悪い位に垢を落してくれる、日本流の流しと違つて、皮をむくと云ふた方が早い位だ「代賣開水」は熱湯を分賣する事「清水池塘」は清潔の水を使ふといふ事である。是非あちらへ旅行する人は、一ぺんは支那風呂へ行く事をお進めする。

風呂屋の入口には必ず竿頭高く燈籠が掲げてある。近頃は電氣入りの物が多くなつて、ガラス張りに成つてゐる。昔は油をとぼした物だといふ。これは營業時間を示すもので、これの上つてゐる間は商賣をやつてゐる、揚つてなければ商賣休みである。擧一明三、さすがは支那だ。

良新池

舊式劇場

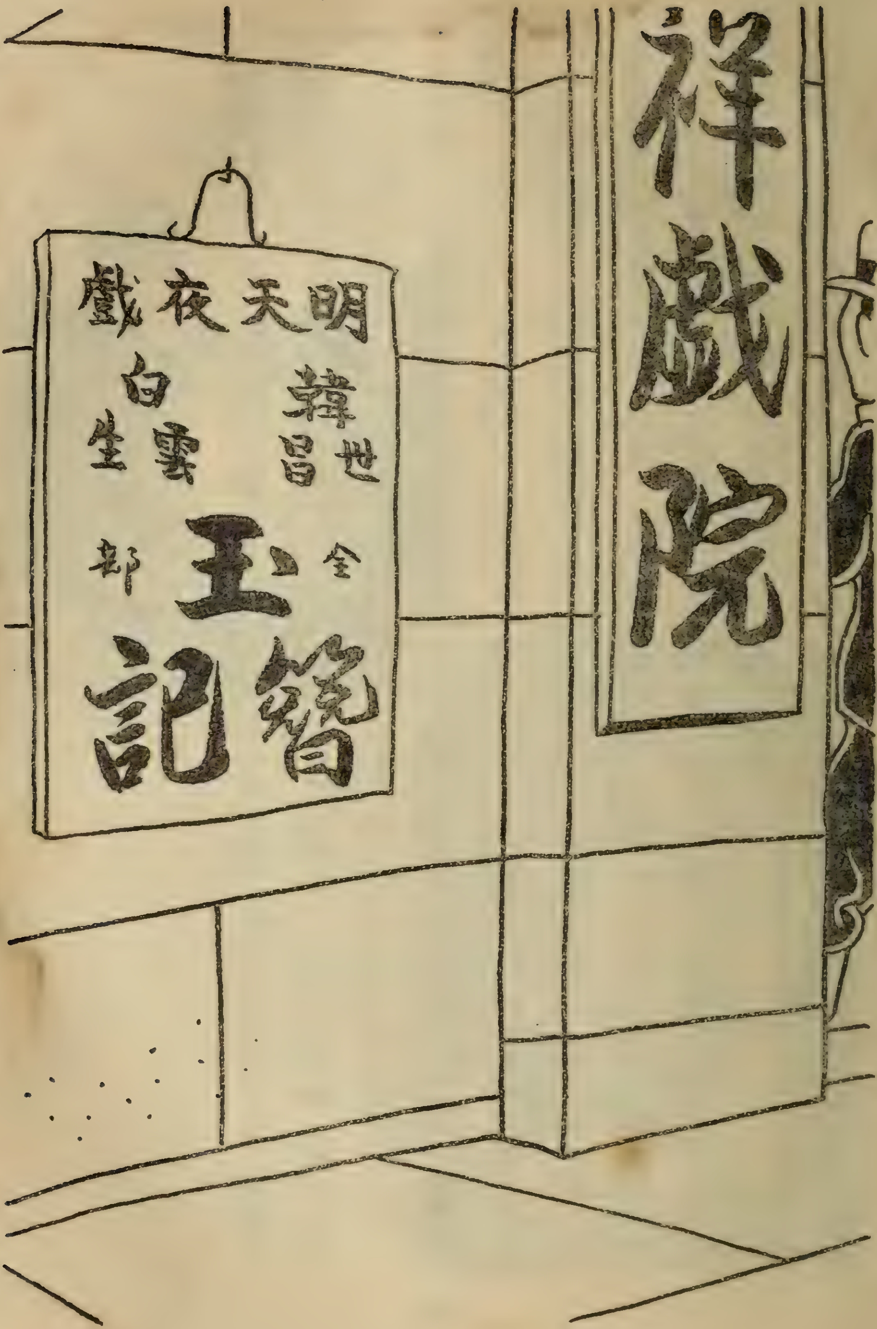
舊式の劇場は「何々茶園」「何々舞臺」と言ふて居る。日本の何々座と同じである。圖の樣なアーチは、普通の商賣家では開店や大賣出しに用ゆる「彩牌坊」といふもので、芝居では初めての俳優を招聘した時、その人を歡迎する意味と、世間に廣告するとの、二ツの意味で作られたものだ。上の文字は俳優の名で、下は小屋の名前である。

かうした舊い名の芝居小屋は、舞臺も古風で長方形の舞臺を巡つて高欄などがある。古い型式を見たくば、どうしてもかうした所へ足を入れなくては駄目だ。支那人の芝居好きは大した物で、芝居の話が出來なくては、普通人でないとさへ言はれる程だ、だから往來で遊んでゐる子供の遊びと云ふのも、芝居の立廻りの眞似事が多い。日本では芝居を見るものになつてゐるが、あちらでは聞くものゝ一ツに成つてゐて、聽戲と云はれてゐる。

評劇
劉
翠
女王
富貴舞臺

新式劇場

新式の芝居小屋は何々戲院と多く稱してる。院と言ふのは日本だと、病院か、お役所、新興の學校に使用する文字だ。新しい芝居小屋はステーヂが、卵を縱に二つに切つて横にした様に、半楕圓形になつてゐて、舊式の角を丸めた舞臺と思へば間違ひない。支那人の芝居好きは、現在北京のラヂオ放送局から、一週間の中、五日間が、芝居中繼となつてゐるので判る。圖の左に文字の書いてあるのは、劇題と俳優名を記した、ビラを貼りつける板である。崑曲の雄、女形の「韓世昌」小生役の「白雲生」とが出て「玉簪記」と云ふ有名な狂言をやる事を記してある「今天夜戲」は今晩の芝居といふ事「全部」は玉簪記を通してやると云ふ意味である。支那の芝居は毎日、晝間と夜と狂言の替る事は勿論、その日その日が違ふので、見たいものがあつたら、やつてる日に見ないと見損つてしまふ。夜は六時から始まつて十二時頃ハネるのが普通である。新時間にすると翌日の午前一時が終演だ。



明天夜戲
韓世昌
白雲生
全部
玉簪記
祥戲院

回々教徒飲食店（回々飯館子）

支那人と言ふと、すぐ豚肉を想ひ出し、豚肉と言へば支那人を思ひ出すほどに、豚肉は支那人に缺くべからざる常食になつてゐる。が、これは又珍らしく豚肉の料理を絶對に作らない料理屋がある。それは回々教徒の飲食店である。回々教徒は豚を最も汚れたものとして、決して其の肉を食べない戒律になつてゐる。料理は豚肉を一切使はないで、羊肉一點張りである。さうした看板に「回々」や「清　眞」の文字が必ず付いてゐる。清眞と言ふのは、回々教を一に清眞教と言ふからだ。回教寺院は、いづれも清眞寺と言はれてゐる。

清眞回々の看板は赤ベタに黒字、一尺七寸位の板製。水差のあるのは黒字に白抜きで出てゐる、角の金具は赤、回々の文字のところは青色である。二尺に一尺位の板。下のはガラス繪で極彩色、大きさはやつぱり二尺に一尺位である。

町中に羊の頭の蒸燒にしたのを並べてゐる肉屋がある、これも回々教徒専門の店である。

回回

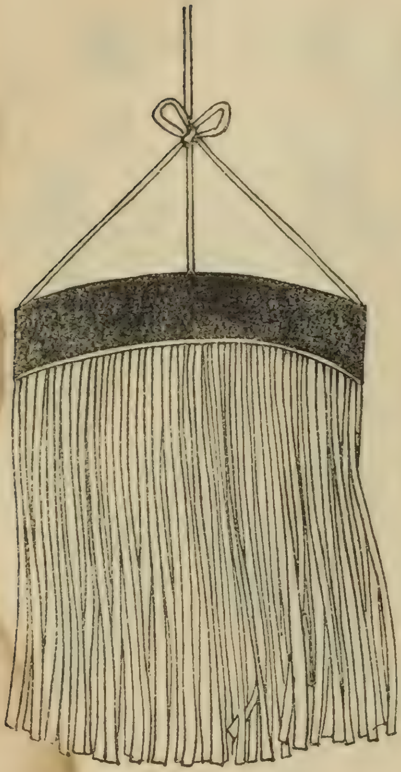
清真
回回

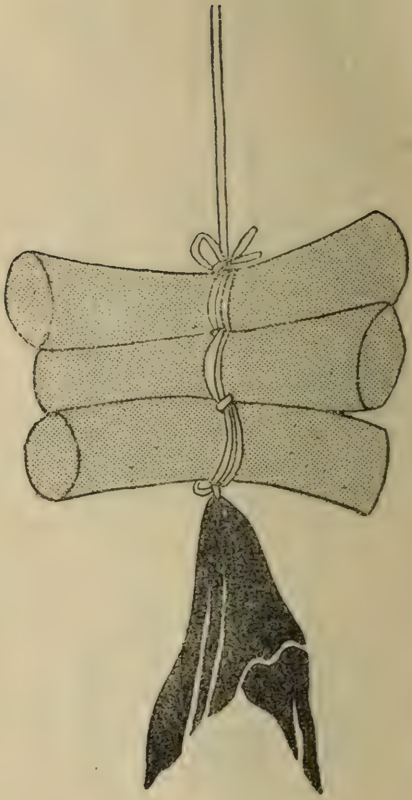
古清真教

一膳めしや（粗飯舗）

主として車力とか苦力の勞働者を相手にする、安つぽい飲食店である。丸い輪に赤や黄の紙を細く切つたのを下げてゐる。麵の表現と同じであるが、麵屋ではない、勿論メニューの中には麵は含まれてゐる。勞働者は一日四錢位で生活してゐる者もあるのだといふ事だから、暮しに於ては日本の勞働者は負だ。負けるのは暮しばかりでなく、勞働方法も格段の差があつて、到底日本に勞働者があり餘つても、あちらへ其儘もつて行けない。支那には日本以上に勞働者は餘つてゐるのだ。第一に賃銀の安價で、日本人向きでない。こうした勞働者向きの飯屋と言つても、こゝらへ來るのは良い方だ。

薪の樣なものを縛つた看板も一膳めしやで、これは尖餅を丸めた形である。五寸位の丸い木で作られてゐる。色が茶色をしてゐるので薪と間違へた人があつた。尖餅はうどん粉で出來た薄い餅で、中へ肉とか野菜、味噌なぞを入れて丸めて食べるものである。確に安い食物だ。これを看板にする位だから「粗飯舗」に違ひない。



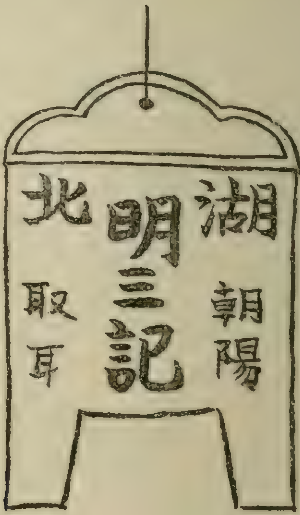


理髪屋（剃頭舖）

美髪とか理髪とか言ふのは、支那本來の職業でないので、從つて文字としても、新しいものだといふ。左の圖の周圍に火焔狀の襞を取つた赤布で、下部が魚尾の樣に三角になつてゐるのは、象形文字の丙字形で、正月の入口に吉祥發財の意として用ひる紙錢の變形だと言はれてゐる。大變緣起のよい形であると言ふので、理髪屋の布看板はいづれも下部が三角に成つてゐる。一尺位の木の枠にどれも布が下がつてゐる。湖北と言ふ文字を、隨分見うける、これは廣東の西、湖北省の人が理髪屋に多いので、蘇州が美人の本場と言ふのと同じ意で、わざと湖北と入れたものだと言はれて居る。最近はパーマネントが流行つてきたので、北京あたりでは「湯熨」と云ふ看板をだした家がある。湯熨がパーマネントの譯語とは面白い。尙パーマネントはモダンガールの表象となるので、日本に負けず、若い娘も中年の女も湯熨だ。上海以南でパーマネントの下部を、パツと擴げたのは商賣人女、つぼめたのは素人と、相場が決まつてるとの事である、

理髮處

整容


湖北
明三記
朝陽
取耳

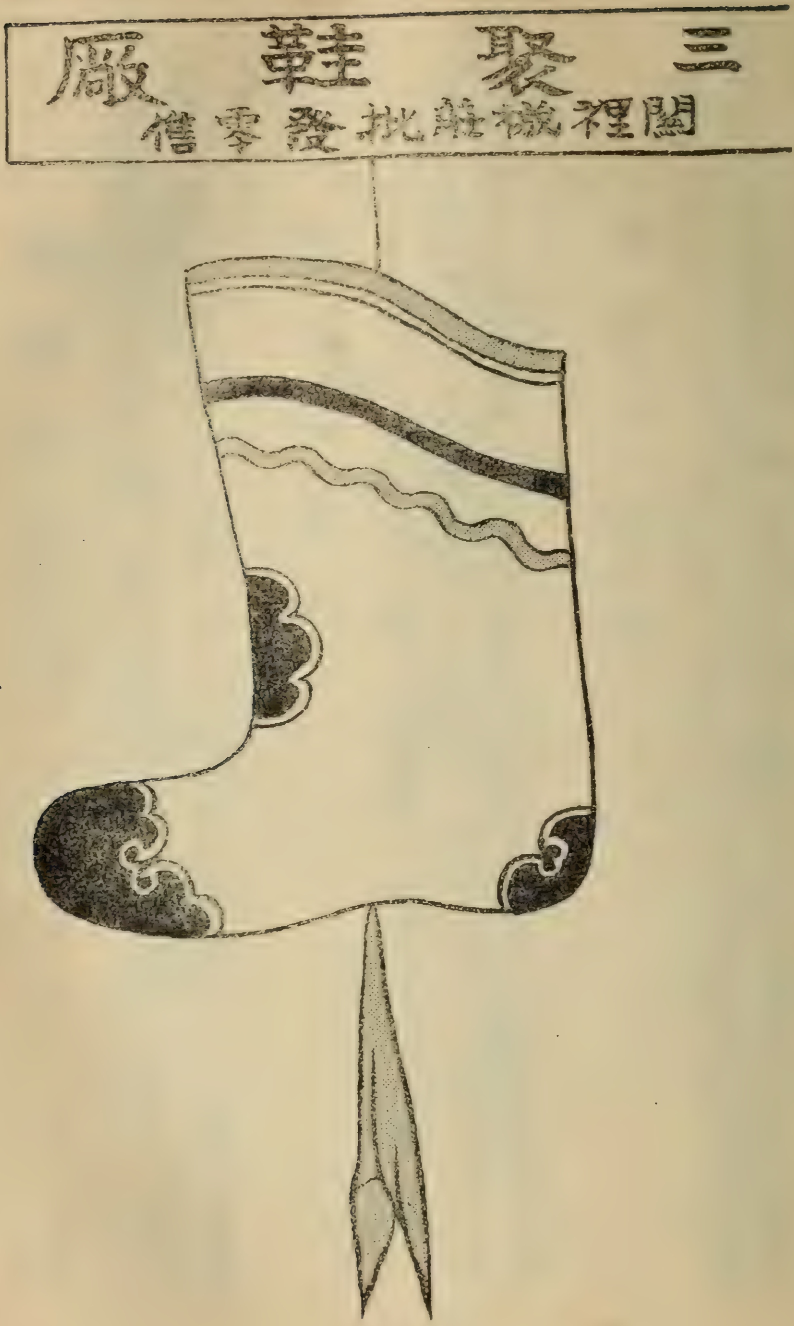
八卦屋（指南封館）

八卦は占の事で、日本と同じだ。我國も相當この道は盛だが、支那人の八卦好きな事は、箸が轉んだ事でも、見て貰はねば氣が濟まない位で、それ旅行、やれ緣談、病氣はもとよりの事、一から十まで占で決定され、軍隊の進退も八卦で決められてゐると云はれてゐる。そんな有樣だから、大道易者先生の張店は至る所で見出されるのは、ちつとも不思議ではない。易者先生も中には堂々と一戸を構へて「相士」と稱してゐるのもある。こうした者には相當の學問と見識を具へてゐるので、見料も五六十錢位から、相手によつて高く取るといふ。もつとも見てもらふ亡者も心得たもの、先に價を聞いてから、占つて貰ふ。一戸を構へた連中は、八卦屋の意味の「問心命館」「指南封館」なぞの看板を出してゐる。圖は常店程度の指南卦館の八卦臺で、軒先から吊り下げない看板である。

指南卦舘
解識五行生尅理
能占八卦後先天

靴や（鞋莊）

圖の樣な、ぬひぐるみの支那靴の看板を出してゐる店は、今は舊式靴屋の方の看板と成つてゐる。圖のは底が二尺位の大きさのものである。では新式のはと言ふと、大きな白木綿の長布に「○○鞋莊」と墨くろ／＼と書いて、周圍に赤のヒダ／＼を付けて目を呼んでゐる。新式と云ふ方の店ではハイヒールの靴も賣つてゐる。樣式もそれに準じてモダンな西洋化してゐる。支那の西洋化と言ふ事は主としてアメリカ化の事である。靴屋を探す時は「鞋」といふ文字を探せばすぐ判る。すべて支那商人は掛値をするから、云ひ價で買ふべからずといふのが常識になつてゐる。もつとも最近は信用のある店では正札販賣をやつてゐるから、値切つても負けないから、よく店を見てから入らないと、少々赤い顏をしなければならないかも知れない「無二價」と札があるのは價に二なしで、掛價なしの事だが値切ると負けるんだから、この點の驅引は仲々むづかしい。


三聚鞋廠
閣裡機鞋批發零售

銀碗屋（銀碗舗）

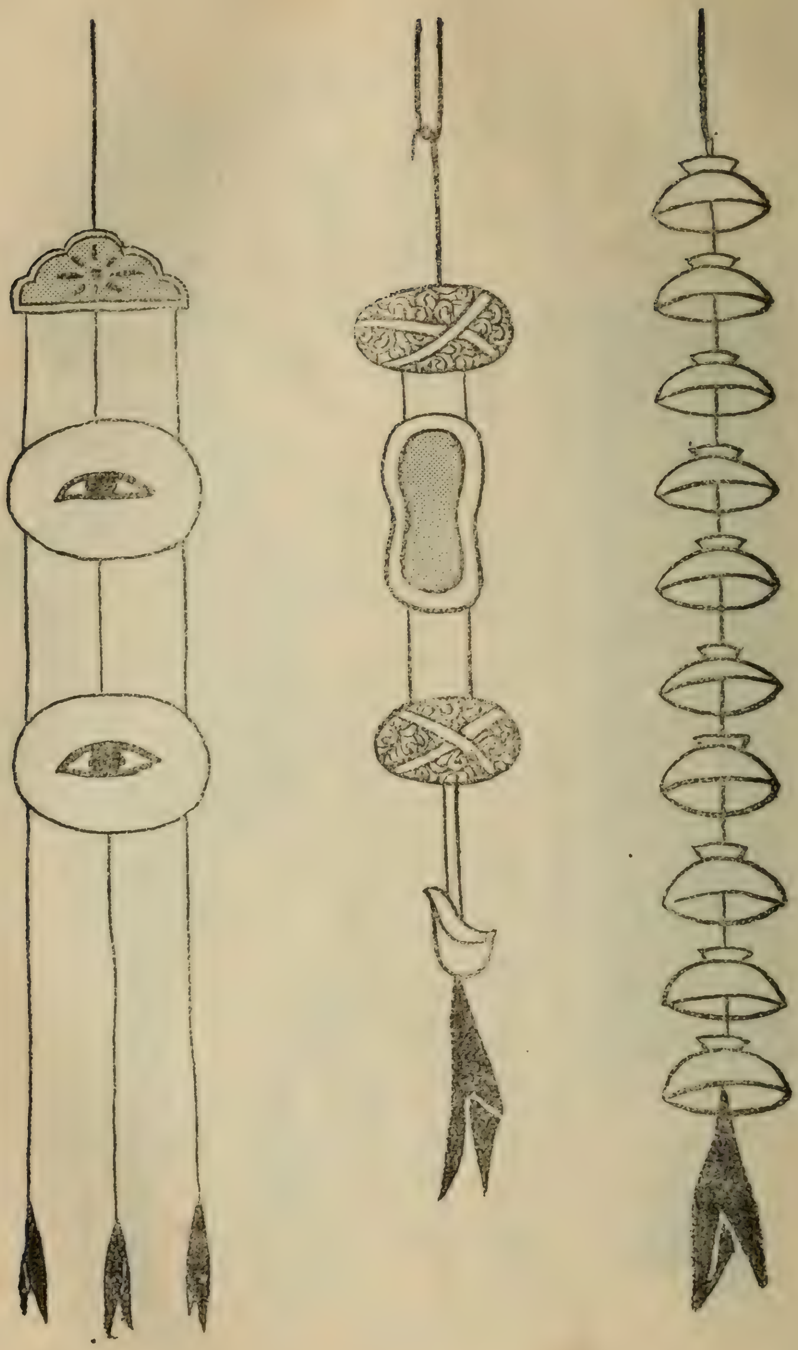
銀の貴重な事と言ふより、好きな事は支那人特有だ。銀の碗を製造して販賣してゐる店の看板、實物大の銀碗を十ほど連らねてゐる。看板だから、銀は使はないで銅器へ銀メッキをしてゐる。

鍛冶屋（鑪房）

トンテンカンとやる鍛冶屋の看板だ。音だけで鍛冶屋だと解りさうなものだが、あちらのは入口に看板があつても、仕事場は奥の方にあつて、往來から見えない家がある。一番上の唐草模様の楕圓は銀色。二番目のは周圍金、中央黄色。次は最初と同じ、四番目は金色に塗られてゐる。いづれも木製。

眼藥や（眼藥舗）

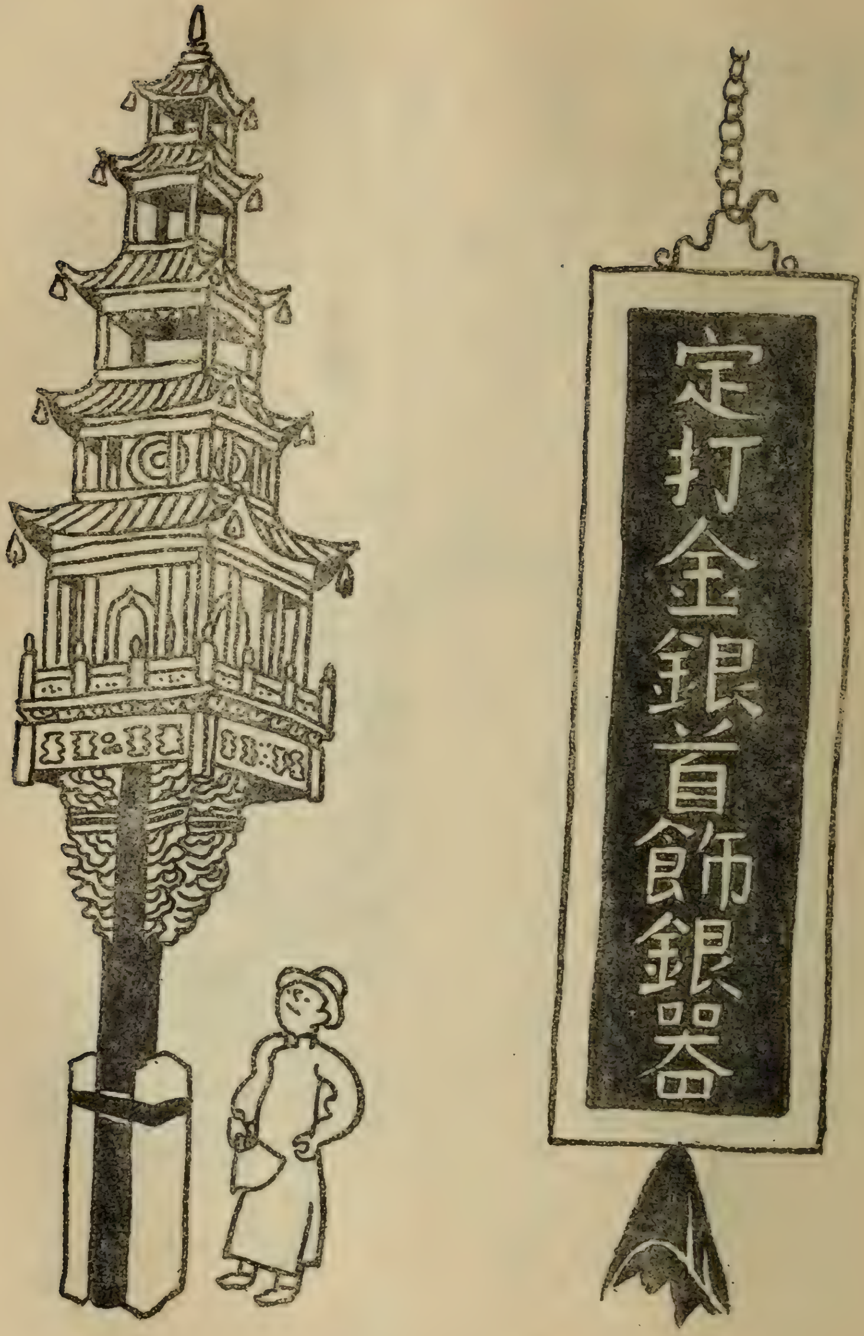
目藥やだけあつて、眼のついた看板だ。たゞ眼だけの感じだと眼醫者かと思はれる。藥屋の店に下げさうなものと、思ふがこれだけ下げた家があるところを見ると、さういふ家のは、きつと家傳〇〇眼藥といふのかも知れない。



金屬や（金店）

金屬の細工兼賣やの看板である。日本の金物屋とは大分異つてゐる。主として金銀等の貴金屬、錫製品を扱つてゐる。看板の文字の中に首飾りとあるは、これは所謂首飾りではなく裝飾品の意味である。白色の縁のついた五尺に一尺五寸位の板に、赤字に金文字で書いた看板が多い、裏は「○○金店」とある。ショーウインドのある店では、品物を並べてゐる。モダンの店は優勝カップや優勝旗を出してゐる。そして童叟を欺かずとか、貨眞に價實なりとか、顧客を悞らずとか、お定まりの文字が看板に付いてゐる。

金銀を扱ふので、金銀玉樓といふの意からか、店の前に物凄い樓閣を建てゝゐる貴金屬やがある。これは銀細工を主とする店のものだと云ふ「遠近馳名」と自ら柱に書いてるところなんて、心臟ものである。


定打金銀首飾銀器

扇子屋（扇畫店）

日本の芋屋は夏は氷屋に化けるが、扇子屋は支那では夏だけの事で、こちらの様に扇子専門の店は無い、平常はいろんな燈籠を作つてゐる。燈籠屋が扇子屋に化けるのである。だから「扇畫店」とも「燈籠鋪」とも二様に言へる。大きな扇を看板に出してゐるのは、日本でも見うけるのと同じだ。日本のは黒字に赤い日の丸の軍扇が多い様だが、支那のは白扇だ、白扇身につかずなんテ洒落は支那では通用しない。

扇張り（粘扇子）

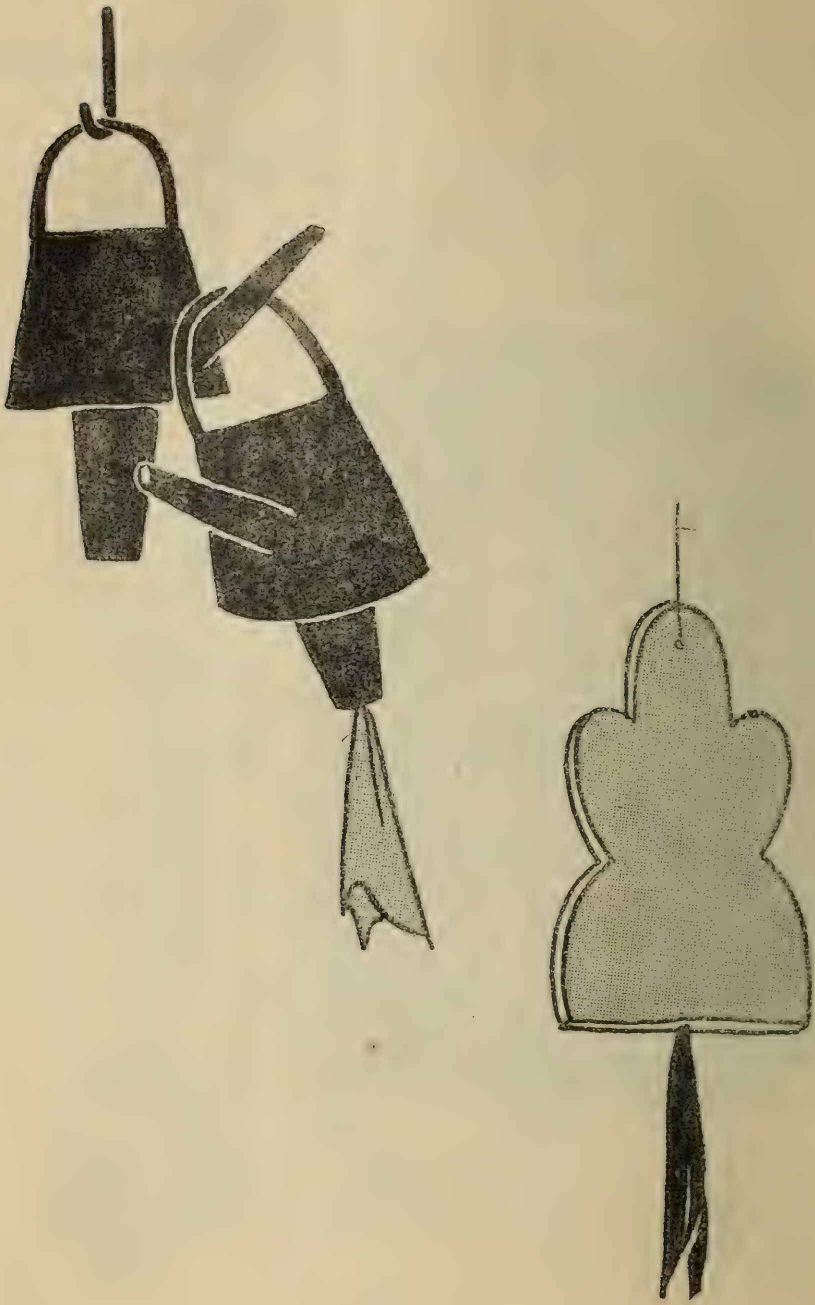
日本でも昔は地紙賣りと稱して、若衆のトウのたつたのが、扇の地紙を賣りながら、歩いたとある。この扇張屋は、お好みの地紙を持つて居て、賣り乍ら卽座に、貼り換へてゆく行商人である。綱に鈴を付けた商賣道具の箱を抱へて歩いてる。この鈴の音で、町の人人は夏の來た事を知り、扇張り屋の來た事を知る。風雅な商賣である。無言の行商人、丁度日本の定齋屋に似てゐる。

慶餘成雅扇莊

呑湯屋（泡水店）

あちらの人達は、けつして生水を呑まない。必ず一ぺん沸かし湯にしてから用ひる。相當の家庭では自家で沸かすが、下流どこになると。湯は外の圖の樣な看板の出た呑湯屋へ行つて買つてくる。土造りの竈に火をたいて、ブルキ製の藥鑵を十五六並べ、ぢやん〱沸かしてゐる。買ひに來ると、それから湯を出して賣つてくれる。奥か店先の隅には、簡單に湯茶を呑ませる設備もしてゐる。この呑湯を買つてきて、往來の苦力達に、茶碗一ぱい幾らで又賣する商賣もある。葉茶の小賣、呑湯の又賣、支那の下流どこの生活は案外樂である。

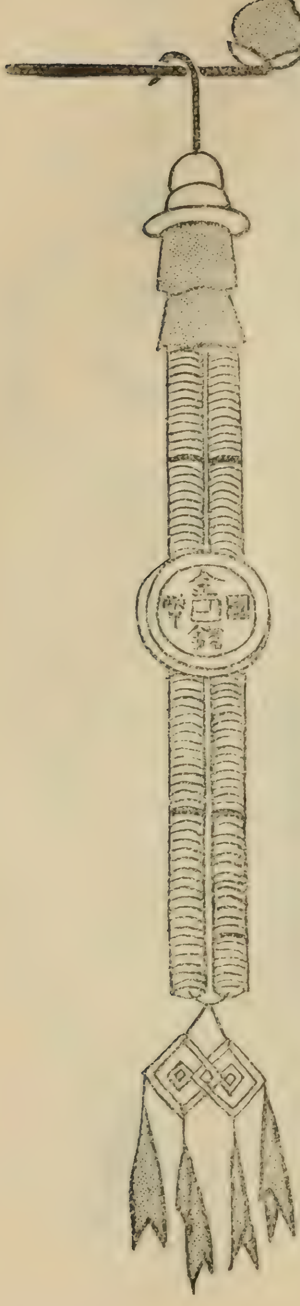
實物のブルキ藥鑵をブラ下げた看板は振るつてゐる。右下は板製で二尺巾一尺五寸位のもので湯茶をうる店の看板である。黄色に塗られてゐる。この看板の方は湯の外に、葉茶も賣つてゐる。



兩替屋（錢莊）

銅の空棒八個を繼いで中央に「金銀國幣」と彫つた穴錢を挾んである。上下に飾りが付いて、一番下には例の如く赤布が下つてゐる。銅は眞鍮メツキをしてゐる。中には簡單に全部を木で作つてしまつてるのもある。兩替屋は俗に「錢莊」と言つてるので、あつさり錢莊と書いた看板だけの家もある。朱塗りに金文字が多い。大道の片隅に小錢を積んで店を出してゐる露店兩替屋もある。大道のは大きく周圍を鐵の棒の柵をめぐらして、外から手を出した位では、いくら手の長い人間でも屆かぬ所に、金庫を置いて用心をしてゐる。兩替屋の番頭や手代の錢の數へ方の鮮かな事と、僞造貨の鑑定のうまい事は、びつくりする。切り賃は十圓について十錢が相場だ、宿屋の支那ボーイに賴んだら二十錢差引いて寄こしたので十錢不足だと言ふたら、不足の十錢は私の足代ですと濟ましてゐた。

取引は一切晝間で日が暮れると絕對にやらない。左の筒形の二本棒は穴錢を束にしたのを表はしてゐる。上部にある桃は、殖えるを表し。下の二ツ菱は「華勝紋」といつて吉祥を表してゐる。

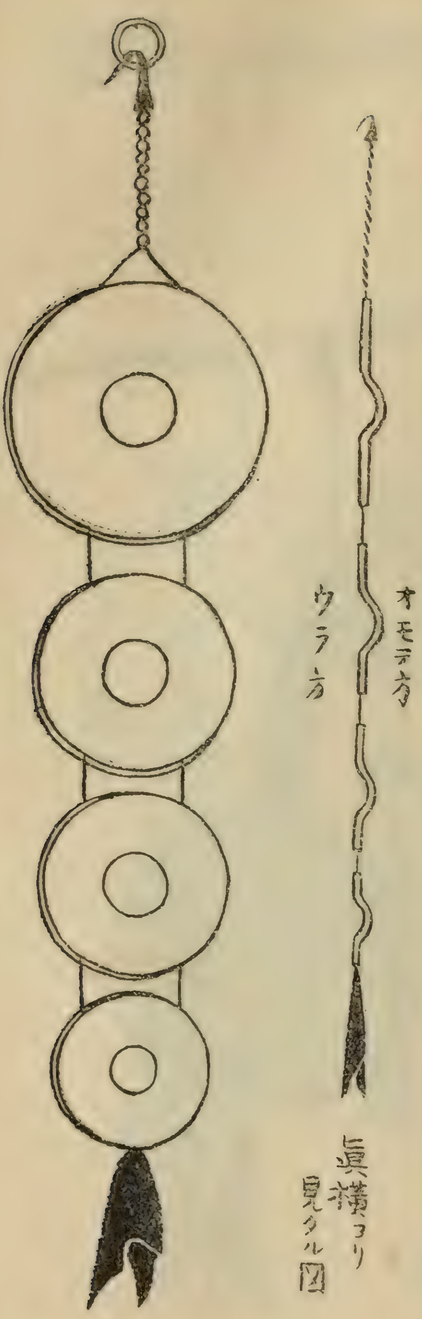


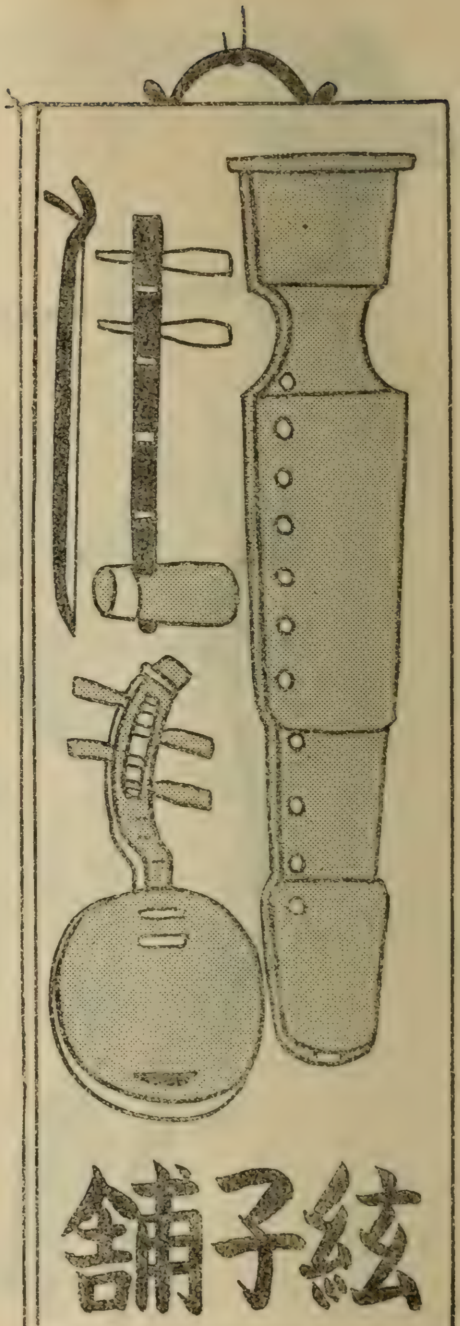
錢莊

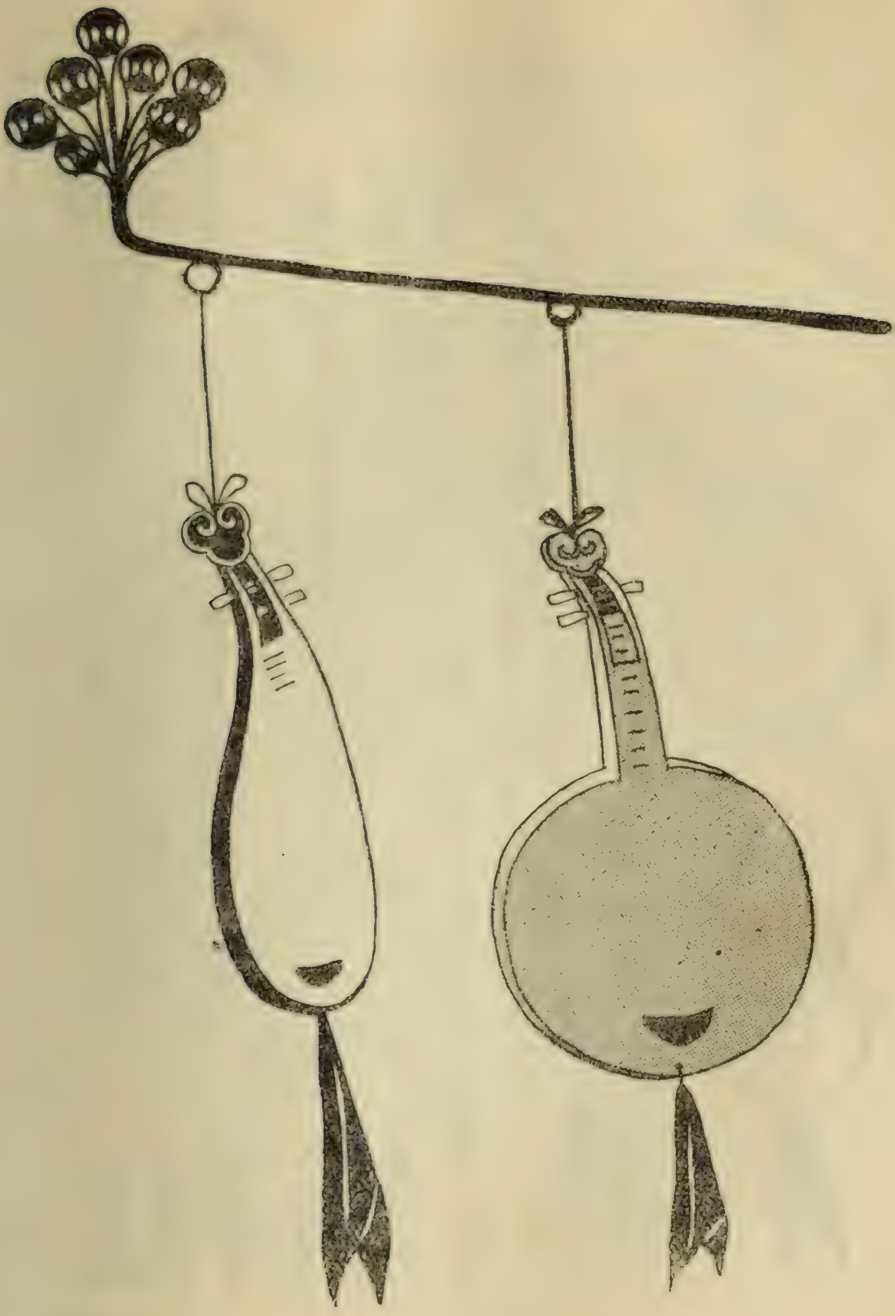
樂器屋（絃子舖）

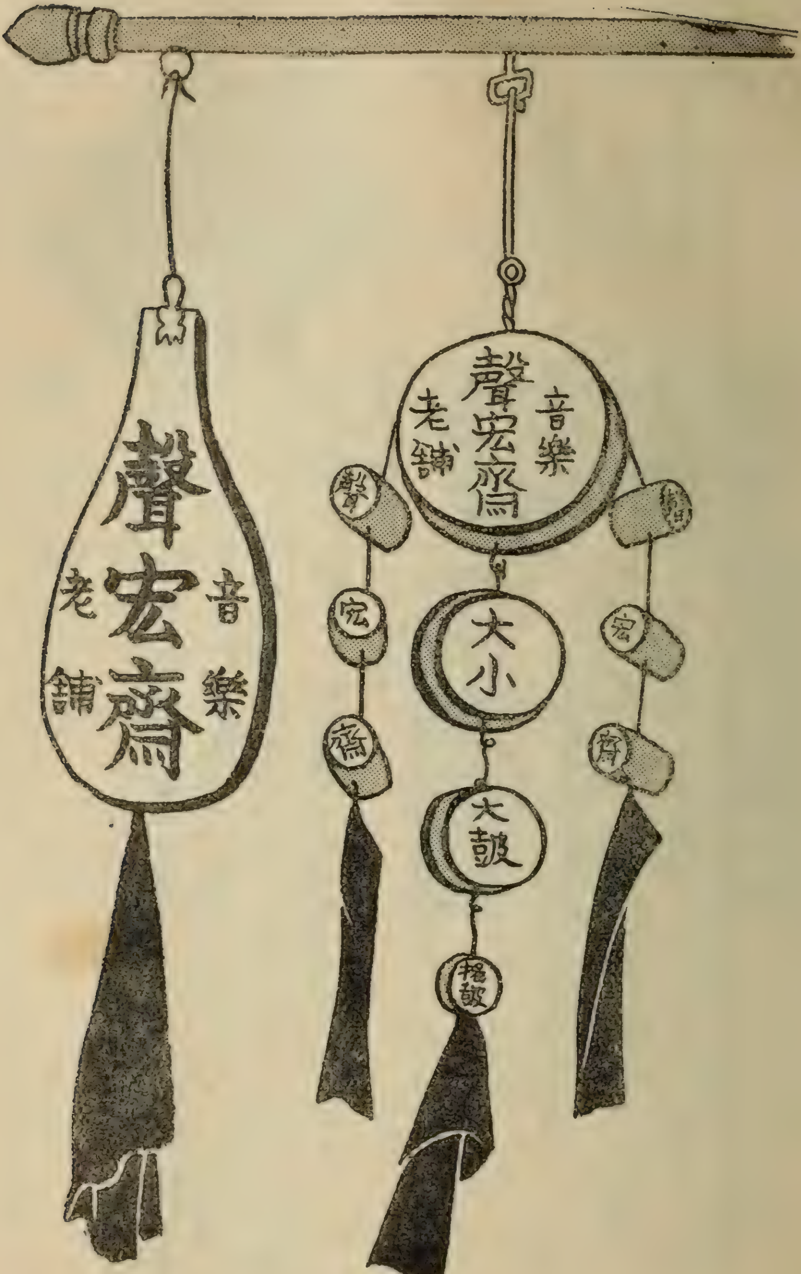
樂器にも色々種類があつて「絃子舖」と言ふと、琴瑟琵琶類の絃樂器を賣る店だが、今では胡弓や月琴まで賣る樣になつてしまつた。銅鑼等の鳴物道具屋は、樂器屋の中だが「弦子舖」には無く「响器舖」と別格に扱つてゐる所がある。横から見たところを入れておいたので、裏面から見た感じは、お解りの事と思ふ、私の見たのには裏に「响器發賣」の四文字が記してあつた、大きいのが二尺圓位で段々小さくなつて行く、いづれも實物である。

次頁にあるのは琵琶と月琴であるが、右は長さ二尺巾八寸位、左は三尺五寸圓徑位の實物大のものを下げてゐる。三圖のは太鼓搖鼓を賣る店の看板だ「聲宏齋」と言ふのは、その店の名だ、こゝのは「音樂老舖」になつてゐるが、製造しながら賣つてゐる家は「音樂作房」と成つてゐる。いづれも實物を下げてゐるので、目に一文字なくともすぐ解る。から別々にしてゐるが。三種類賣つてゐる店は、みんなブラ下げてゐる。


オモテ方
ウラ方
眞横ヨリ見タル図


絃子舗



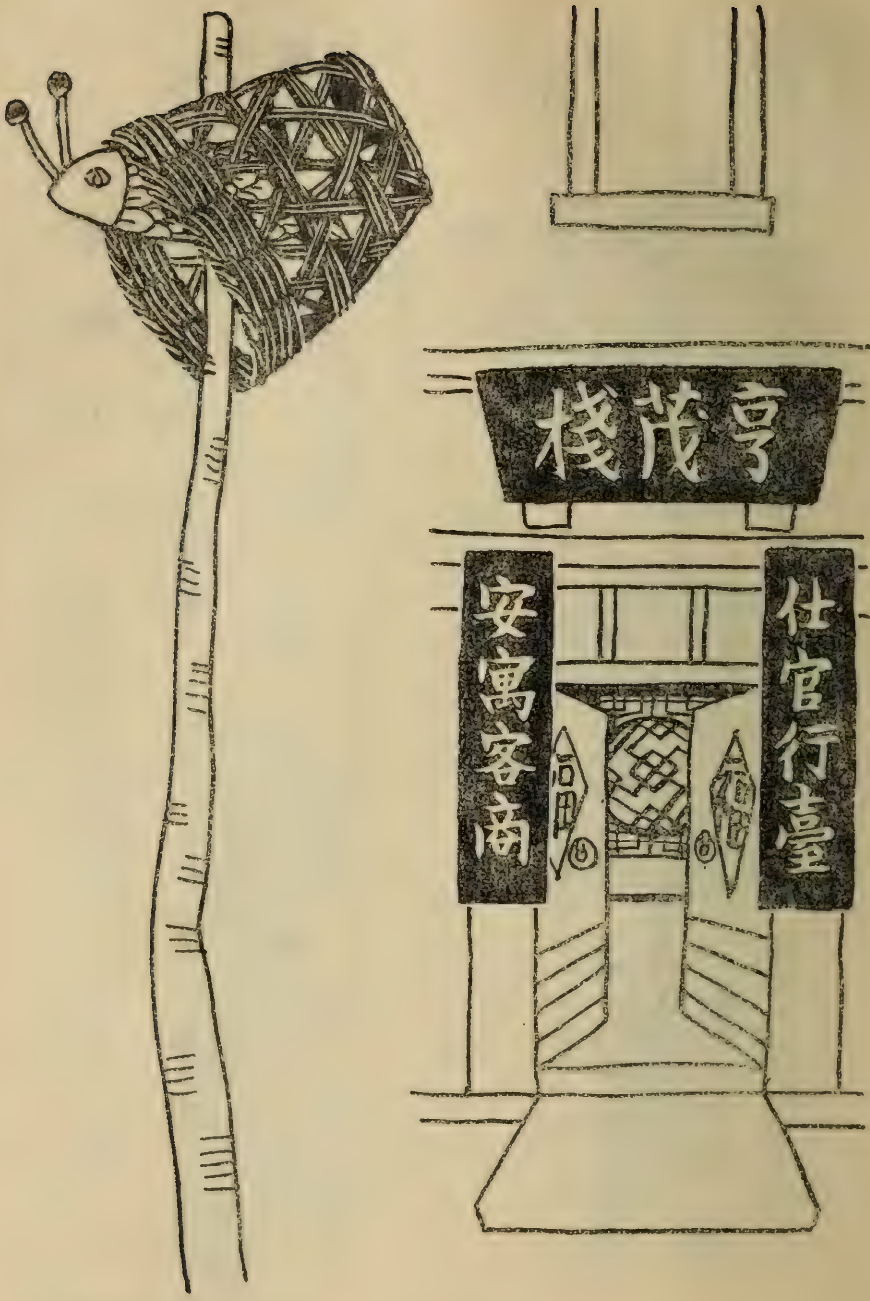

聲宏齋
音樂
老舖
聲宏齋
音樂
老舖
大小
大鼓

宿屋（客棧）

宿屋と言つても普通の宿屋で、日本なら商人宿と言ふところ。こゝらの宿の名物は南京虫だ。日本人は非常に嫌ふが、支那人は、日常茶飯事で、平氣の平ちやらである。宿屋も都會になると棧をやめて「〇〇旅館」と日本流を眞似てるのを見うける。入口の左右に聯があつて「仕官行台」「安寓客商」とある。これは宿屋のお定まり文句で、役人さん、商人さんのお泊り所といふ意味を表はしたものだ。

田舍の宿屋

柳條製の籠の中から、一尾の魚が顏を見せてゐる。初めは魚屋の看板かと思つたら、宿屋だと聞いてびつくりした。これは鯉魚龍門に跳ぶといふ意味を持つてゐて、昔は都へ文官の試驗を受けに行く若者達への緣起を祝つての事から出たものだといふ。緣起好きな支那人の事とて、どうせ泊るなら、此處でと云ふわけに成る。今は苦力や馬方相手の馬店とか小店と云ふ、極く粗末な宿屋の印である。

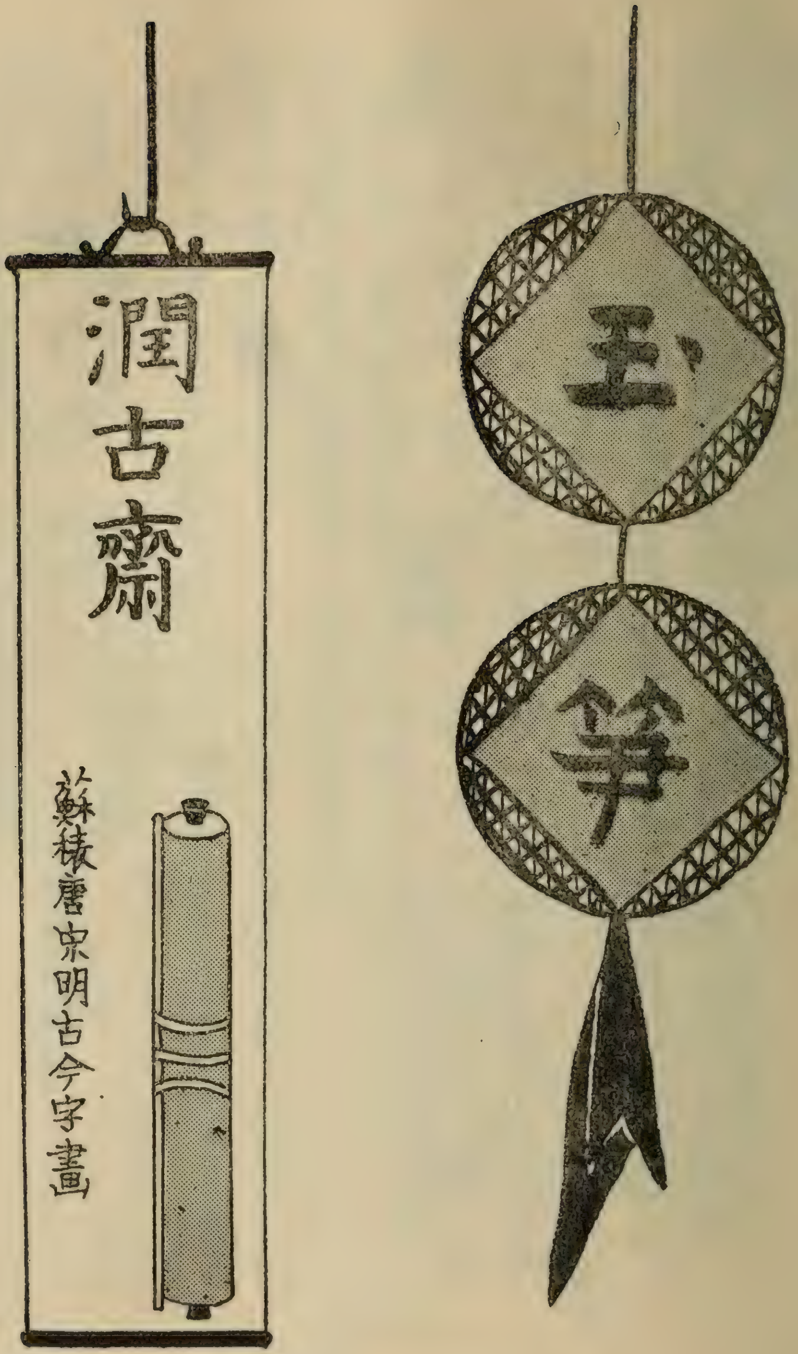

亨茂棧
仕宦行臺
安寓客商

竹細工や（竹子房）

竹で圓く輪を作り、中に細かい、竹の網をはめ込んで、その上に赤い紙を貼つてあるだけである。蒸籠類の中敷きに用ひられるものを、多く作つてゐる。その暇々に竹による籠類を編んでゐる。籠と云つても左右四五尺位で、取ツ手のついた物もあるので、簡單には片づけられない。あちらで玩具を買つて、トランクを買ふ程でもないので、大きな竹籠を買つて、大へん調法をした。

表具や（裱糊匠）

表具師の看板である。板へ刻つてあるのもあるが、大概は墨でかいてある。巾一尺二三寸、長さ五尺程ある。圖にある樣な卷物を作り、又掛軸も作る、掛軸は全體の板の形がそれである。潤古齋と言ふのは家號である。いゝ店になると表具專門だが、安つぽい店になると、壁張りもするといふ。經師屋と表具屋が、別になつてない所は我國と同じだ。本來は經師と表具とは別なものだが、世の中がせち辛くなつたので、看板は別だが、中味はごつたである。

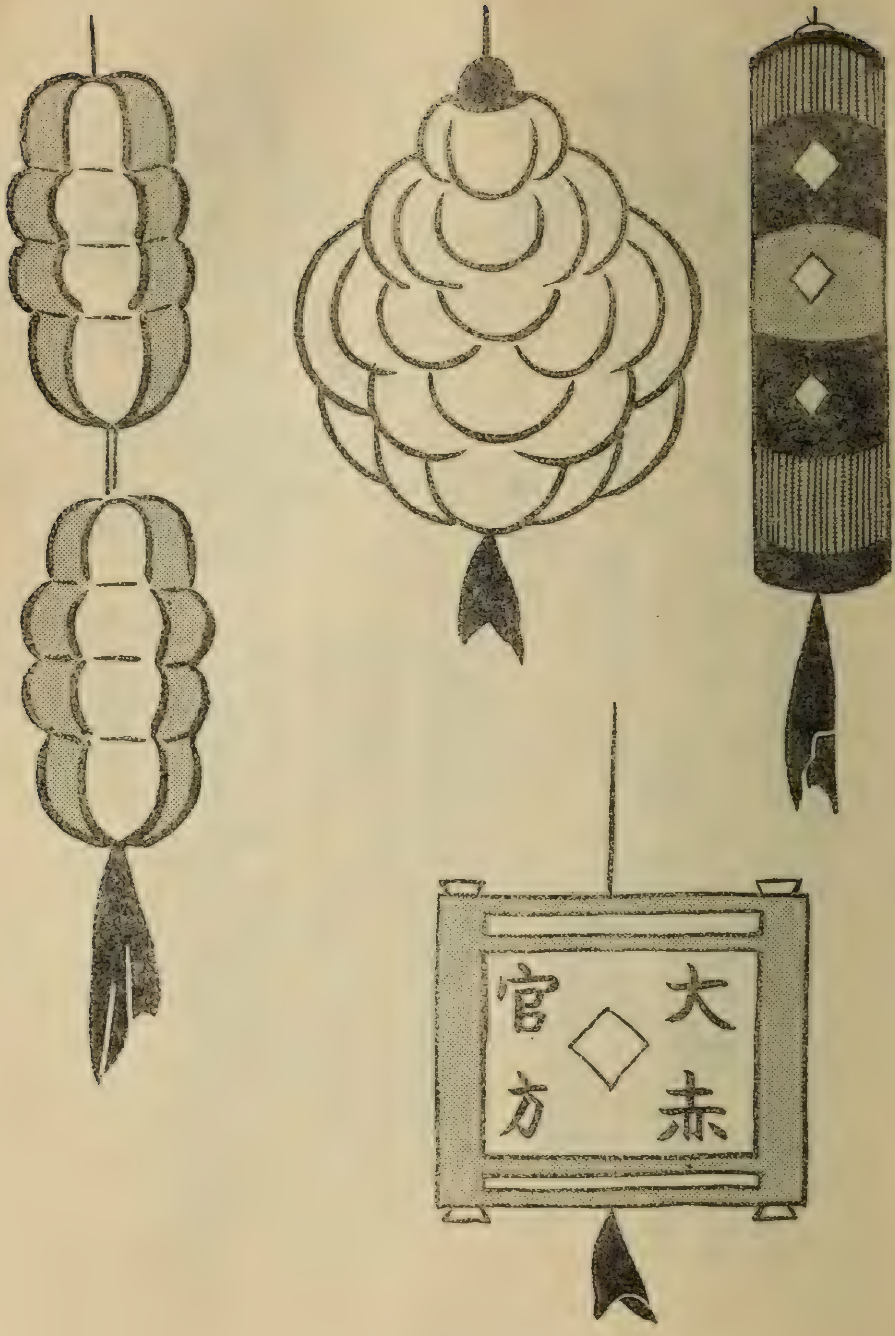

潤古齋
蘇裱唐宋明古今字畫
玉
筝

繪具や（顔料店）

繪具と言つても、日本畫や水彩畫、油繪の繪具を賣る店ではない。桐油、ペンキ、漆、白蠟等を賣るので、繪具やといふよりペンキ屋に近いと言つた方がよいかもしれない。然し染物の顔料も賣るので矢張り繪具やと言つた方が良ささうだ。

右の方に描いた丸い形の物は、夫々に美しい色で塗られてゐるもので、それだけでも、繪具屋と感づく程になつてゐる。便宜上一つしか描かないが、これが外の看板と同様一本の桿棒に四ツ六ツくつゝいてゐるのが普通とされてゐる。下の箱狀の看板の中央の◇は金箔が貼つてある。周圍は板木地色で塗られてある。

中央のフワ〳〵みたいの丸いのは油漆の看板だ。油漆はペンキの事である。上の吊し目と下の紅布とが赤で、あとは白である。浮袋みたいのは檳榔の油の看板だ、黄色と灰色とで交互に塗られてゐる。


大赤
官方

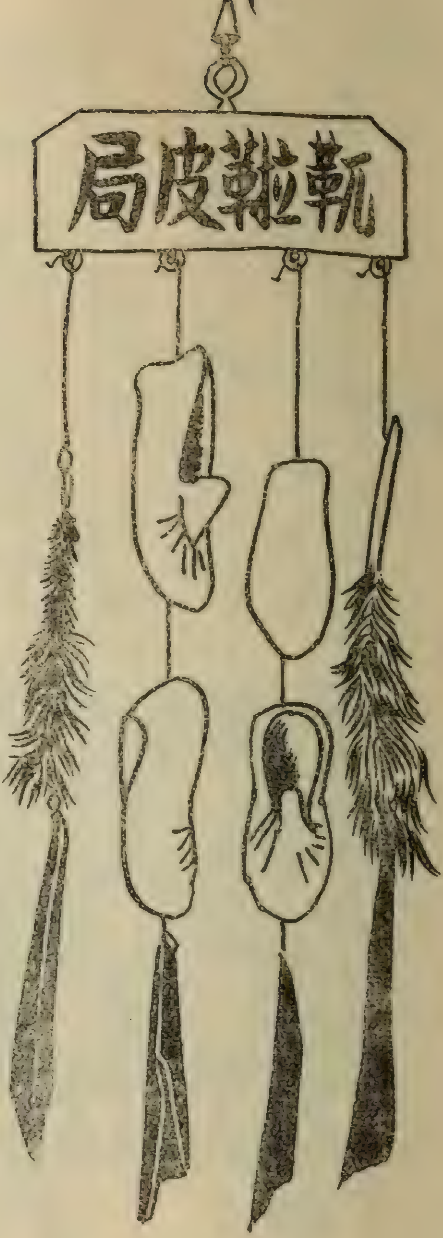
豚皮靴屋（烏拉兒鞋舖）

鞣皮屋の一種で、馬や馬車のある所、どこの田舎の町にでも、絶對必要のものだけに、鞣皮屋はある、だからこの鞋屋は獨立したものでなく、多くは毛皮や皮紐なぞ賣る店と一緒だ。烏拉兒鞋と言ふのは豚の皮で作つた縫目なしの鞋で、この中へ烏拉兒草と言ふ草を入れると寒さ知らずであると言ふので、百姓や勞働者には無くては成らぬ防寒具の一つだ。看板の兩端の房々したものは、毛皮も賣るといふ毛皮の看板である。

壺や（油壺舖）

壺と言つても、陶器製ではなく、柳條を編んだ籠に、上から油を塗つて、中身がこぼれぬ樣に出來たもので「油壺子」と云ふものだ。これは酒や油を入れる容器に用ひられる。圖の上の二個がそれである。下のは張子製の壺で、やつぱし上から油を塗つて丈夫にしてある。こゝでは上を油壺、下を酒壺と見るべきである。これは壺ばかり賣るのでなく、中身も賣る事も意味してゐる。

市
官

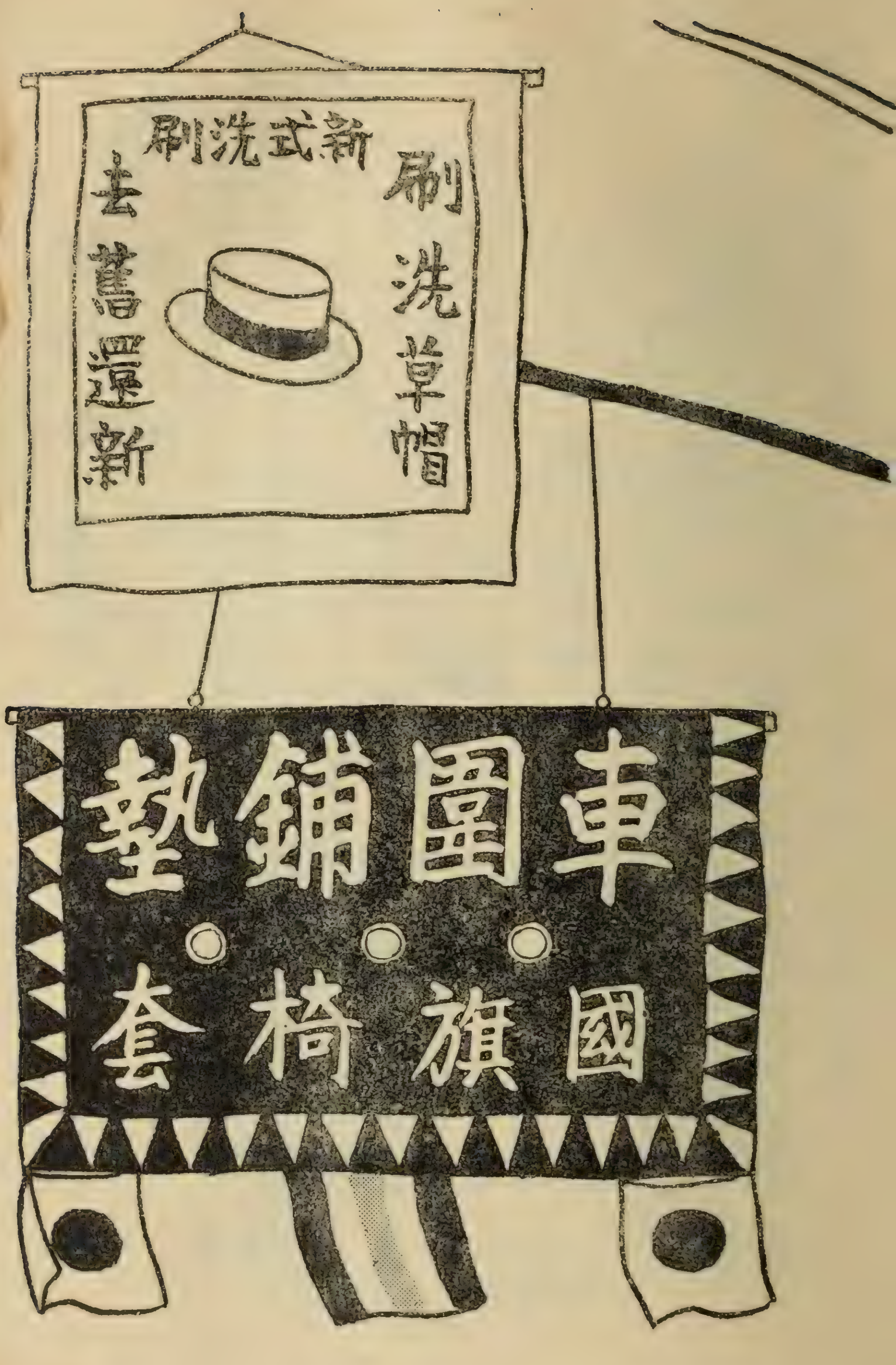

靰鞡皮局

帽子洗ひ屋（草帽刷洗的）

カンカン帽子の洗濯やだ。舊きを去つて、新に還すと言つてゐる。大道の片隅で「旦那帽子あらひませう」と日本ではやつてゐるが、向ふでは一戸を構へてゐる所なぞは、大したものだ「帽草」は麥藁帽子の事で、「刷洗」は洗ふ事だ。文字通り考へると、洗つて刷るといふから、何か印刷でもされるのでは無いか、と言つた旅の者があつたが、そんな心配は無い、そんな事をしたら、横腹に風穴がとうの昔にあいてゐる。

人力車の幌屋（車圍舗）

支那の車は内地のと違つて、梶棒の工合が少々上向きになつてゐる。上海方面では「黄包車」と言ふてる。この人力車の幌やカバーを賣る店の看板がこれだ。椅子のカバーや、國旗もついでに賣つてゐる。忠臣藏の義士の着物の模樣に似た白黑のダンダラが目を引く。


新式洗刷
刷洗草帽
去舊還新
車圍鋪墊
國旗椅套

提灯屋（燈籠舗）
傘屋（傘舗）

提灯やと言つても、日本と同じ様に傘も賣つてゐる。いづれも實物を下げてある。提灯や傘の外に燈籠も作つてゐる。油紙も賣つてゐる。提灯は長さ三尺位で三尺位の圓形のものだ、あちらの提灯は日本のが上から下へ疊める反對に、左右から中央へ疊める様になつてゐるのが多い。日本のは紙を主としてゐるが、支那のは紙の荒い布地を使つてゐる。しかし紙製のが無いのではない。この看板のは紙貼りである。傘は日本と大差がないが、日本の蛇の目の様な粹なものは無いやうだ。

タオル屋（手巾舗）

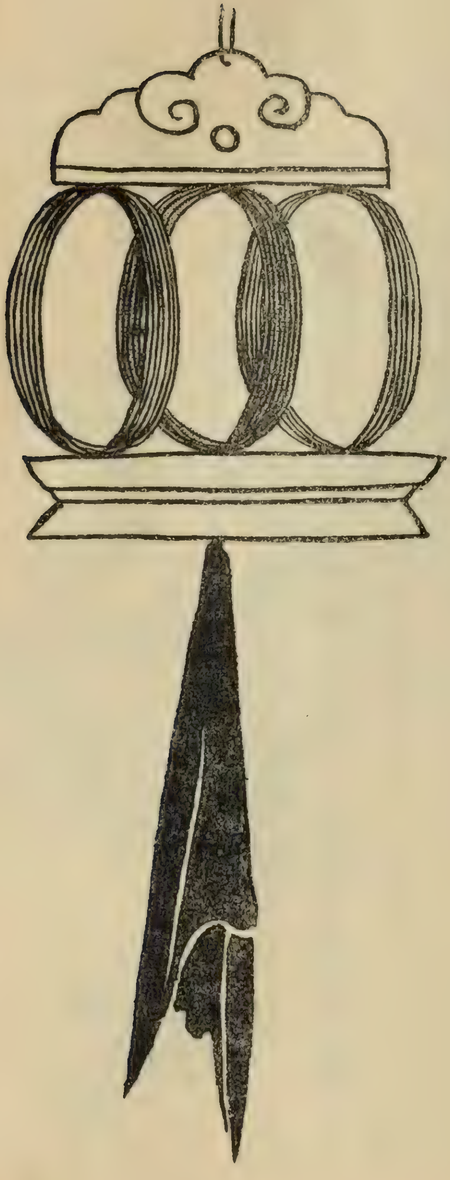
タオル以外に、半巾なども賣つてゐる、獨立した商賣でないので、雜貨店の店頭に他のものと同居して下つてゐる。私の店ではタオルもありますの意である。實物をそのまゝ看板としてゐる。汚れのかゝらぬ中に、他のと取替へ、看板に使つたのは、いつの間にか賣られてゐると云ふ。

東同盛

糸屋（棉線莊）

紡績の木綿糸を賣る店である。雲頭を彫つた木片の下に、各種色の糸の實物が括りつけられてゐて、仲々色どりもよく綺麗なものである。下部の蓮花模樣の木座と共に、この看板の一つの特長であつて、一目でこの商賣を語つてゐる。北京の裏通りにこの看板が出てゐるが、店屋でなく立派な門構で、叩かねば扉を開けない樣な家もあつた。きつとそういふ家は、相當の大店なのかも知れない。

簡單に糸だけ輪にしたのを、アレンヂした看板もある。黄、赤、緑の三色の糸を三條輪にして斜に並べたところなぞは、仲々効果的である。見方によつて、すき間なく糸を括しつけたのより、宣傳的に於ては頭を使つてゐる。それだけに優秀であるとも言へよう。この方はピンとさせる爲に、糸を針金らしいものに卷いてあるらしい。



吳服屋（綢緞舖）

吳服屋の看板は何處へ行つても、デカデカと吉祥避邪の龍の彫刻を出してゐる。これが古い形式で、それが出來ないのが普通のトタン板の細工物へ、ペンキで文字だけ書いて、ごまかして居る。今は吳服屋と言つても、日本と同じ様にデパートメントストーアに成つて大小の區別があるが、轉換と云ふ形だ。吳服屋は何土地へ行つても、そう小ツぽけの店は少い商賣だ、二百年三百年の歴史をもつ店なんかザラにあるので、松坂屋、三越、白木屋、高島屋尻喰へだといふ。運よく支那には松坂屋も三越も無いから、尻を喰らはなくても濟むわけだ。その代り日本から輸出の品物が澤山並んで、あつちのお土産だなんて買つて來ると、開いた口をふさがらなくさせる。上と下の違ひで、ひつぺ返しをしての形だ。圖には龍を一つしか描いてないが、二つ並んで入口の兩方から、往來へニユーと出てゐるのもある。

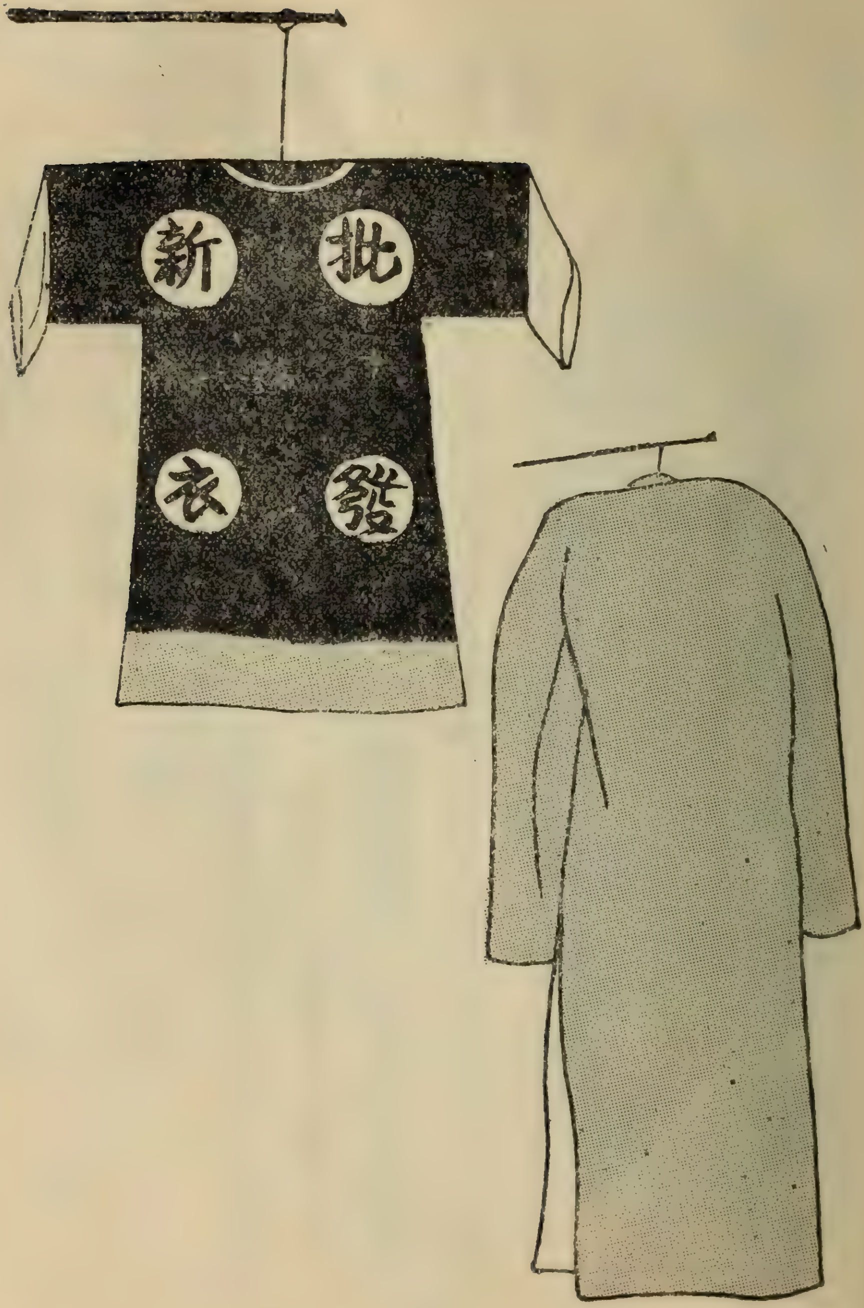
綢緞布莊

衣服屋（衣舗）

巾二尺ぐらゐ、長さ三尺ぐらゐ、全部布で、着物そのまゝの形を示してゐる。文字は家によつて違ふのがある。衣服屋と言つても古着屋ではない。この看板に似たものに

染物屋（染坊）

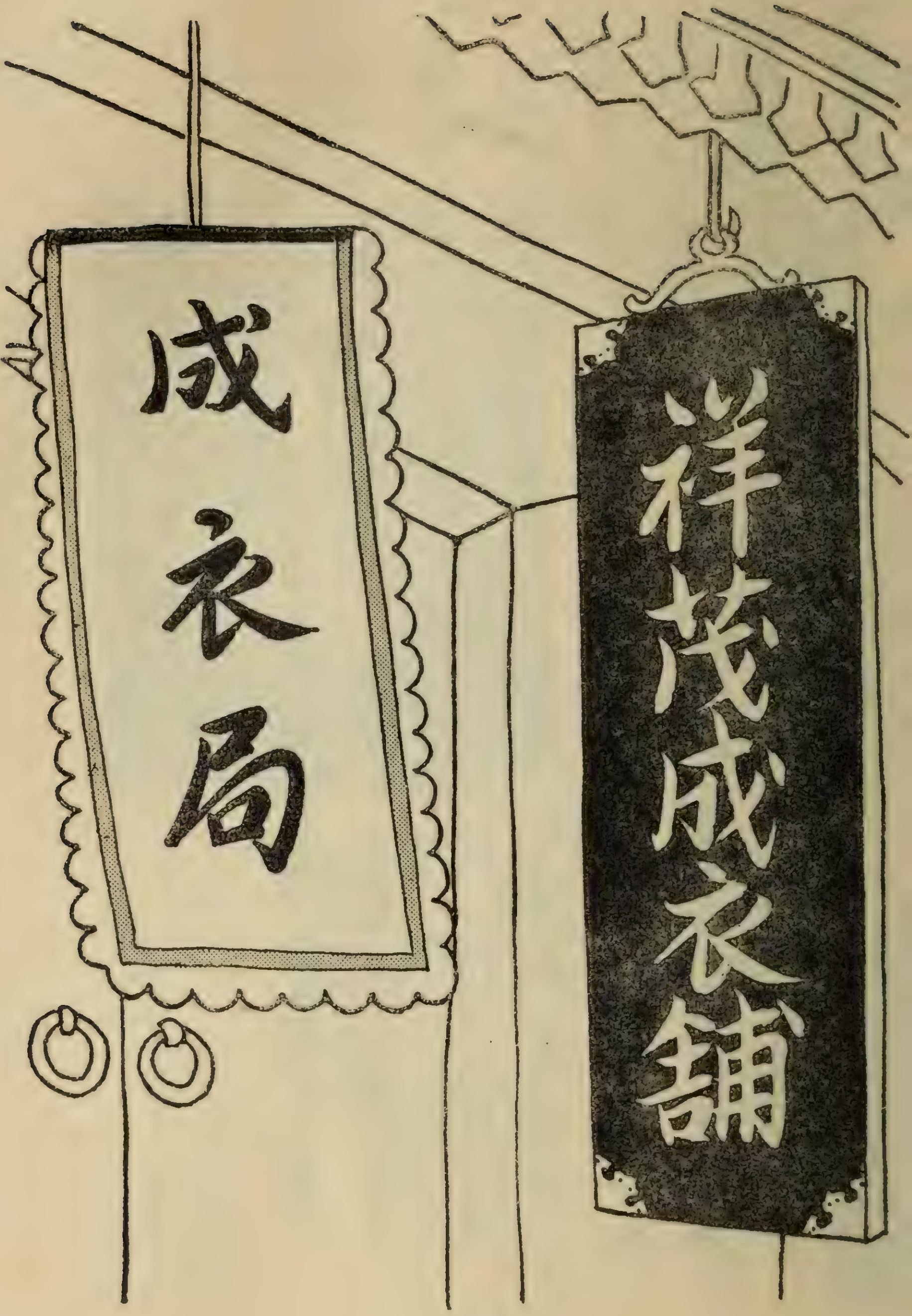
がある。やつぱり實物の衣類を出してゐる、ところが、この實物は看板用ではなく、自分の家で扱つてゐる客の着物であるのには、あきれる。染物屋は、汚染抜きと洗ひ張りが日本と同じ様に附隨してゐる。染物屋の事は「染　坊」と言つてゐる。しみぬきは白い膏藥みたいのものをべたべた付けてゐる、これは支那一流のもので、その部分の汚染抜きで、部分洗ひといふものだ「專門織補」と云ふ看板が出てゐると、染物の破れつくろひもする店である。


批
發
新
衣

仕立や（成衣舗）

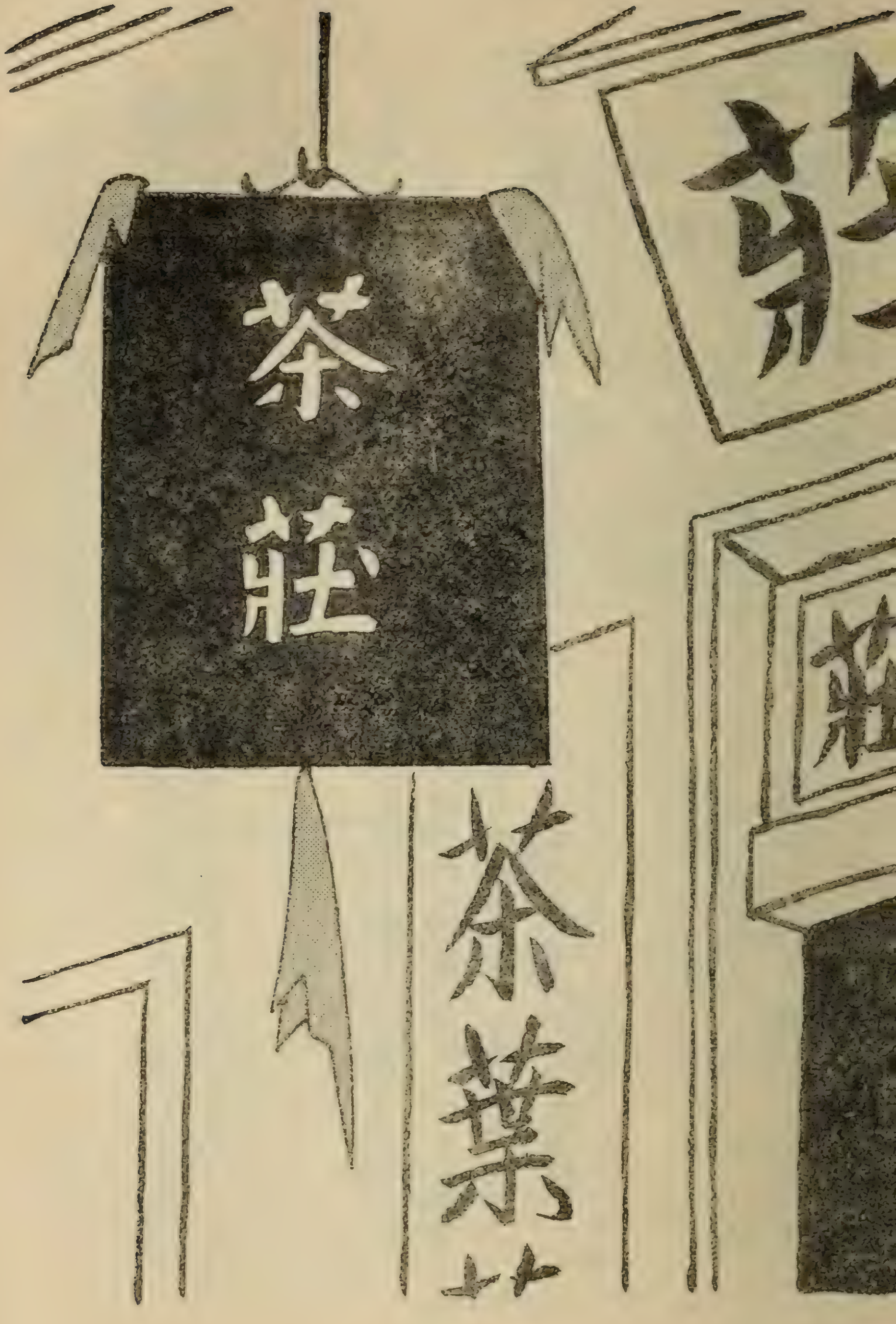
白地の布切、四五尺の長さ、一尺五寸位の巾に黒文字が書てある。局とあると何だか日本流に思ふとお役所みたいだ。つぼねと讀むと美しい女の人でも居る様だが、實はあんまり美しくない仕立屋さんだ「成衣舗」とあるのも矢張り仕立屋だ。日本の婦人は貴賤貧富の別なく裁縫の心得はあるが、支那の婦人は針を持つすべを知らないのが多いので、大抵の着物は仕立屋さんの御厄介になる。近頃は表看板は昔通りの古風なものであるが、ミシンを使つてる成衣局があつて、看板と權衡が取れてないのを見うける。

日本と違つて、あぐらをかいて縫ふ樣な事はしない。工房は竹棒を下げ、それに糸をさげ、下にテーブルを置いて、立つて仕立するのと、腰掛けながら縫ふのと兩方を併用してゐる。支那服の仕立は簡單なので、賃銀は日本着物から競べると雲泥の差の廉價である。


成衣局
祥茂成衣舖

葉茶や（茶荘）

一尺五寸巾、二尺の長さ、厚さ一寸位の板に、黒塗りに赤字で「茶荘」又は「茶葉荘」とある。中には家の入口にペンキで書いたのも見うける。お茶屋は何處でも立派な店で、日本の様に目方賣の外に、包賣といふのもやつてゐる。粉ぐすりの様に小さな紙包にして、一包日本の二錢、一錢、五厘に相當する額で賣るのだ、下流の家では、この包んだ安いのを用ひて、客來ればその一包を茶瓶に入れて熱い湯を注いで出す。お湯も支那の銅貨二枚で熱いのを、藥鑵に一杯買はれるのだから、下流社會の生活は仲々便利である。向ふの銅貨十枚が日本錢にすると、丁度二錢五厘に相當するのだから、二錢五厘と云ふ紙幣が發行されてゐるのを見ても、その安ゐさが伺へる。


茶莊
茶葉

金店（金店）

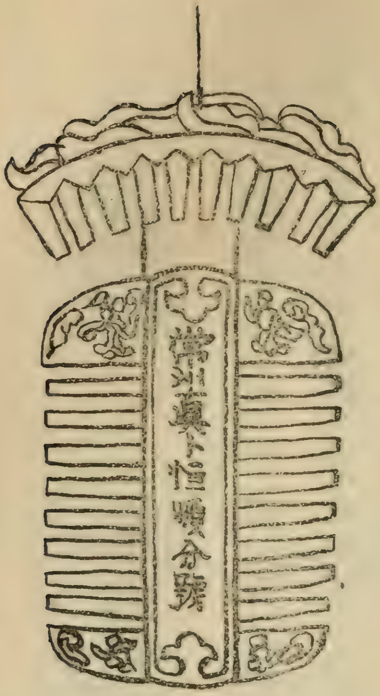
金銀細工屋にも下つてる事がある。金の固りを買ひますと書いてある。必ずしも金の固りと限つたわけでなく、金のものなら何でも良い事である。日本なら「金買ひます」といふところである。

すきぐし屋（梳子舖）

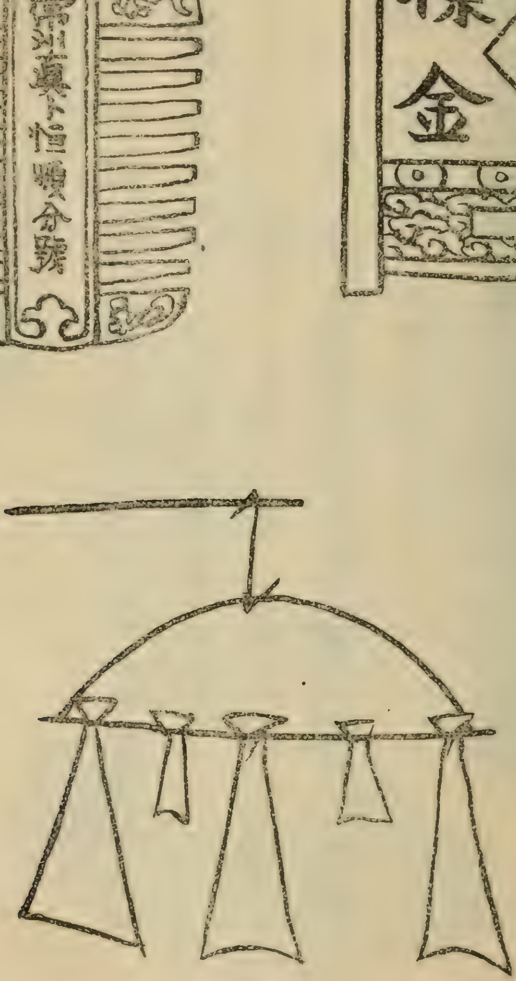
すき櫛は日本の物より、支那の物の方が、齒がこまかいのか、材料の加減か、出來がよい。十三屋と云つて、九と四を合せて十三と言ふ、數の隱語的な名前の店が、今でも東京にあるが。それ程に洒落氣があつては、支那の御婦人方には通用しないと見えて、矢張り實物の大模型の看板を出してゐる。このすき櫛は今でこそ女專用の樣になつてゐるが、一昔前までは男も常用してゐた。

皮屋（皮子舖）

皮類一切を賣る店の看板で、實物の皮を下げてゐる。長い方は五寸位の長さ、幅二寸位短かい方は二寸に一寸位の、いづれも白い皮だ。この看板のある家は、鞣をするやうな仕事をしないで、賣る方專一の店が多い。


常州真正恒順介號

兌換
標金

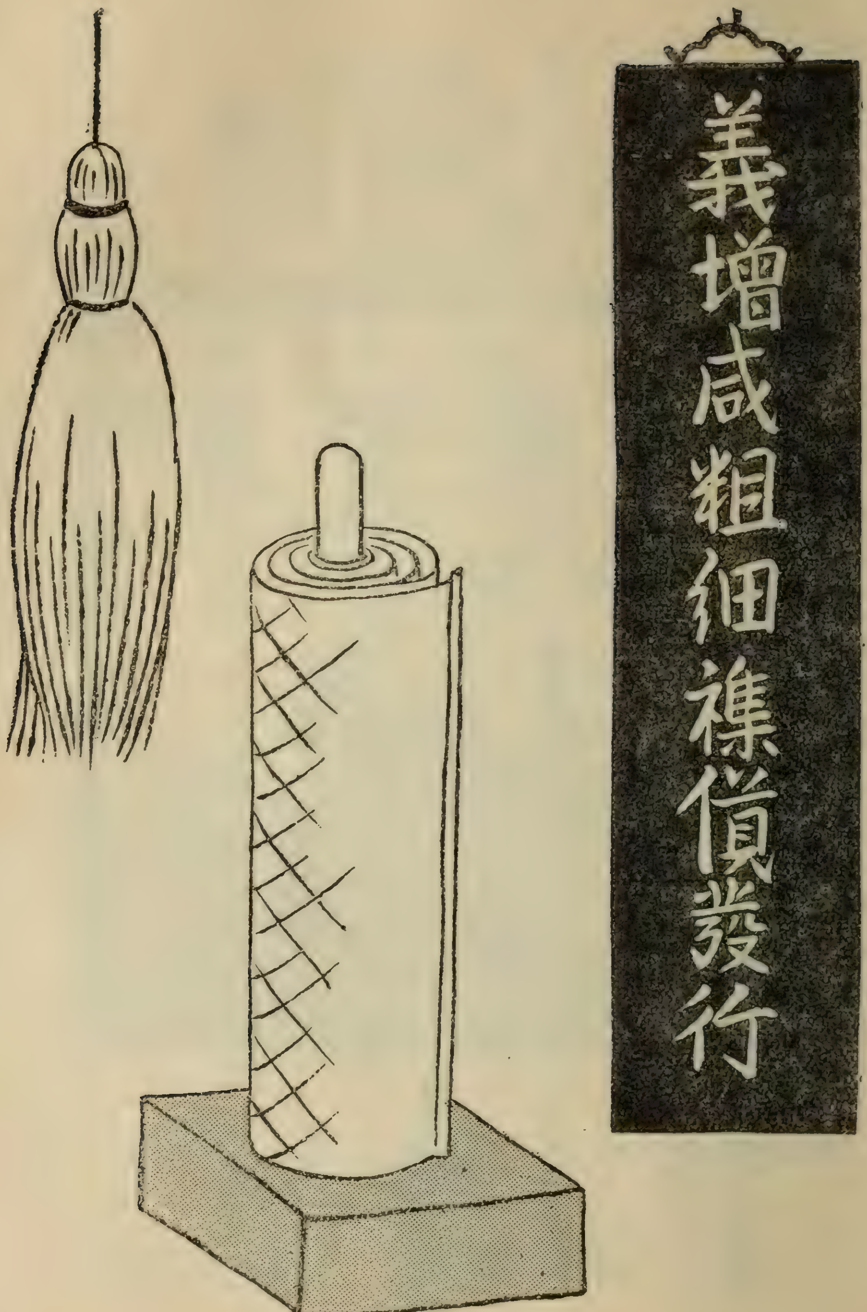


荒物や（粗細雜貨舖）

あちらの荒物屋と言ふと、麻、蓆、燒酎、煙草の葉等を賣るので、それらの看板を並べて下げてゐる。煙草や燒酎は別に出てゐるので、此處では麻と蓆だけにした。

荒物屋として、文字の看板がある「義増成」とは家の名前で。粗細の「粗」は荒物のことで、米や麥粉も含んでゐる「細」は紙、糸線香を意味してゐる「發行」と云ふのは賣場といふ言葉で、物を印刷して出す樣な、日本流な發行ではない。

麻苧は一間ばかりの長さの實物を下げてゐる。圖の樣に中途を縛つてあるのと、たゞ房房とさして下げたのと、二通りある。蓆と云ふのはアンペラの事だ。別圖のアンペラは大物だが、此處のは小さいもので、心棒の立つた臺の上にクル〳〵と實物を巻いてある、簡單だが効果的である。


義增咸粗細襍貨發行

寫眞や（照像館）

北京あたりでは、圖の樣な古風な看板はない。地方へ出ると、まだ目につく、旅行者にとつては面白い看板だ。あちらの寫眞やでは、燒付けを暗光（艶消し）亮光（艶出し）のどつちにすると必ず聞く。支那人は亮光を大抵好むといふ。あのピカピカとする所が、お氣に召すらしい。

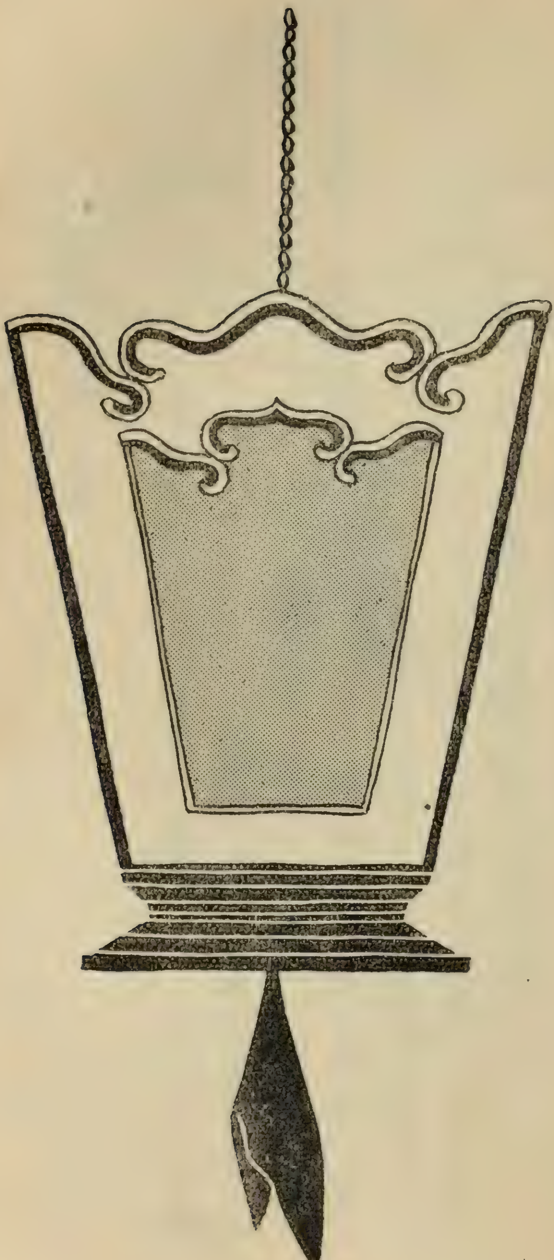
支那でも滿洲でも名所に限らず、町の中にでも大道寫眞屋が出張つてゐる。背景の用意までしたのがあつて、早取寫眞をしてくれる。撮影機の中へ、手を突込んで其處で現像してから、外のバケツで水洗して、新聞紙の上へ乘せて出す、この間せい〳〵十五、六分だ。直寫しといふ乾板なし式のものだ。旅の者には、この方が安くて、手ツ取り早いのでついぞ照像館の御厄介にならないが、撮寫場を覗いて見たら、まだ〳〵設備に於てはお話にならない位の貧弱さであつた。

影像

粉屋（磨坊）

日本の昔の流行唄に「オイトコソーダヨ」と言ふのがあつて、粉屋の娘が別嬪で、その娘の爲なら手鍋も下げて、いばら背負ふといふ男がある事を歌つてゐる。支那の粉屋を覗いたが、相憎く、手鍋さげるやうなのは見當らぬ、もつとも家附の娘は、さう矢鱈に店なぞへ出て來ないさうな。支那人の常食である小麥粉、玉蜀黍粉、饂飩粉を賣る店が磨坊舗である。勿論小賣ばかりではく、製造もしてゐる。

柳條製の篭に紙を貼つたのを、下げた看板と、瓢簞の下の方の大きいところを切つた物へ白紙を貼つたのと、左の樣な板を切りぬいたのと三通りある。柳條製のは、右圖のを逆さまにしたと思へば間違ひない。これは饂飩を揚げる篭を表はしたものだといはれてゐる。饂飩粉と緣があるので、中には粉屋兼饂飩屋を商賣してゐるのがある。

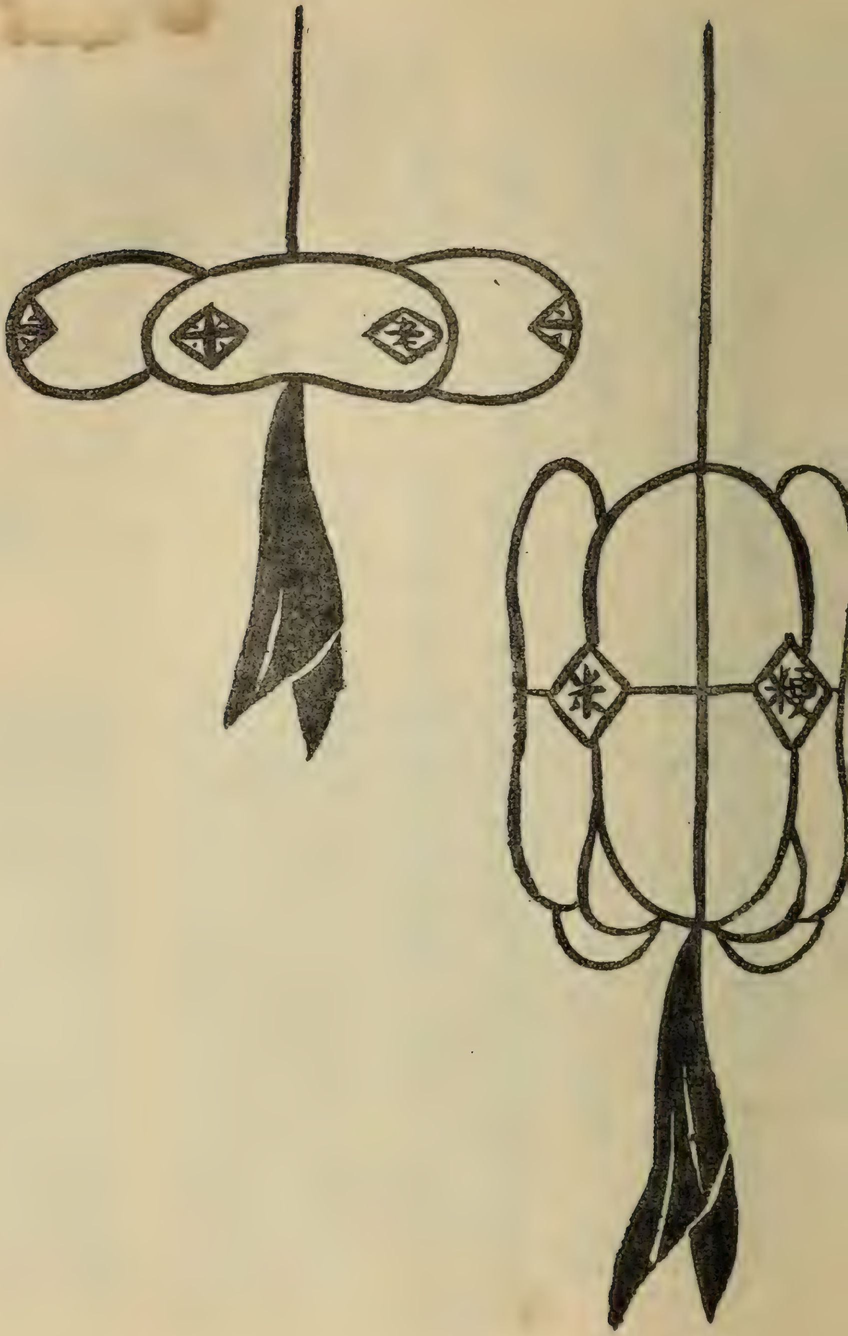


古米や（老米店）

古くは關東方面から、北京の方へ米が入つてきて、今の通州へんはその米倉だつたので古い米が北京へんでは賣買されたと言ふ。現在では臺灣米の事を、老米と言つてゐる。三才圖繪によると陳倉米と言ふて、久しい間倉に貯ふて赤くなつた米で、この米を蒸したのは、大變消化にいゝと言はれてゐる。火に蒸すので火米とも云はれてゐる。粥にすると味が淡々として非常にうまいので、本格の支那粥はこの米でなくては駄目だと言はれてゐる。又胃病、霍亂、煩渴によいといはれ、黄栢汁といふのに浸しておけば赤くならず百年たつても、新しいのと同じで、むかし戰爭の時は盛に用ひられたとある。

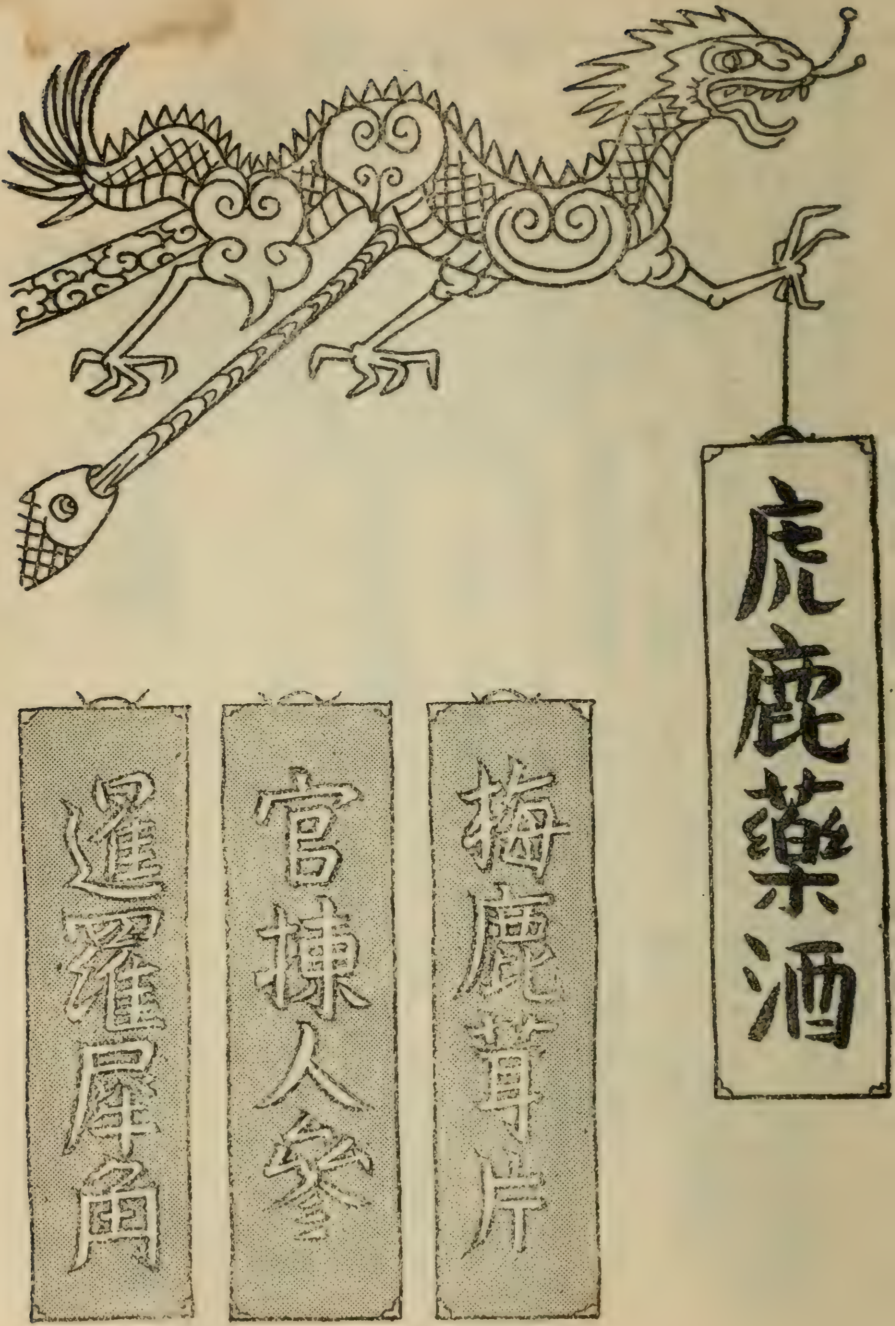
うるち米屋（粳米店）

粳米と書くところは日本と同じである。稲の粳なるものだ。畠に出來る米だから粳である。古い名はうるしね又はうるざめと言つたとある。うるちはうるしねの略轉である事は皆さん御存知のところ。又さいかし、さいかち、どち、どし、などと云ふ稱號もある。支那でうるちを常食にする家は一般には少ない。



薬屋（薬舗）

一間半程もある張古の龍が軒先から出てゐる、呉服屋のところでも言つた様に、吉祥避邪の縁起をかついだものだ。私の見たのは、更に欲ばつて鯉がくつゝいてゐた。龍爪から下つた看板には「虎鹿薬酒」とある、虎の骨と鹿の筋とを入れて作つた酒で、大へん効くのだと言はれてゐる。別の三枚の看板は、薬屋の軒下に下がつてゐる物で、定まつた様な文句のものばかり。「梅鹿茸片」は鹿茸と云ふ植物「官棟人參」は人參「暹羅犀角」は犀角で、いづれも文字通りの薬名である。漢法薬の一種でいづれも貴重の部類に属するもので、何だかんだと、物々しい肩書を付けなければ、効かぬと思はないから、薬は賣れないと言ふ何商賣にかゝはらず、宣傳は仲々行屆いてたものだ。


虎鹿藥酒
梅鹿茸片
官揀人參
暹羅犀角

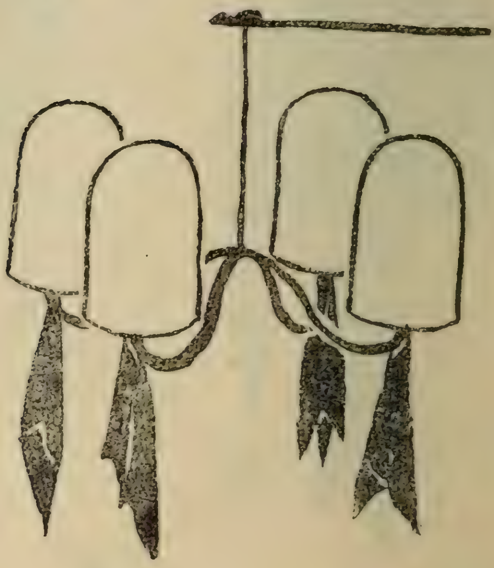
まんとう屋(饅頭子)
しえんぴん屋(尖餅子)

苦力や貧民を相手に商賣してゐる、まんとう屋、シェンピン(尖餅)やの看板である。饅頭と言ふのは、フカフカ饅頭の、中味の無いものと思へば間違ひない。尖餅と云ふのは麵粉を燒板の上に延ばして燒いたものである。厚くて大きいのを、大餅、家常餅、薄くて大きいのを荷葉餅、小さく軟かいのを薄餅、あの燒鴨を包んで食べる、極めて薄いのを春餅、炒肉絲を包んで食べる、長方形の固いのを燒餅等と燒方によつて名が違つてくる。

苦力や貧民は、この尖餅か饅頭に、にんにくに味噌をつけただけの物で、飯がわりにしてゐる。饅頭は一般の料理屋でも出す。料理屋では澤山だすが、食べたいだけ取ればいゝので、あまつても會計の方は心配する必要はない。食べただけしか記入してないから、こんなに注文しないのに怪しからんなんテ、お腹の中で、算盤をパチパチはぢく樣な、けちな眞似は支那では御無用である。餡の入つた饅頭だつて、それ式である。

尖餅舗

尖餅



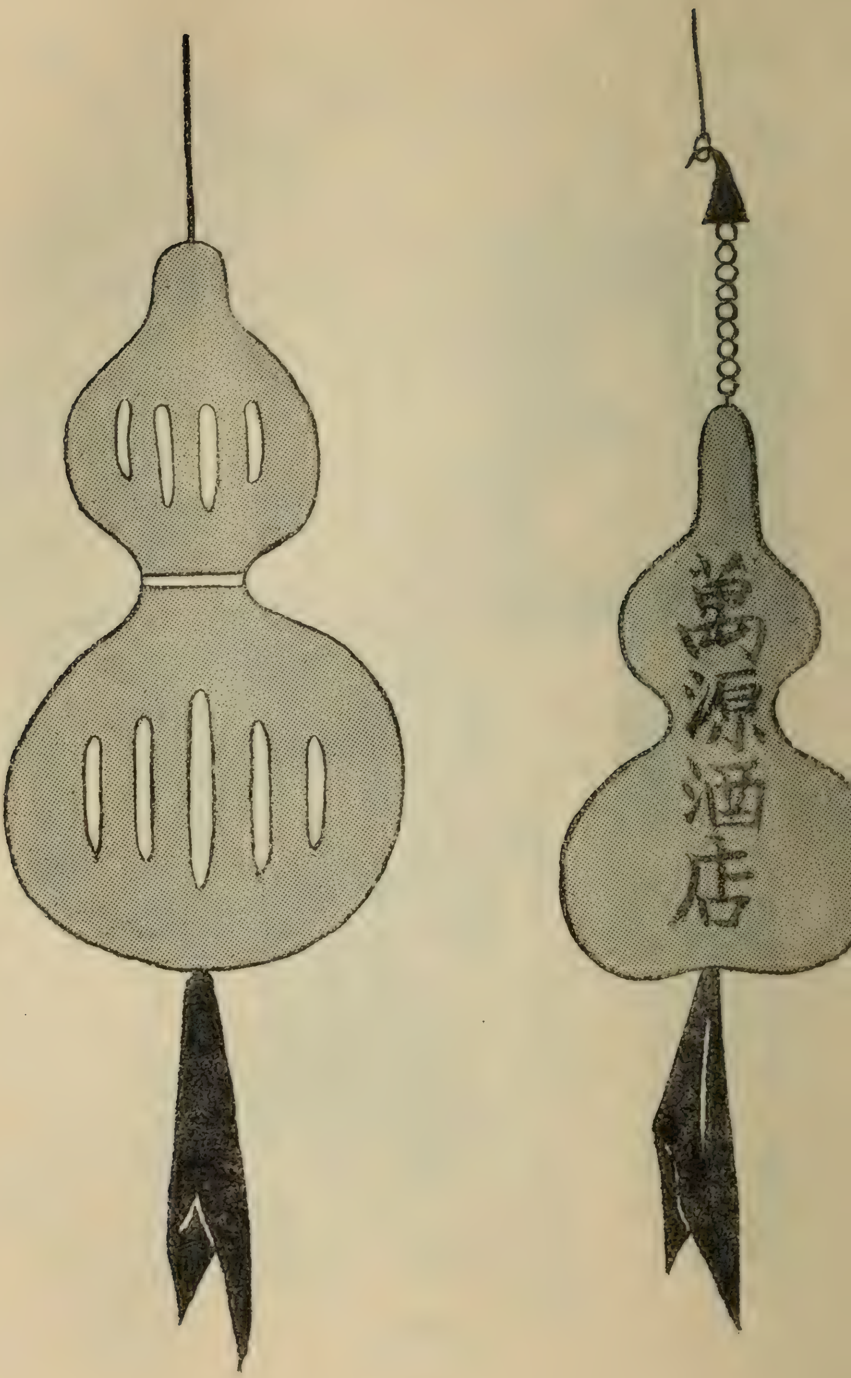
酒や（燒酒房）

日本では燒酒と言ふと、一段格の下つたものとされてゐるが、あちらでは燒酒が普通の酒となつてゐる。この看板は作つても居るし。小賣りもすると云ふ家の目印である。

長さ二尺、巾一尺五寸程ある板を赤く塗つて、その家の名が黒で書いてある。

藥酒や（藥酒房）

藥酒と言つても、藥の酒の事ではない。燒酒でないところの、老酒、清酒など上等の酒の事である。こうした酒を一般に藥酒と言つてゐる。これは、この藥酒を釀造及び小賣する店の看板である。赤ベタの二尺長さ一尺巾厚さ一寸位の瓢箪形の板に、金で筋を入れてある。

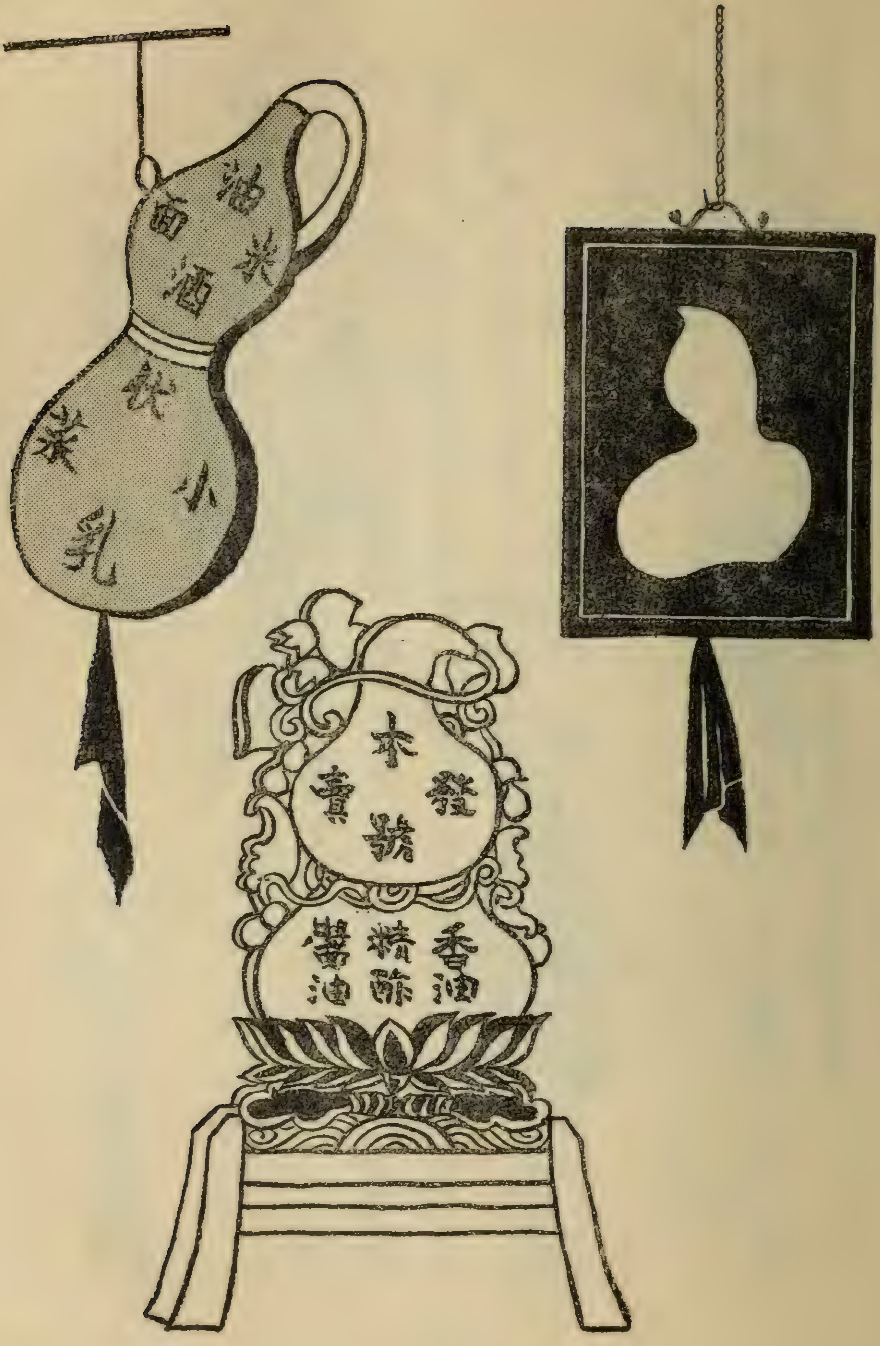

萬源酒店

雜貨や（雜貨舗）

荒物やと紙一重の品物を賣つてゐる。中には同じ物もある位である。瓢箪の形をした看板は、日本でも言ふ「瓢箪から駒が出る」で、吉祥の偶意を表象したもので、圖の左の樣に、先端から飴狀になつてゐるのは甘露の流れになぞらへられたのだといふ。また流行病や、除夜の時、瓢箪の切紙を、軒口に貼つて、惡魔除けにも用ひてゐる。魔を避けて、店繁昌といふので看板に使はれるわけである。私の見たのは板製で巾八寸、厚さ二寸、長さ二尺あつた。扨この雜貨やさんの賣る物はと聞くと、油、米、酒、小麥などの粉類、漬物などである。赤色の瓢箪に、綠青の帶口からの飴狀のものも綠青だ。

右手のは、黑字に黃色で瓢箪が描表されてゐるだけで簡單だ、この方は巾一尺、高さ二尺ほどの板製だ。

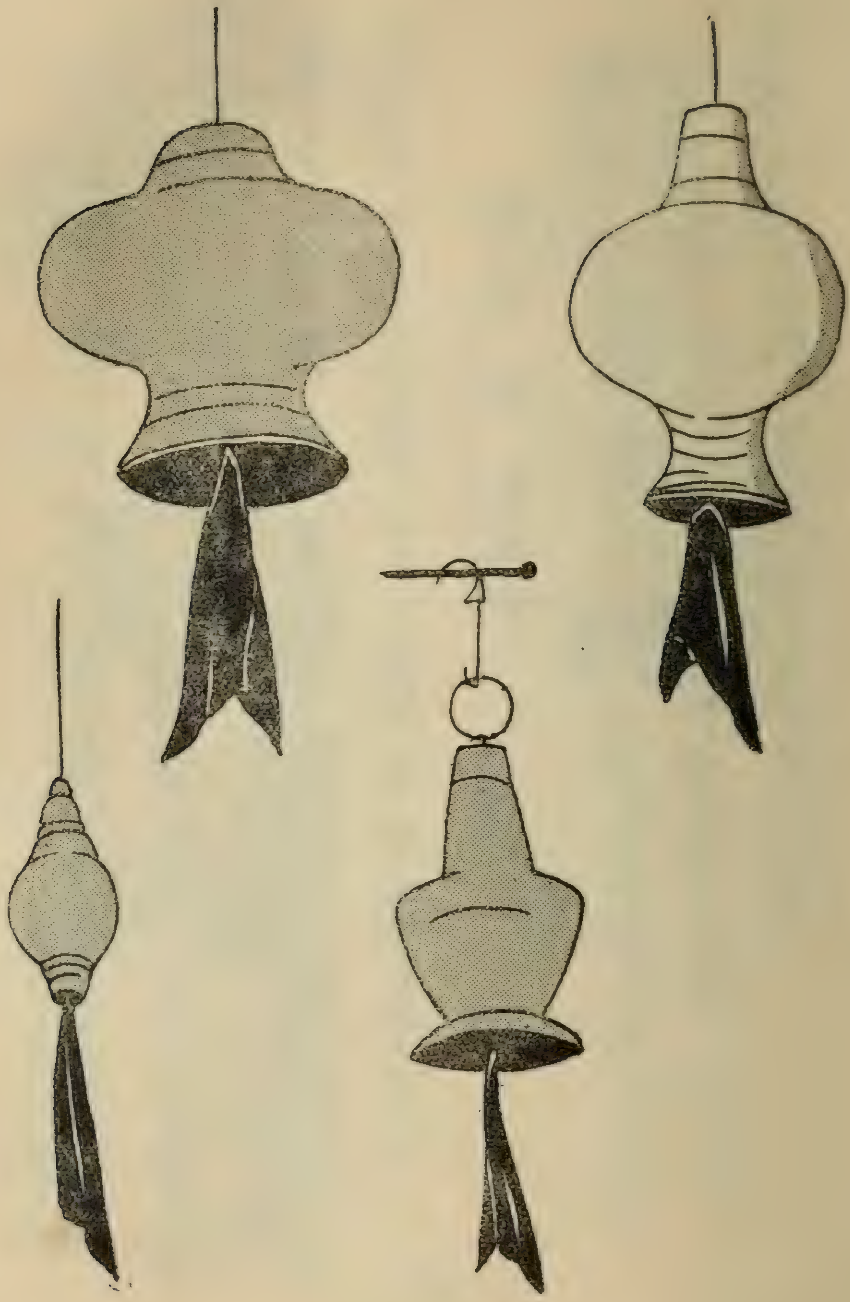
又、下圖の樣な瓢箪を、もつと大きくして、臺座をつけて地面へ立てかけたのがある。そしてそれに販賣の品目をやつぱし書き込んであるのもある。尙瓢箪は雜貨屋と限つた事はない。魔除けの意味で他にも用ひられる。現在の支那人は、魔除けを忘れて、單なる裝飾と心得てゐるさうである。


本號發賣
香油
精酥
醬油

燒酒や（燒酒舖）

大きいのは一尺五寸位の圓さで、錫で作つてあつたり、銅で作つてある。上圖の二つがそれである。かういふ形のある家は燒酒を製造する家である。下圖の二つは、だいぶ形も小さくなつてゐて、雜貨屋または料理屋の軒下にさがつてゐる。この方は賣る方の看板である。いづれにしても燒酒を入れる器をもつて表はしてゐる。區別は大小で覺える外にない。燒酒の事を氣酒とも言ふてる。氣酒とは蒸溜した酒の事で、燒酒、ウヰスキー、ブランデーの類である。單に釀造したまゝの酒、日本酒、葡萄酒、紹興酒、ビールなどは、水酒と呼ばれて居る。

製造小賣でない家では、けつして小賣りはしないと言ふ。へたに云ふとドヤされるさうな。緣起のよい言葉を言つて、味きゝをさせてくれろと言つたら、製造場でふんだんに吞ましてくれたといふ話がある。かつぎ屋の多い支那には有さうな事である。



肉屋（肉舗）

この燈籠は俗に肉舗燈籠と言はれてゐるもので、これを見れば肉屋と一目に解る。日本の肉屋と言ふと牛肉、豚肉、鳥肉、馬肉といふが、あちらでは牛肉、馬肉は御縁が少い、その代りに、家鴨の肉が盛に用ひられる。この店は、豚、鷄、鴨何でも賣つてゐる。

佛具屋（香蠟舗）

神佛に供へる線香や蠟燭や香なぞを賣る店だ。日本流に言ふ佛具屋とは少し意味が異つてゐる。看板は七寶八寶と呼ぶ、佛前の裝飾品で仲々精緻を極めた彫刻だ。線香や香なぞは表現にむづかしいので、こうした物で表したと見てもよいと思ふ。

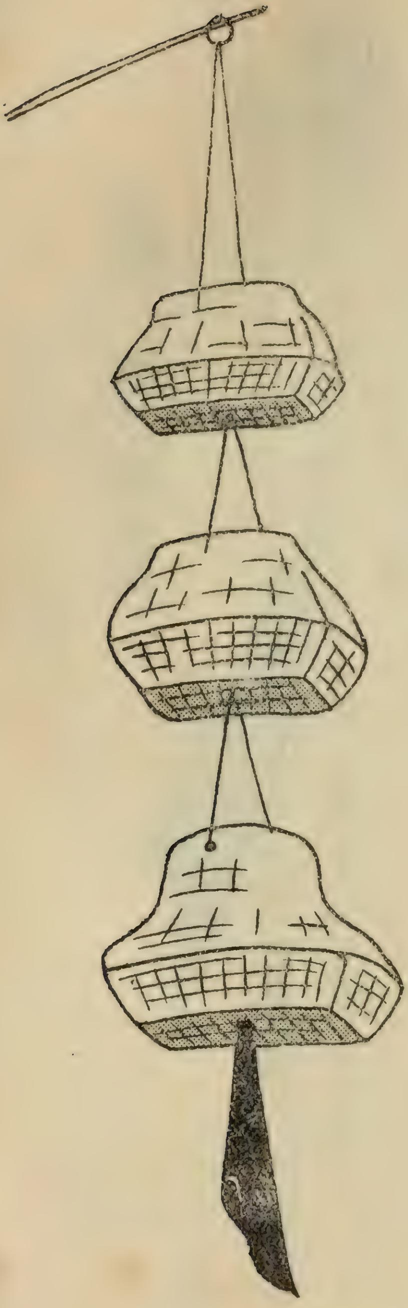
醬肉

薑や（薑舖）

鮮薑とあるから、新鮮の薑といふ事だ、新鮮か古鮮か、その邊の事は解りかねるが、薑は支那料理の香の物の一ッとして常用されてゐる。日本で言ふ「べに生薑」と言ふのは、あちらでは「封薑」といはれてゐる。竹細工屋の看板の樣に、竹で編んだ圓形の中に「自置鮮薑」と書いてゐる。薑ありますと、日本流にケチくさく書かず、大書してる所が大陸風である。

漬物屋（醬園）

野菜の醬油漬を賣る店の看板である、柳條製の籠に、紙を敷き油を塗つてある。壺屋のところに書いたのと、製法は同じである。漬物をこの中へ入れて賣りもするし、漬物をほしい時は、これを持つて買ひにゆく。大きさは五寸位のものである。醬油漬であるのでこぼれて他を汚さぬ樣に、からした入物が出來てる所は、仲々氣のきいたものである。



自置鮮薑

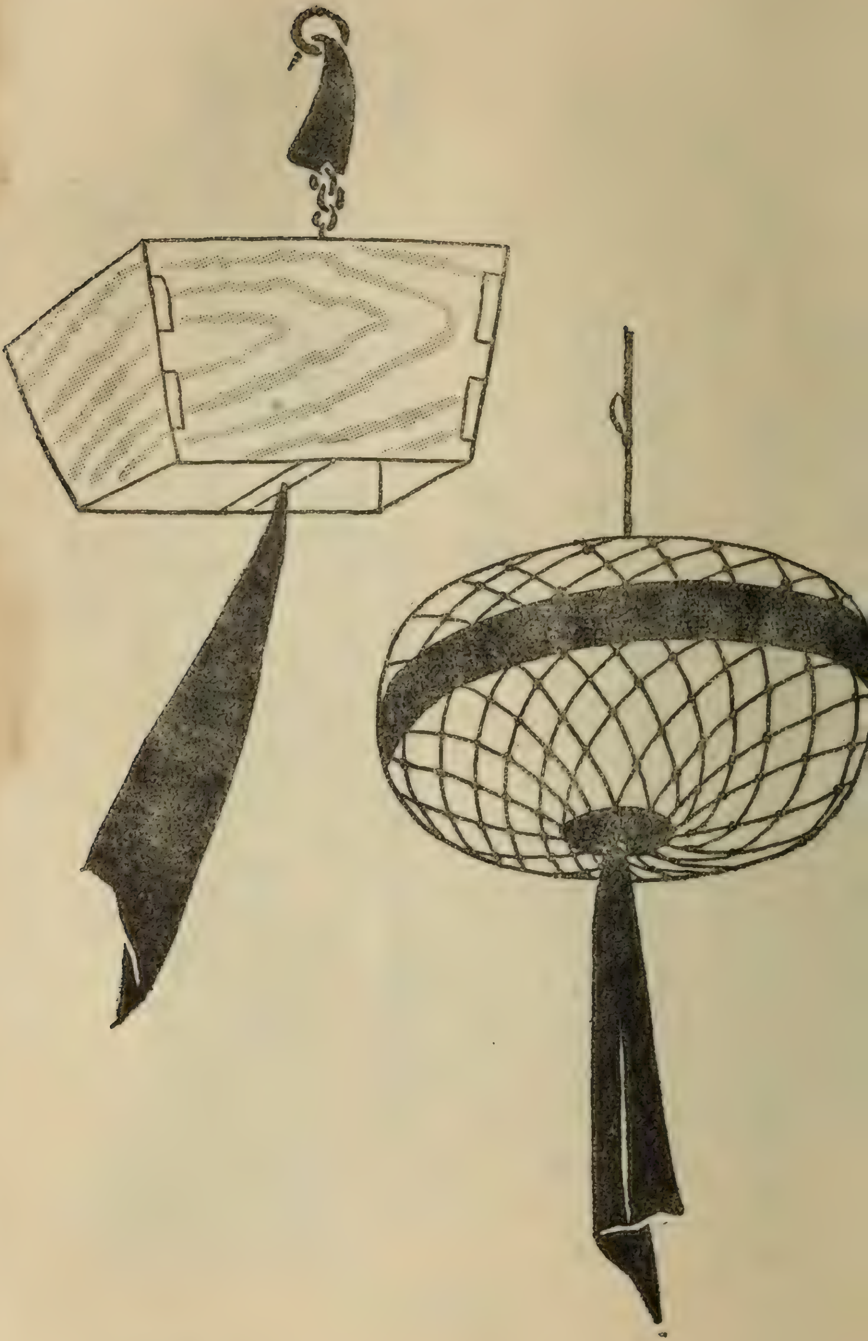
棉屋（棉花莊）

扁圓形に棉を丸めて、横中央を赤い布で帯をしてゐる。支那人の被る蒲團の中味は長方形の棉を網で包んで、それを幾つか重ねて布を被せてあるといふので、そんな事で、この看板も網を被せてあるものだといふ事だ。

穀屋（糧舖）

糧穀類を取扱ふ店は、その品物の大小によつて名前を別にしてゐる。大量に扱ふ問屋を「糧棧」といひ、小賣りの店は「糧店」とか「糧舖」と言つてゐる。糧棧はその道の商人も宿泊させる。

この看板はその糧店の方の表識で、枠に布を張り、木目を描いてある。枡の形のものを吊下げてゐる。枡で量るの意で、小賣いたしますといふわけである。



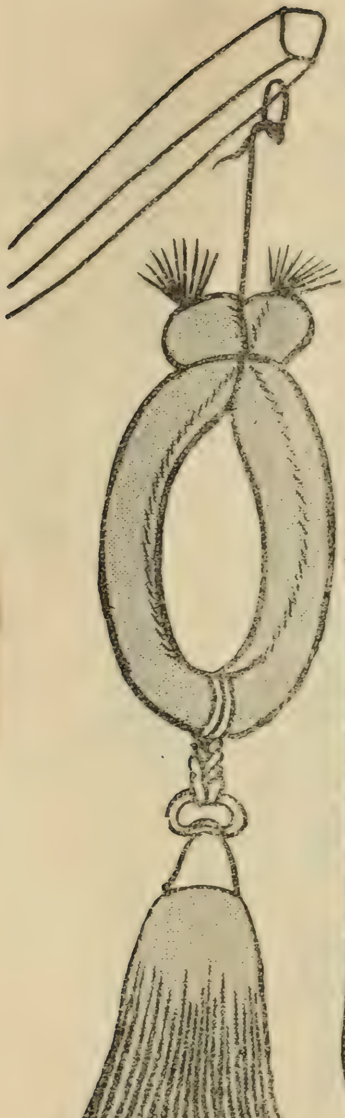
馬具や（鞍韂舖）

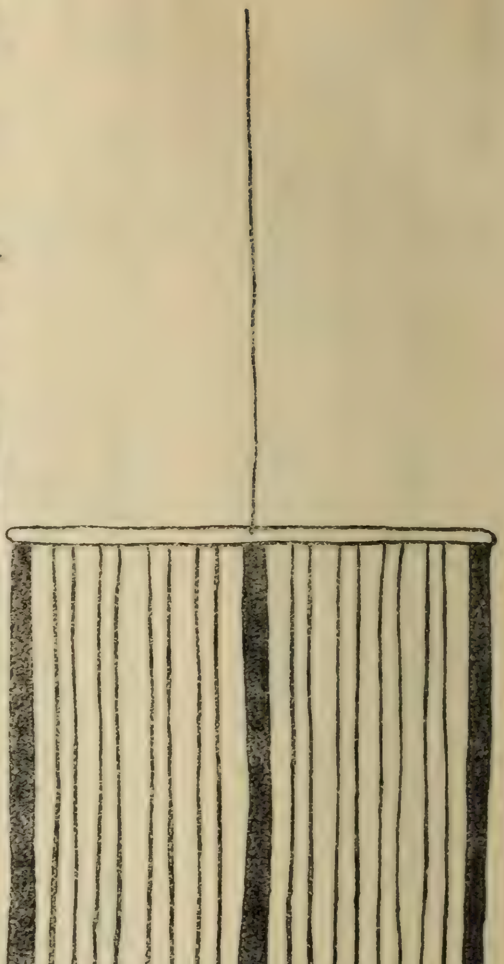
馬具屋と言ふからには、馬具に關する、各種を賣つてゐる。馬の鞭も、皮紐もある。馬の首下につける鈴もある。滿洲の北の方へ行くと、馬の鞭を扇形の放射状にした看板があるといふ。圖のは、皮紐である。皮紐だけだと、鞣皮屋の方にも通用するが、鞣皮屋のと少々異るので、馬具用革皮屋と云へる事になる。

頸當や（套纓舖）

套纓と言ふのは、別名套包子と言つて、馬具の中でも特に頸當てや、尻當ての類である。看板に出したのはその頸當である。實物看板の一ツだ、下に紅布をつける代りに、赤い毛の房をつけてゐる。

とういふ特殊のものは、都會の中央には必要が少ないので、街はづれとか田舍へ行かなくては見られない。田舍の街へ行けば、威張つて街の中央にも見出される。





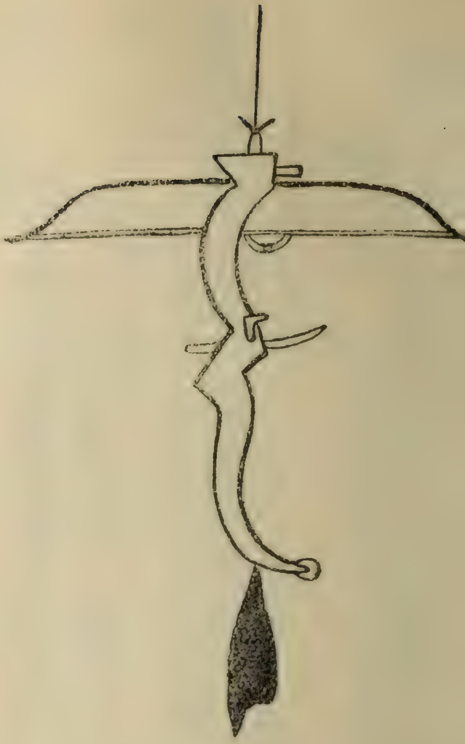
弓屋（弓箭舗）

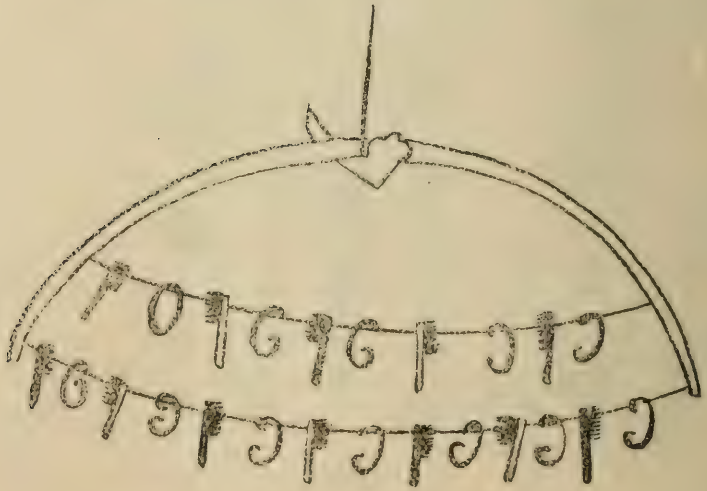
萬里の長城のある時代なら、おかしくないが今の世には、少々時代の隔りがあり過ぎる感がしない事はない。昔城を攻める時に用ひられた「弩」と云ふもので、俗には彈弓といふ。この弩弓は、古代の西方先進文化民族が傳へたものだといふ。

照星、照尺、彈金までついてゐるので、まるで鐵砲と同じ様だ、鵠やその他小鳥を射るのに、仲々よく命中するといふ。圖の左のは、更に簡單にしたものである。店によつては右圖の心棒の中央を吊して、飛行機狀にしてゐるのもある。今は獵師以外は遊人の持つものとされてゐる。

牛角細工や（牛角作房）

牛の角細工と言ふが、骨を作つての細工やである。齒磨の柄が主なるものなので。看板には齒ぶらしが下がつてゐる。丸やかん狀のものは服飾の飾りに使ふものだ。細工やの事を作房と支那では書く。



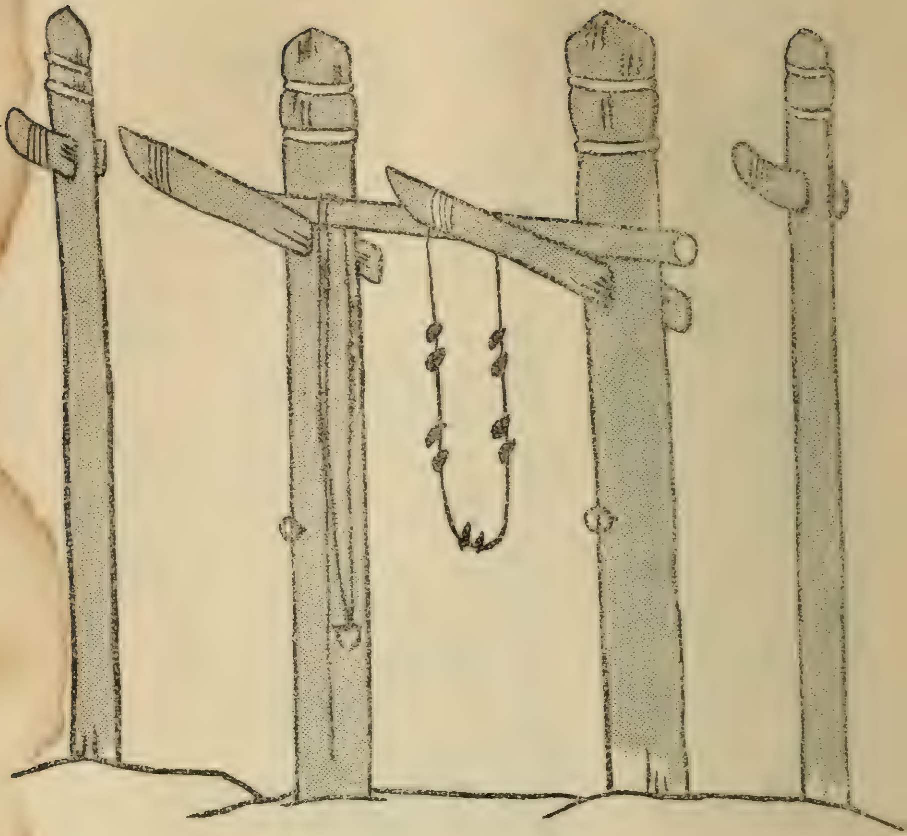


獸醫（獸醫椿）

獸醫だから馬をつなぐものを立て、目印にしてゐるが、この看板卽ち作業場である。巾一間ぐらゐ高さ一丈五尺ほどで、下つてゐる紐は馬や牛をしばる爲めである。かうした看板を立てゝゐる、獸醫の居る所を獸醫椿と言ふのださうだ。今日この頃は醫者ばかりでは食へないと見えて、蹄鐵屋（馬掌房）を兼業してゐるのが多い、椿は主として赤い色で塗られてゐる。

「世傳專療騾馬一切病症」なんテ書いたのもある。累世馬類一切の病症を、専門に治療するといふ事だ。

獸醫の居る所を椿と言つたが、この看板を單獨に「椿」とも呼ぶさうだ。

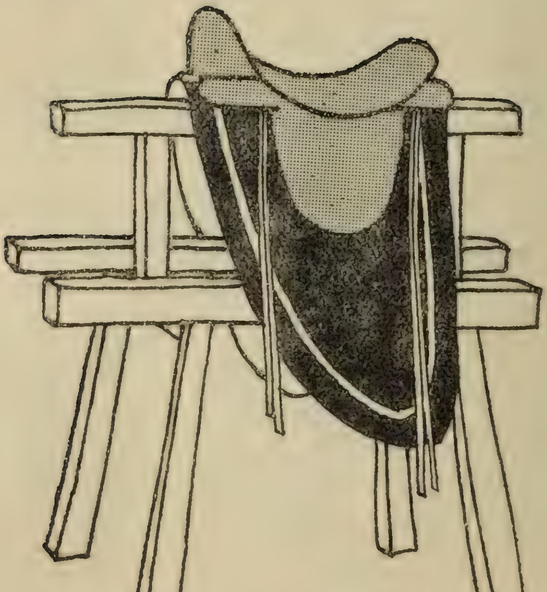


鞍屋（鞍子舖）

軒下または軒上高く、木製の鞍型が下つて、誰にでも解るやう、雄辯にこの店の商賣を示してゐる。

南船北馬といふ文字の製造元だけに、支那の現代でも馬具の需應は、まだ〳〵素晴しいものだといふ。馬車といふ交通機關がある。驢馬による交通機關もある。何にしても田舍へ出ると、自動車なんか通行できない道が相當にあるんだから、馬によるか歩くより他に道はない。

目より高い、この鞍の看板は、赤色に塗つてある。これでも氣が付かぬ人間が有ると見えて、今度は入口の土間のところに、ラシヤ製の鞍をかけて置いてある家があつた。地上から四尺程の高さである。革製の紐が下つて、大分との方は、上にある赤鞍とは、お値段も違ひさうだ。どつちにしても鞍子舖には違ひない。



轆轤細工屋（鏇　床）

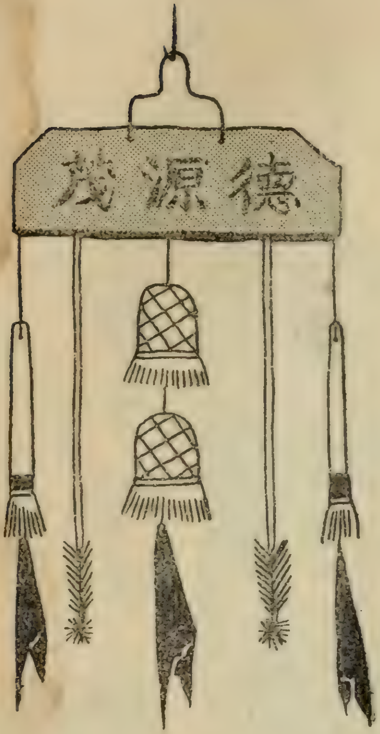
我國で言ふ木工細工屋である。麵棒から碗類さては机の脚、柱の飾り、子供の玩具まで作る。看板は極限されてゐるが、木工家具類一切を製造もし、販賣もするんだから、看板だけでは判じ切れない。

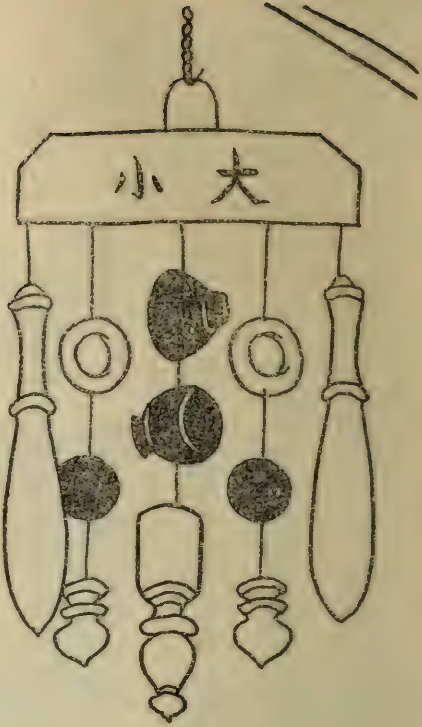
刷毛屋（刷子房）

實物の刷毛、ブラシなどを、吊るしてある。一尺五寸位の板に、針金で吊るしてあるので、風があると空中でお互にぶつかつて異様な音を立てゝゐる。

畫舗（畫舗）

畫の事一切いたします。その外室内の壁紙張り、油塗、繪や文字の裏打一切。畫は畫でもペンキ繪も描きますと慾張つた、よろづ承り所である。表具屋の仕事までするのであるから、大したものだ。びつくりしてゐたら、中には葬具屋の株をとつて、高梁を心にして作る、燒きすてる馬をやつてゐる家があつた。心臓の強い畫描きさんだ。看板の馬と云ふのは名前で馬の畫舗ではない。

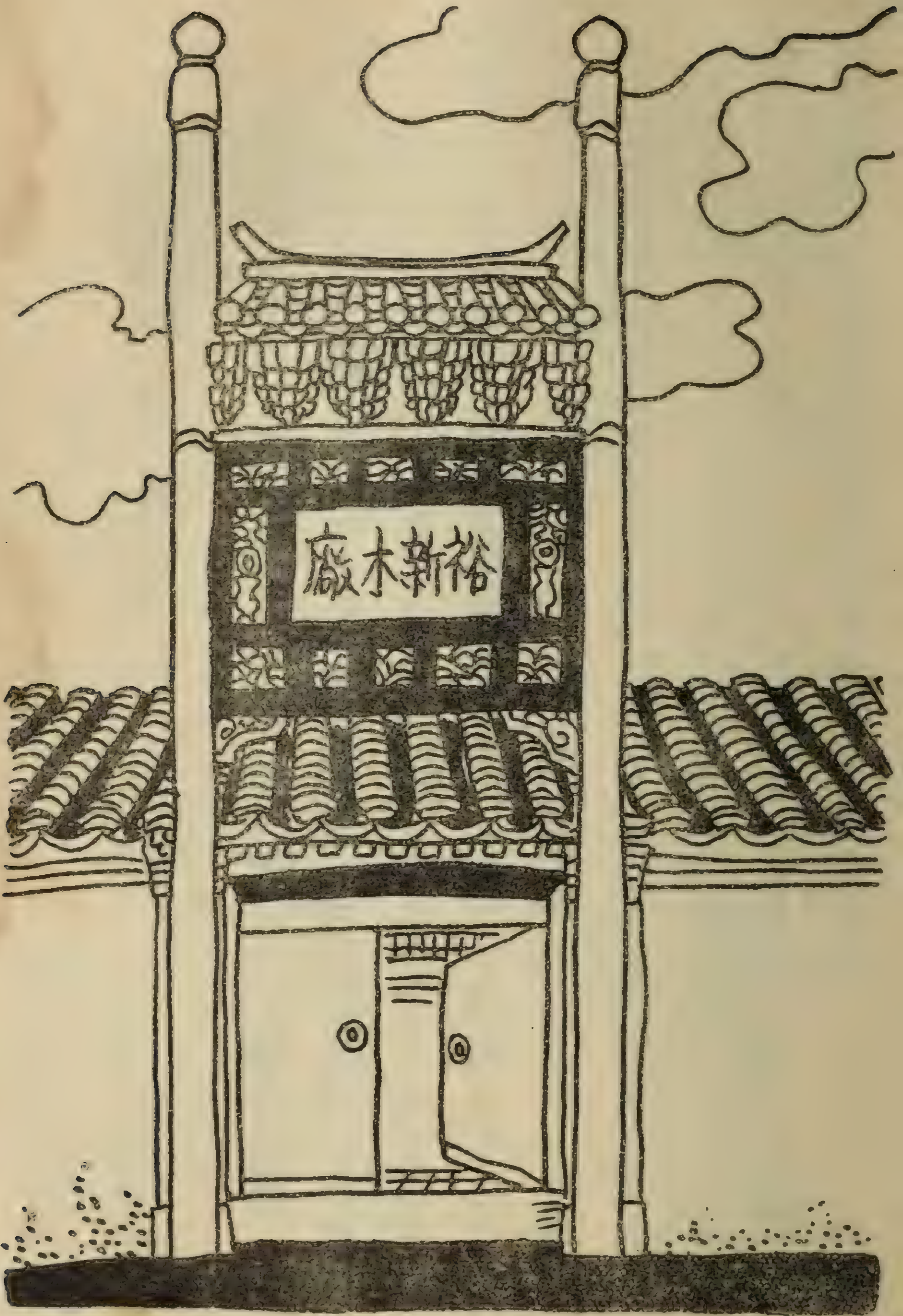

德源茂


大小

常記
馬畫舖
粉刷墻皮
塑画神像
油漆門窓
油漆彩畫
色糊頂棚
油畫看板

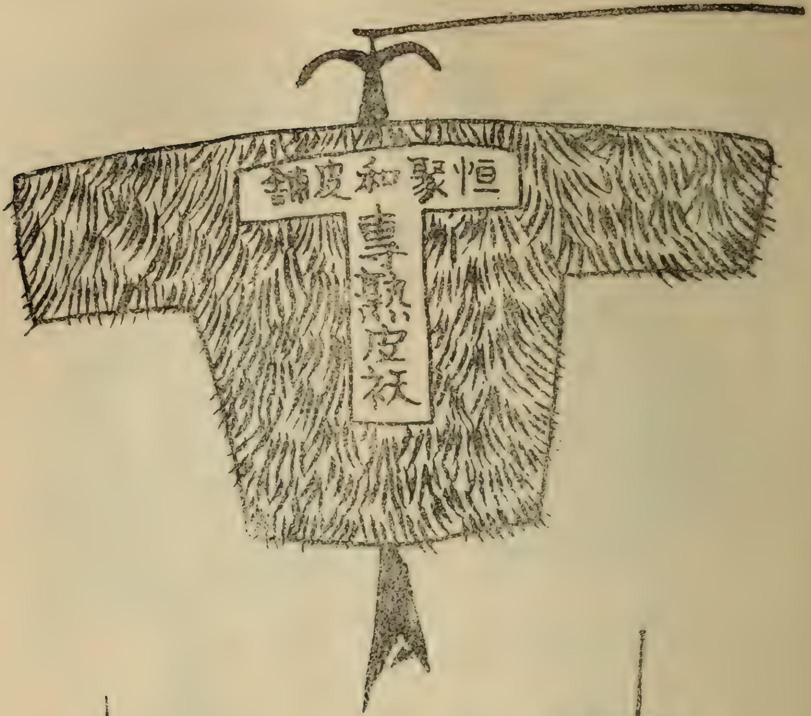
材木屋（木廠）

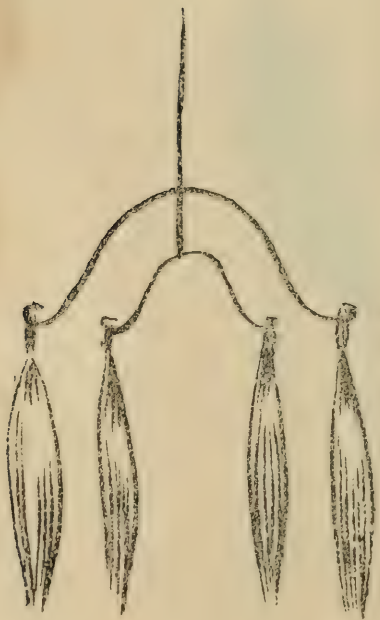
大へん立派な看板だ。三國史や水滸傳にでも出てきさうである。この形のものを俗に木牌坊と言はれてる。必ずしも材木屋のみが使用するものでなく、相當有力者が威嚴を示す意味に用ひたものださうな。材木屋だから材木を並べなくては、成らないといふ規則はない。何々組といふ土木請負業が、立派なビルデングを作つて、事務をとつてゐるのと同じ理屈で、この材木屋さん、材木の材の一本も置いてない。この木牌坊は古い時代のもので、現今ではわざ〳〵新しく製作する者もないと見え、いづれを見ても剝げちよろけたのが多く目につく。スケツチで見ても判る樣に、相當に費用の懸りさうなので、その點でも今は作らないとの事だ。看板の中でも元老格といふところである。


裕新木廠

鞣皮屋（熟皮房）

あちらの冬は相當に寒い、殊に北の山寄りは、身を切られる樣だといふ形容だけでは、濟まない相な。立つてゐると、足の底から寒さ冷さが、身體へ上つて來るのが判ると言はれてゐる。その防寒用の毛皮を、漂白するのが、鞣皮屋の仕事になつてゐる。犬の皮を狐に化けさせる事も、鞣皮屋の仕事だ。獵で射とめた獸物の皮を持つてゆけば、ちやんと仕上げてくれ、衣類の裏につける毛皮や、帽子などの製造も御都合で引うけるといふから調法だ。上圖は本物の羊の皮を張つたのを看板としてゐる。羊の毛皮は白いものだと思つたら黑いのもあるので、まごついた。黑いと言へば、あちらの豚で白いのが見えないのには吃驚した、皆な黑だ。下圖の右は、なめした皮の紐を賣つてゐる看板で。片ぺら皮で張つた太皷狀の下へ一尺ほどもある毛を、かもぢの樣にして下げてゐる。

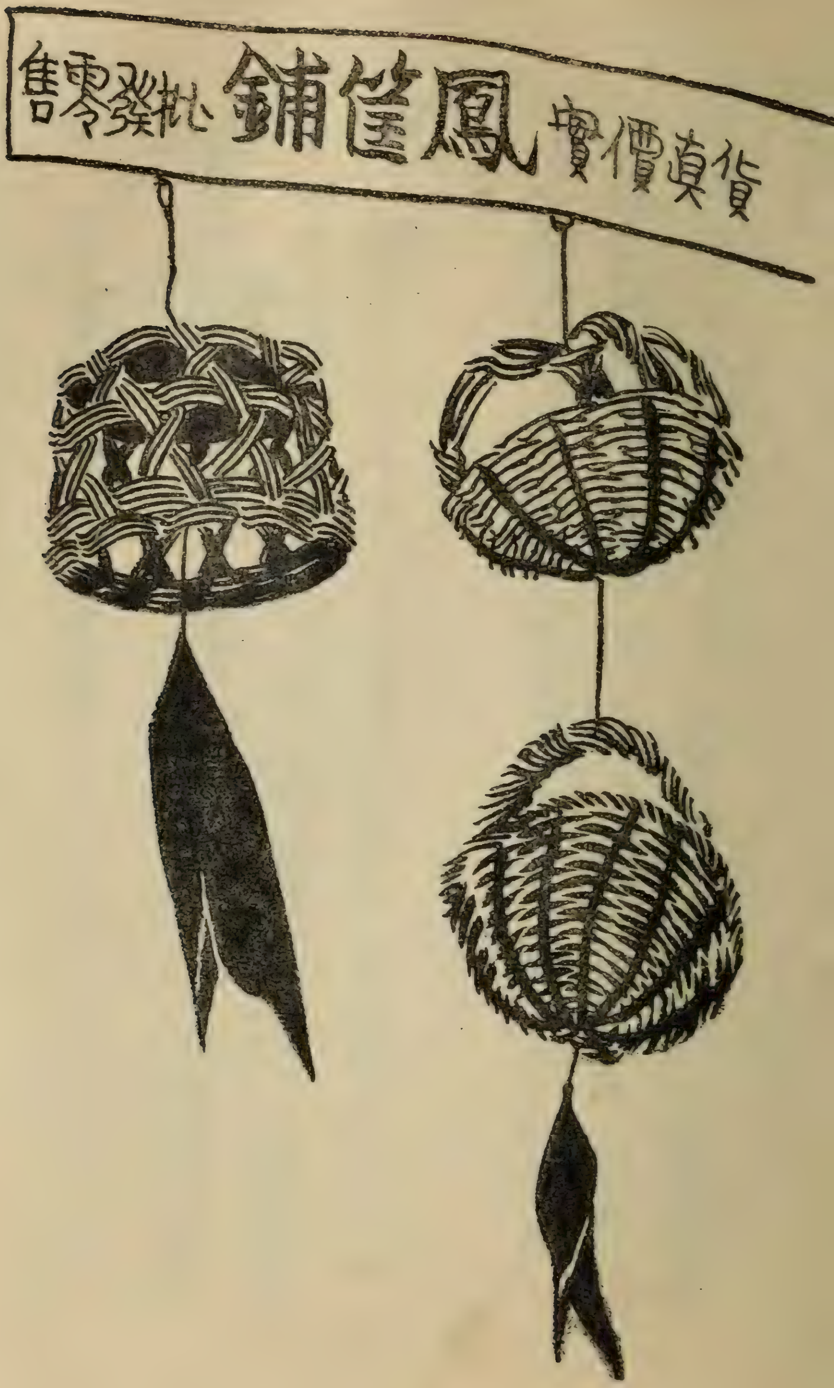

恒聚和皮舖
專熟皮袄



籠や（倌舗）

籠やと言ふても、人間を乘せる方では無い。柳條の籠を造つて、賣つてゐる店の看板である。品物は確で値は安く、卸賣りも小賣りもすると書いた、木札の下に製品が下つてゐる。昔から柳條の籠は、その目が吉祥のしるしであり、魔除けの呪禁となつてゐるので、田舍の宿屋等で、籠を棒の先に揭げたのには、登龍門に向ふといふ意味だといふので、昔は受驗生が爭つて泊つたと言ふことは、宿屋のところにでも說明した通りである。

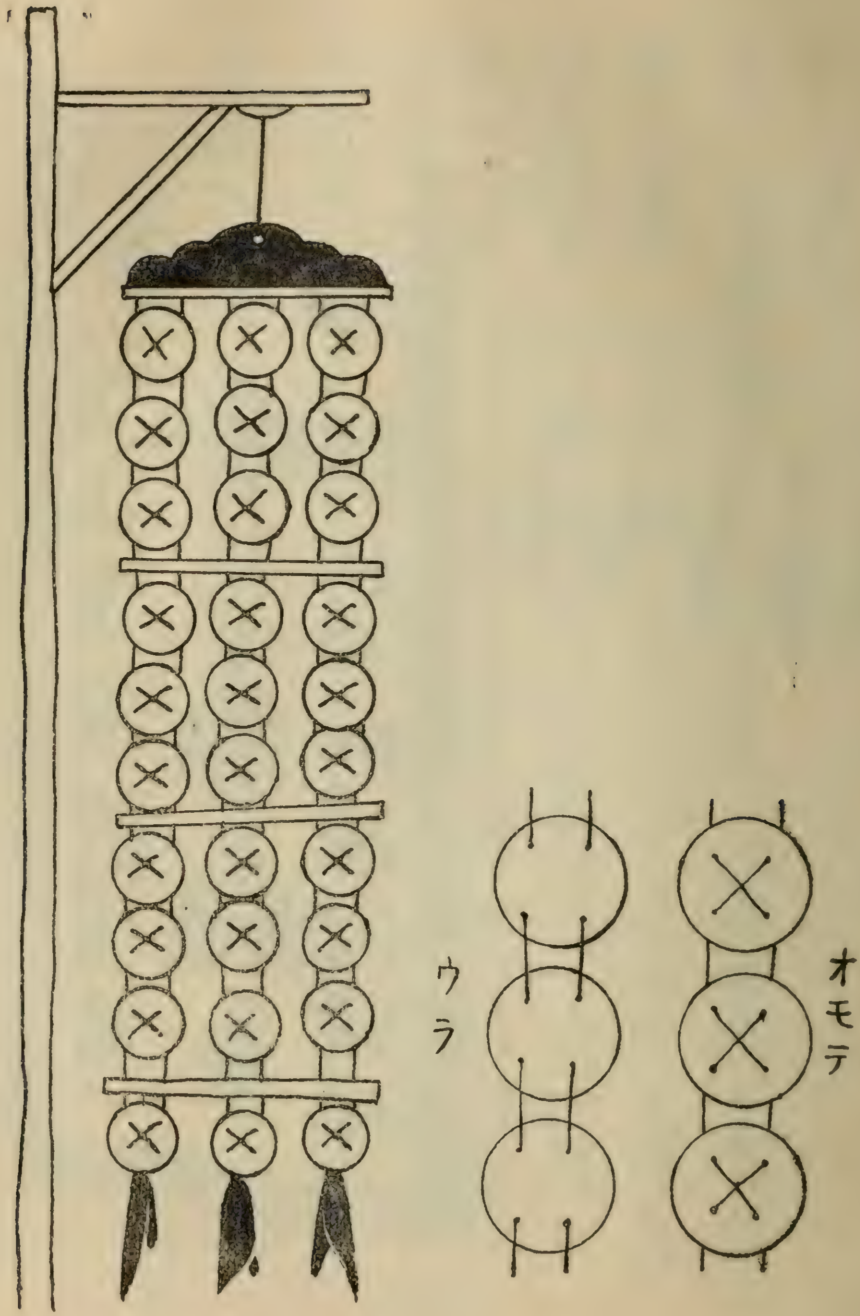
これらの籠は、市場への買出しには必要のもので、二の腕には必ずブラ下がつてゐる位で、需要は相當にある。


貨真價實
鳳筐鋪
批發零售

ブルキ細工や（洋菓子房）

一間位の長さに、ブルキ板を圓形に切つたものを、麻糸でつないで、中途に横棒を入れてある。ちよいと凝つて見えるが、よく〳〵見ると隨分ちやちなものである。麻糸で一ケづゝ瘤たんを作つて、結んであるところなんぞは、大陸的で氣の永い人間でなくては、出來さうもない。

ブルキ一切の細工やだから、相當な需用がある。しかし日本の樣にブルキ屋と言へば、トタン屋根、雨樋の製造屋かと思ふが、あちらはトタン屋根も、雨樋も必要のない家屋が多いから、仲々その方面では商賣にならない。矢張り何と云つても、ブルキ製の容器類が多いといふ。


ウラ
オモテ

かもじ屋（頭髮舗）

日本のかもじ屋と同じ樣に、かもじを下げてゐる。布の方の看板の文字にある「新式假頭」といふのは一般向きの髷の事で「大小燕尾」と云ふのは、漢人獨得の二ツ髷で、大小は色々はありと云ふ事だ。最近はかもじ專門では商賣成りたゝないのか、女に必要な紅、白粉とか、絲帶子（紐帶）なんかも賣つてゐる家が多くある。第一パーマネントや斷髮が婦女子の間に流行してゐるので、北京や天津の樣な大都會では賣れさうにもない事は、我我素人でも判る。しかしながら、漢人（滿洲人）相手にこうした特殊の店がある事も見逃せない。もつとも嫁入の時なぞには、かもじが必要だと云ふから、店を張つてゐるだけの事はあるわけである。

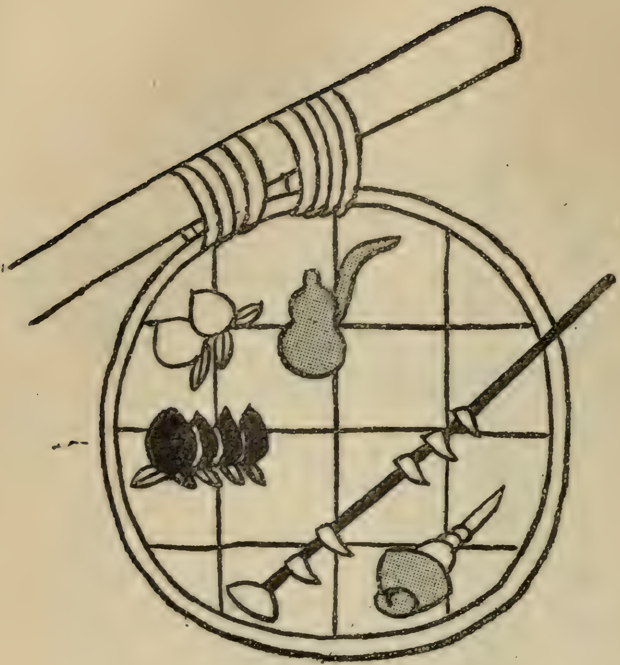
義春順
耑做各種新式假頭
大小燕尾頭髮無二

瑠璃作工や（琉璃作房）

瑠璃は梵語の吠瑠璃から來た言葉で青色寶なぞと譯されてゐる、透徹するものゝ意である。佛書に云ふ七寶玉の類で、白、赤、黒、黄、青綠、縹紺、紅紫等の類である。それを製作する所といふが、いはゆる、加工であつて、石を製るのでは無い。帶止めとか腕輪とか贅澤品の製作所である。聞くところによると、近頃は硝子で作つた仲々精巧な瑠璃細工もやつてゐるとか、眉につばでお買上げをなさい。

鋏庖刀や（刀剪舗）

鋏、庖刀やと言つても、看板で見るごとく、鍬の齒も作つてゐろ。あとは庖刀の色々と小刀狀のもの、それに鋏がついてゐる。これだけの物は製造してゐますと、實物見本でなく繪見本でいつてゐる。あちらの庖刀は大分我國とは形が違ふ。柄のないのは、肉なぞ骨ごと切るのに用ゆるもので、手に持つて叩く樣にする。少々地獄繪卷に出て來さうな庖丁である。

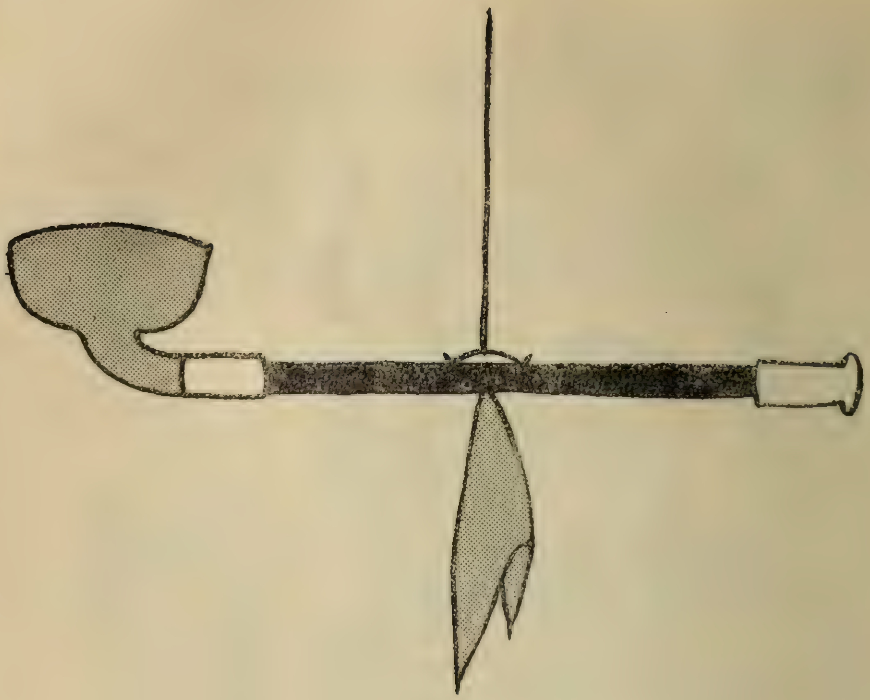


煙管屋（煙袋店）

日本にもあるので、びつくりしない看板だ。雁首の大きな煙管だが、この形に一定したものではない。製造兼販賣をしてゐる。木製の三尺のもので、雁首のところが金色、吸口と雁首の下の所が緑青、竹の部分が黒色、それに赤い布が下つて、色とりどり仲々綺麗である。店は煙管ばかりでなく、煙草の袋も賣つてゐる「煙袋玉器」と書いた看板がある家は金屬の金具ばかりでなく、玉石類の火皿吸口も造つてゐる事である。この外に水を通して吸ふ水煙草の製品もある。煙袋店とは吸煙具一式店といつた方がいゝ。

眼鏡屋（眼鏡舗）

これも日本にも有る看板だ、ブルキ製の物あり、木製の物あり、中にはちやんと硝子をはめ込んだものもあり、店の格によつて、材料が違つてゐる。相當の店では檢眼をするが簡單な家では、直接レンズを目に當てゝ、目に合ふたのを賣つてゐる。至極簡單だ、これで濟むところなんテ、まだ〳〵文化に縁遠い。



眼鏡
眼鏡

痣取り（去黒痣子）

支那は迷信の國だ、あんまり日本も、この點は笑へないが、支那は、その上手を行つてゐる。痣取り商賣も、支那民族性の一ツの表れである。道端のあき地へ、大きな布へ凶運の痣を書き込んだ男女の顏を描いて、周圍へ凶圖を見せて「善觀氣色去痣來順」と書いたりしてゐる。幾らで取るのだと聞いたら、一ツ五錢だが、二ツ以上なら、一ツに就いて三錢にする、數によつては二錢でも良いといふ。數でこなさうと云ふわけだ。どんな藥で取るのだと訊ねたら、家傳だから教へられないといふ。手提げトランクの上には、小鏡と藥瓶、筆と扇子に紙が載つてゐる。扇子は早く乾す爲に、煽ぐのだといふ。紙は脫脂綿の代用品である。

福
善觀氣色

造花屋（翠花作房）

日本と同じ様に、紙や布を使ひ、針金の心などで作る造花である。布に蝙蝠や鳥が描いてある。鳥は鳩ではないさうな。我國では外國流に、鳩は平和の印なりとかいつてるが、支那では鳩はそんな意味を持つてない。蝙蝠は福をもたらす動物として、あちらでは喜ばれてゐる。この家は造花を作つてゐる家である。主として造花は我國と同じく花輪の需用が多い、あとは裝飾用に使はれる。

ふいご屋（風箱店）

吹革の事を風箱、風匣、風櫃とあちらではいふ。看板はふいごを正面から見た形をとつてある。鍛冶屋で使用する、ふいごと云へばこれ以上説明する必要はなささうだ。それを賣る店である。箱形に房々としたものを付けたのは、見た目は面白い。

風箱

食料油屋（香油舗）

香油とは食用油の事である。町へは鉦を鳴らして食用油賣りが來て、大ていそれで間に合ふので、町の香油屋は、小賣商人の廻る附近の町には少い。日本と同じ様に、油屋は相當富有でなくては出來ないので、店構もしつかりした家が多い。そして必ず漬物屋等を一軒の家で共營してゐる。看板は一尺五寸丸の板製か銅製である。板の時は赤繪具で塗られてゐる。

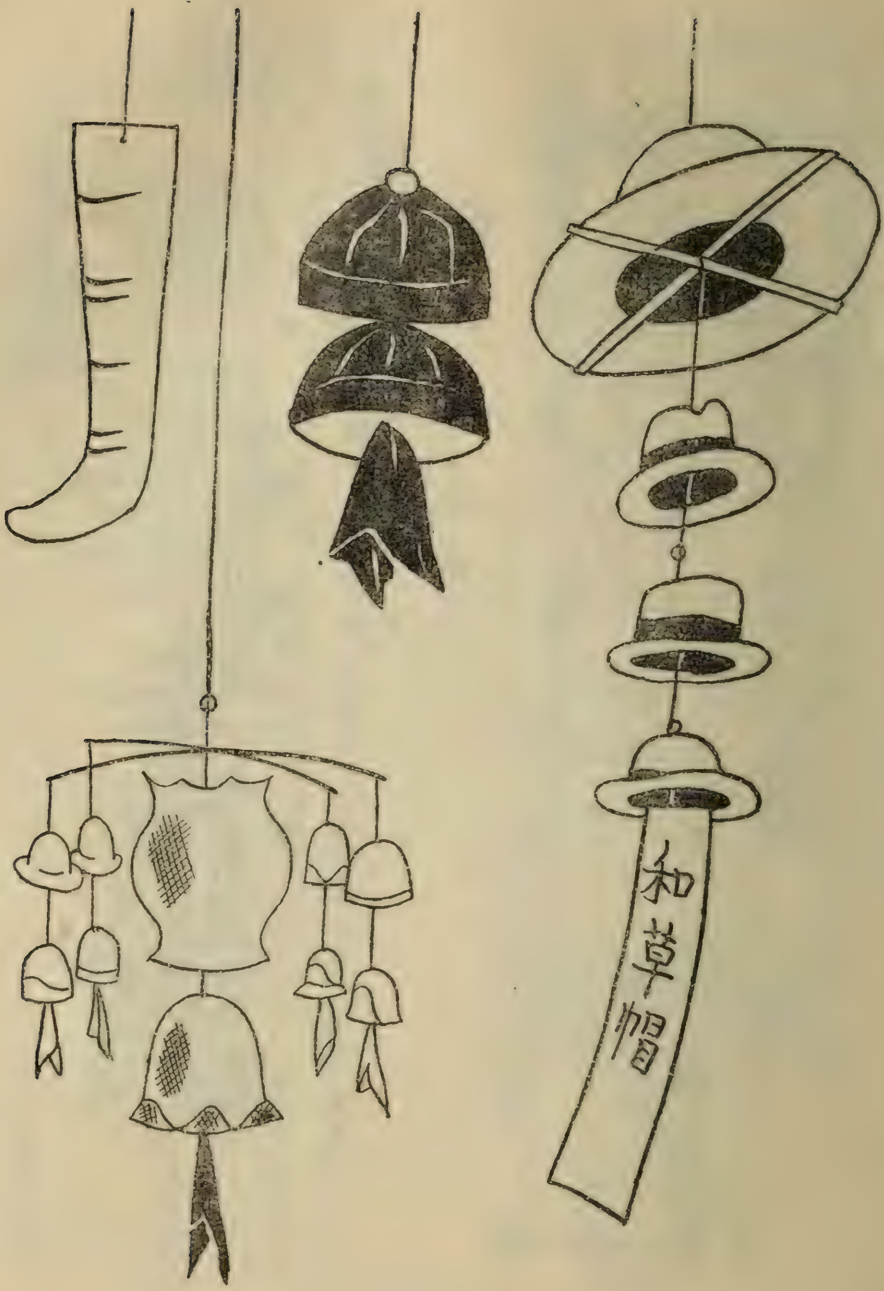
蠟燭屋（蠟舗）

縄梯子の様に蠟燭がつながつてゐるので、蠟燭屋とすぐ解る。別頁にある綺看板より古い型式である。この方の看板のある家の方が、古くから有る家だといふので、綺看板の家より需要が多いといふのだから面白い。製造もし販賣もしてゐる。日本でも大きな蠟燭の模型看板を出した家のあるのを、今でも見うける、國は變つても表現法には、あまり大差は無いやうだ。

小磨香油

唐物屋（洋貨舖）

唐物屋と日本流に言ふのは、適當ではないかも知れないが、賣つてゐる品物を見ると、まさに唐物屋である。手袋、靴下あり、帽子あり、半巾、タオルありであるから。圖の右は男帽子である、帽子の實物を順々に釣るしてる。これ以上の說明はない。草帽は草によつて出來た帽子でパナマ、麥藁を意味する。次のは日本で云ふ支那帽子である。これも實物である。この支那帽子は四つに折れてポケツトに入るに都合よく出來てゐるので、旅行者の土產の一つに成つてゐる。三番目は靴下である。靴下は男も女も穿くので、支那人には缺くべからざるものだ。ボールの上へかぶせて、足の形にして實物を出してゐる。下圖の壺の樣に見えるのは、いづれも帽子を現はしたもので、中央の大きいのは、一尺圓徑位ある婦人と少女用の麥藁帽子である。左右は男女の麥藁帽子で、これだけは實物大でない。こゝでは一まとめにしたが、一軒の店に帽子ばかりが三つ出てるわけでは無い。

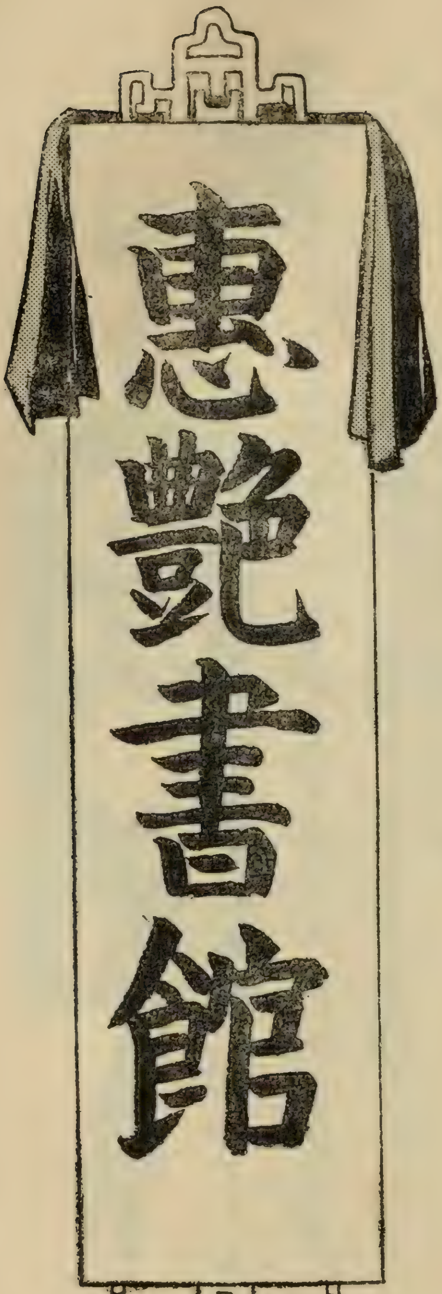

和草帽

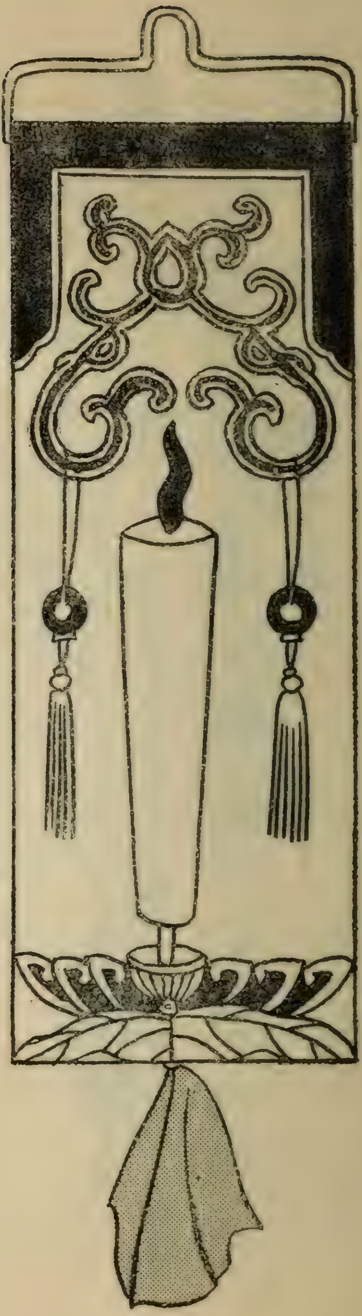
蠟燭屋（蠟舗）

縄梯子式の看板から見ると面白味が無くてつまらない。唐草模様をつけたり、蓮花をあしらつたり、苦心のところは有るが、迫力が薄い。こういふ繪看板の家は、蠟燭だけでは食つて行かれぬと見えて、きつと外に二三の異つた看板を出してゐるのは、常法の様である。蓮花の葉は、日本では佛くさいので、あまり喜ばないが、向ふでは平氣である。

藝者屋（書館）

書館とあるので本屋と間違ひあるべからずだ。書館とは藝妓屋で、置屋兼待合といふ所である。この看板で特長なのは、上部に下げた紅と緑の絹布であつて。北京では北班と云つて旗人の女が居る家に限られてゐる。紅は男緑は女を著す色で、兩性の表象とされ、婚儀にも用ひられ吉祥の意から來てゐる。この時は下部に紅布を下げない。支那の藝者屋は藝妓の顔見世をさせ、氣に入らなかつたら、遊ぶのをやめて、歸つても來られるといふのだから、心がけの悪い連中は、顔だけ見に歩き廻ると言ふ。


惠艷書館

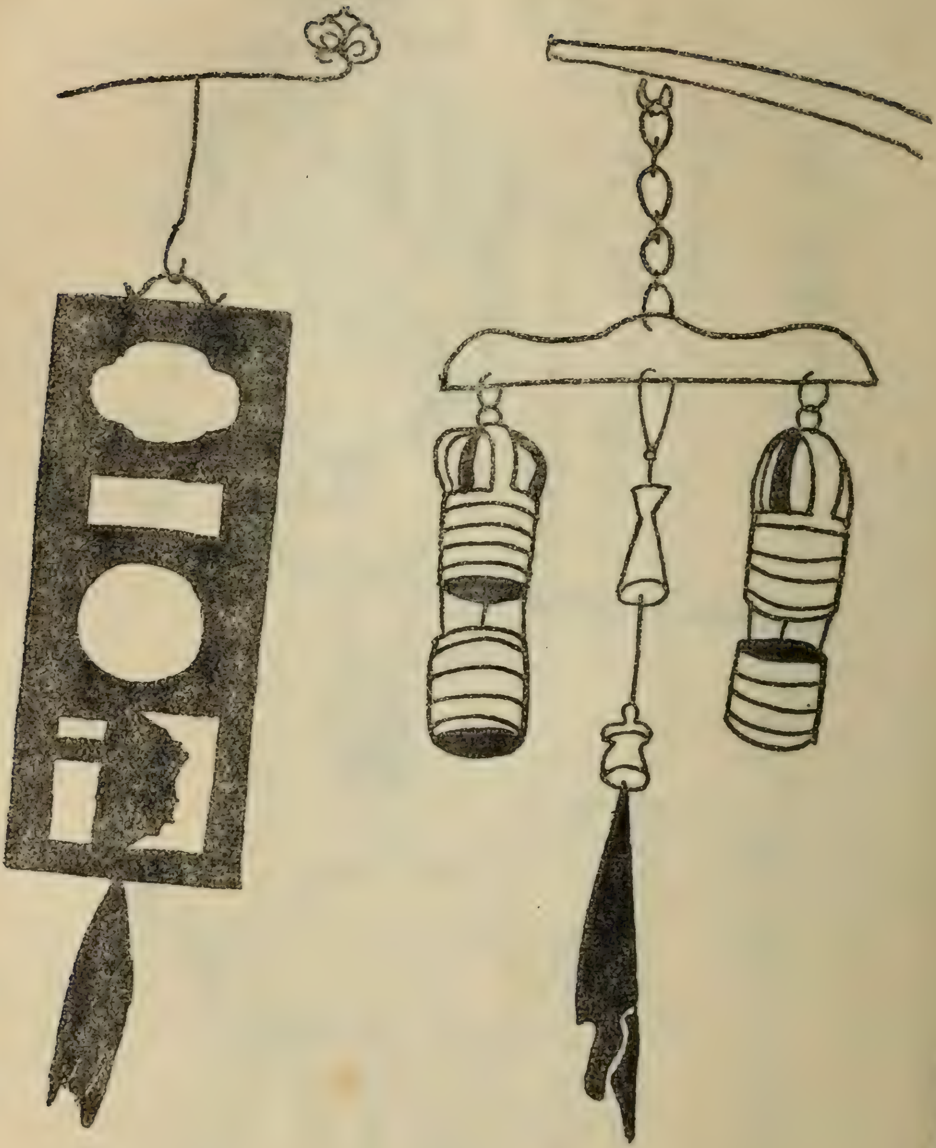


錫器店（錫器舗）

支那では何と言つても銀が一番尊ばれるが。銀より格安で、外觀が銀に最も似てるから錫も愛用珍重されてゐるので、各所に、錫製器具を賣る店がある。酒の瓶や曲物の實物をブラ下げてゐる看板は、製作及販賣をする事を示す。こうした店は銀器店などから見ると、大分格式がさがつてゐる。

銅器や（銅器舗）

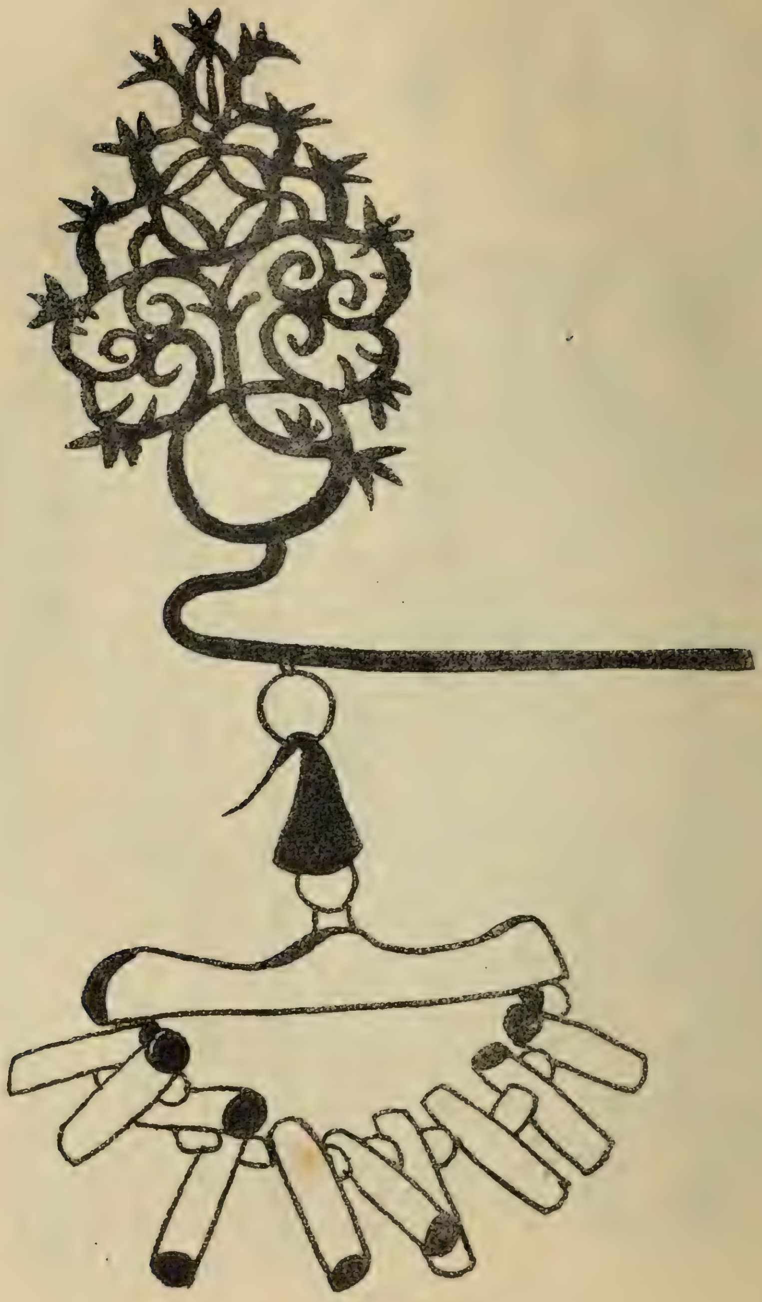
銅製のものを賣つてゐる店である。看板のものは主として裝飾用に用ゆる樣なものを並べてゐる。家屋等の隅々の釘かくしの樣なもの、角々の摩擦をふせぐ爲の、被ひ金と云つた工合である。黒地に金で現はしてゐる。



爆竹屋（炮舗）

爆竹と言ふから、竹の筒にでも花火が入つてゐるのかと思つたら、厚紙に包んだ花火で連續してゐるので、一ツ炸裂すると次から次へと火が移つて、その音が竹を割る樣なので竹の字が用ひられたといふ。鞭代りに、竹竿の先に爆竹をブラ下げるので鞭炮と言はれてゐるといふ。年中行事や、結婚、葬式、店開き等には無くてはならぬ道具で、民俗的に必需品である。爆竹は日本でいふ花火とは形式が異つてゐるので、花火やは別に有るといふ。看板は爆竹の連續した木の模型を下げてゐる。これは爆竹屋には違ひないが製造屋の方で、小賣もする事は需に應ずの方だ、小賣りは小賣で、爆竹の看板を出さずに賣つてゐるといふ。

支那の除夜には、爆竹を盛にやるので、その音で眠れない者は、眠れないと云ふ話である。



あんぺら屋（蓆箔舗）

支那の夏の陽は強いので、家の周圍をアンペラで圍んで、陽をさける樣にしてゐる。それだけに夏が近づくと、アンペラの需要が多くなる。そのアンペラ屋の看板は、實物のアンペラを大きく卷いて、つゝ立ててゐる。圖の左の方がそれだ。門みたいのはアンペラ屋で製造してゐる、夏の庭園に置く暑さよけ兼裝飾の一つで、竹で編んである。夏は明け放しにするので、かうしたものを据ゑて、人の目をごまかすといふわけである。後にアンペラを貼ると立派な塀代りになる。夏がすんで、アンペラを取り除くと、立派な庭の裝飾品となる所なんか、學ぶべきところが無きにしもあらずだ。實物看板の中として大なる物の一つである。

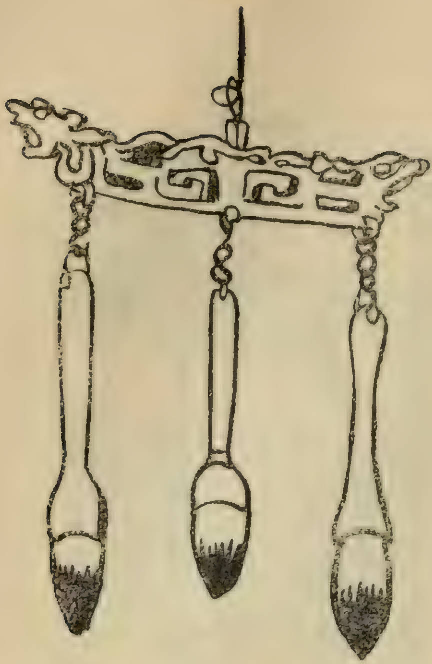
蓆舖

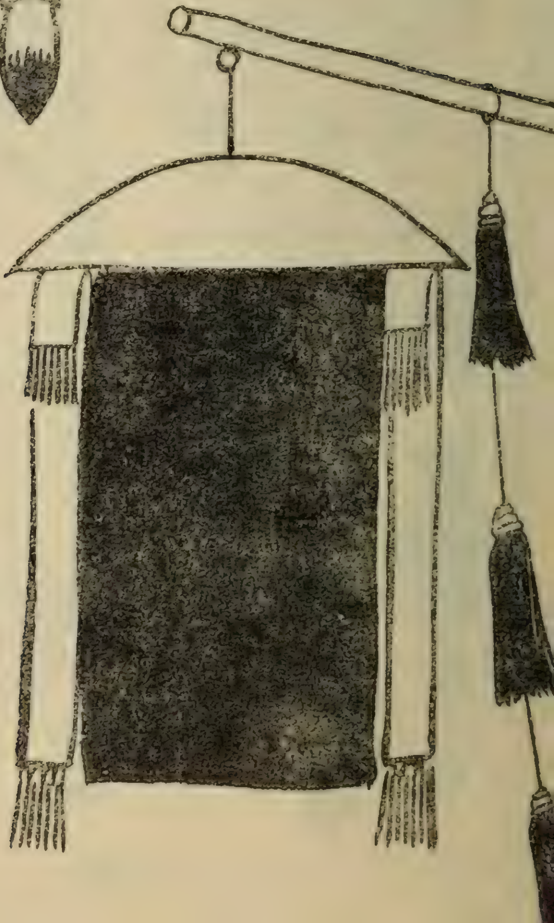
小帯や（絛帯店）

絛帯店とは腰紐や前後のあかない褌子の下を縛る小帯類を、造り、賣りする店である。日本では使はれてない支那特有のものである。看板はいづれも實物を下げてゐる。伸糸狀の掛金に兩側に紐、中央に赤布を懸けてゐる。赤布は三角紅布の代理と見てよからう。房のついたは絛帯の房で、それで紐全體を現はした事になつて居る。

筆墨店（筆墨局）

文字の國支那では、今も毛筆が全盛だ。だから、この種の店は、どの町でも相當の店構へである。龍首の木彫に、土筆の様な筆を木で作つたのを下げてゐる。實物では長い事もたぬので、模型といふわけだ。





幌や・天幕や（張房舗）

幌製作専門の店だ。近頃はお好みに應じ天幕もするとある。幌の擴がつたところを、途中から縛つた圖柄は氣のきいた物である。下のかんな屑の樣なものは飾りの糸ださうな。布に彩色で描かれてゐる。

銅器屋（銅器舗）

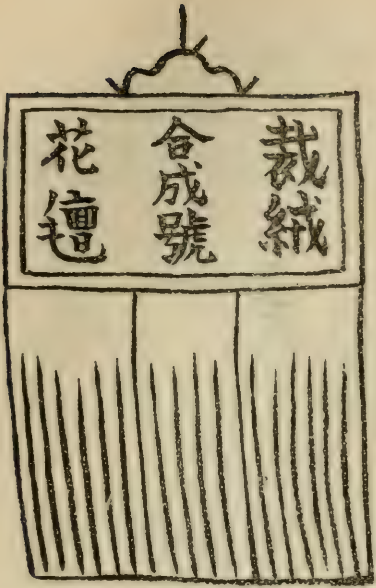
銅器屋は銅器屋だが紅銅舗といふ方で、赤銅細工専門店だ。水差し、花瓶、さじ等が板に赤銅色で書き現はされてゐる。

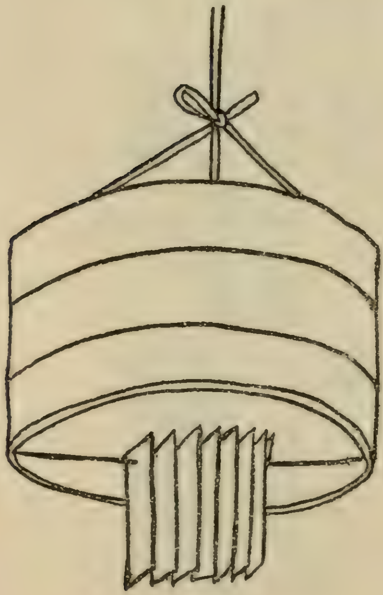
毛布屋（毛氈舗）

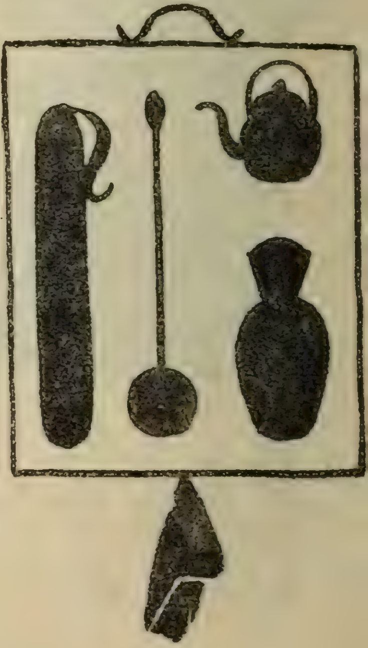
毛布を販賣する店である。製造もすると有るが、多くは仕入物が多い。注文があると、製造工場に廻しますの類で、目の前で製造はしてゐない。實物の片をブラ下げてゐる。

蒸籠や（籠屉房）

饅頭やマントウを蒸すのに缺くべからずの蒸籠を作る家の看板だ。上から、草色、赤色、草色、底は黄色の繪具が塗られてゐる。下の板片は、赤布の代用である。


裁絨
合成號
花氈



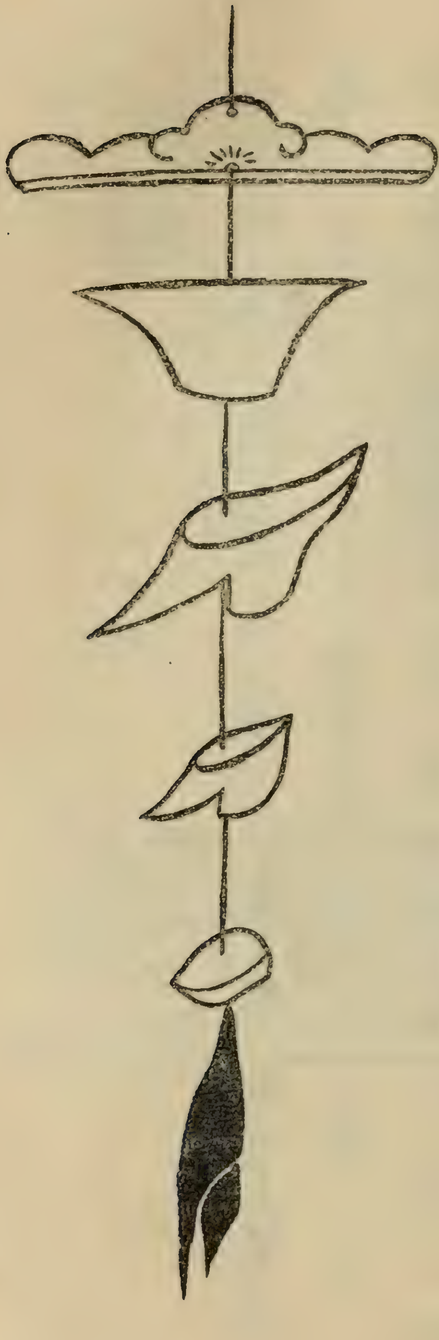


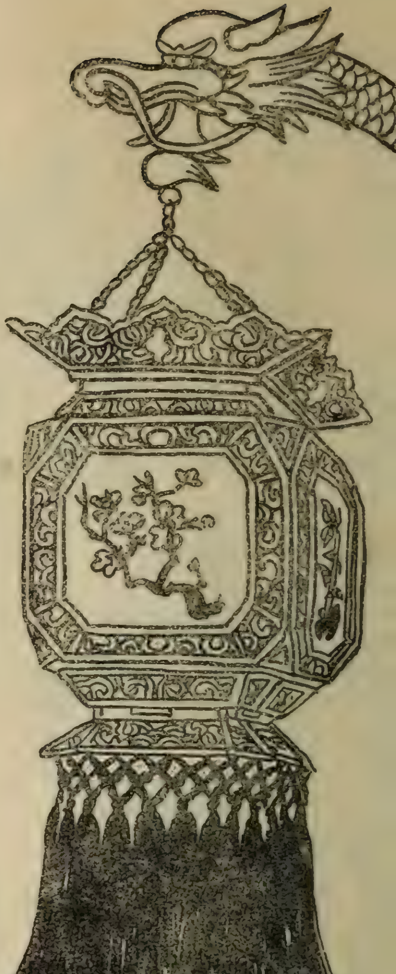
燈籠屋（燈籠鋪）

日本人から見る、支那色濃き燈籠を作る店だ「牡丹燈記」に出てくる牡丹燈籠も勿論作る。日本の牡丹燈籠と云ふのは盂蘭盆に使用されてゐる燈籠の事に成つてゐる。芝居や講談でする、牡丹燈籠の新三郎やお露の事は、支那の古典の「牡丹燈記」を三遊亭圓朝が飜譯したものであるが、燈籠と云ふとすぐ牡丹燈籠を思ひ出させるは、圓朝の腕も大したものだ扇屋が夏すぎると店替する、商賣屋がこれである

靴の下底や（木履房）

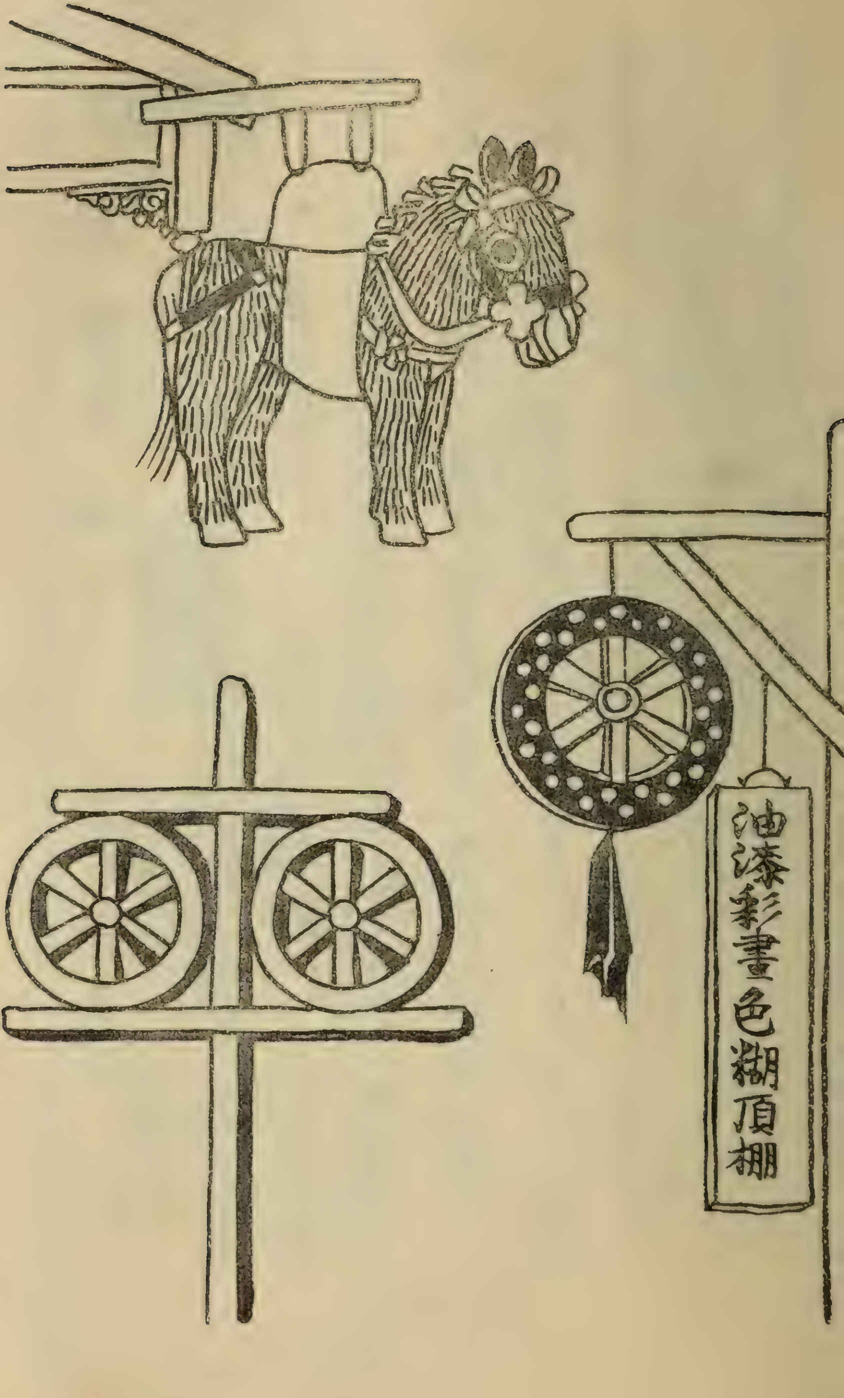
雨が降ると、あちらの靴は、布で出來てゐるので、雨がしみるので、その下へ釘づけで木の靴底を付ける店があると見えて、こうした商賣屋があるのは面白い。色んな形のある事もこれで解る。支那芝居の女形が穿く女靴の中味にも似てゐる。あの女形が自分の足の下に、更にこの靴底に似た靴を穿いてるといふと、嘘だと云ふ人があるが、本當だから驚くべしである。





葬具や（冥衣舖）

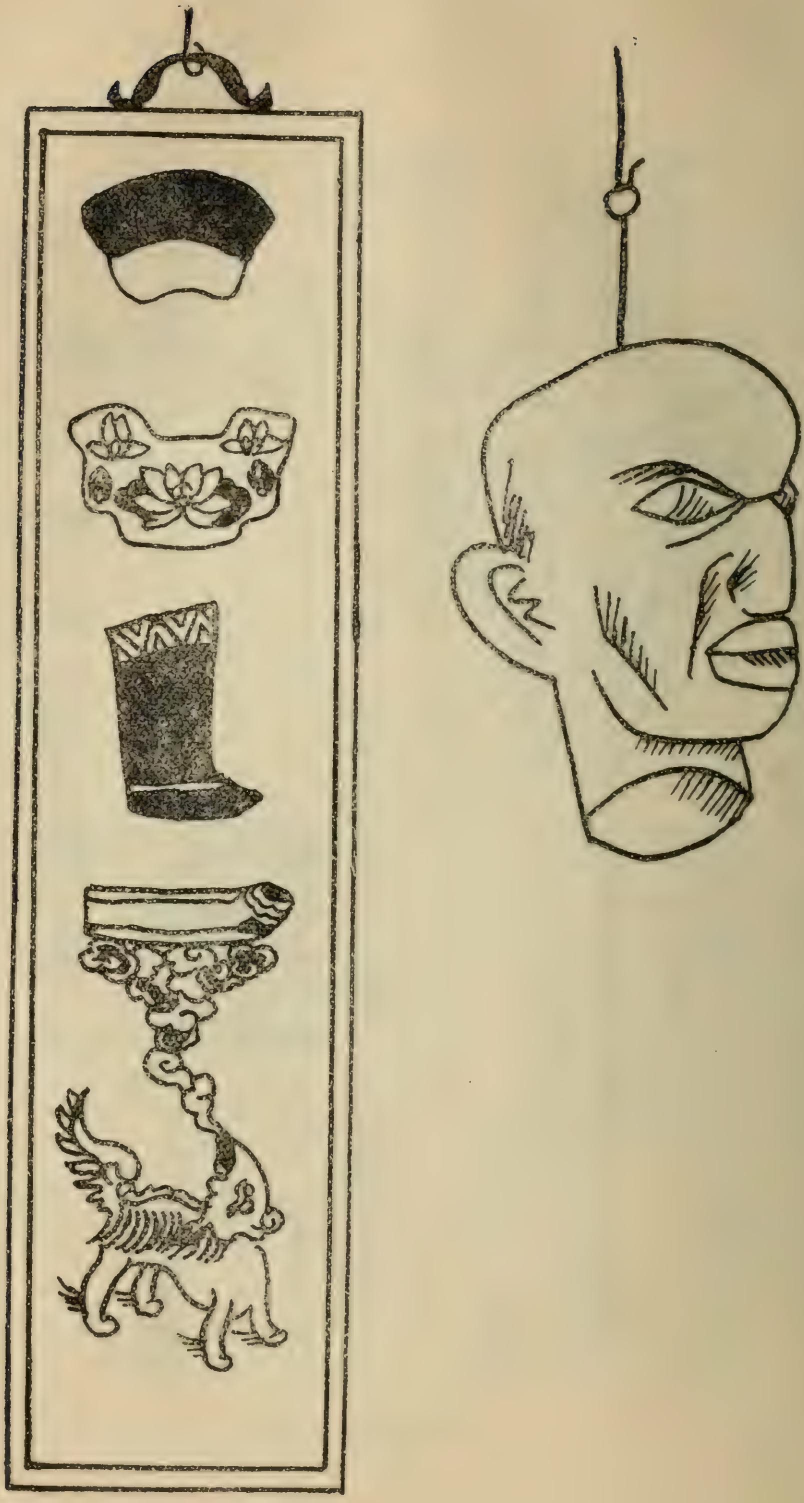
葬儀に附屬した道具。棺とか、埴輪に代る高粱を心にして作る、轎、人形、馬、屋形、錢寶。これは墓場で燃すのだ。さう云つた物を扱ふ家を「冥衣舖」といふ。目印としては大がい張子製の馬が出てゐる、軒に下げたのと、地面へ置いたのと二通りある。大小もいろいろあるが、左右三尺位のものが多い。田舍へ行くと、車の輪を張子で作つたのを吊下げてゐるのを見る、赤地に金紙の丸で錢を現はした、一尺五寸位の圓形だ。車の輪は、佛さまを運ぶのに車によるので、それを現はしたものだ「油漆彩畫色糊頂棚」と內職に畫舖の仕事もやると見えて看板が出て。葬具屋ばかりでは食へない事を示してゐる。高さ一間半位の棒の上に、二ツ車を出した看板も同業である。日本なら車屋と言ひたい所だ。


油漆彩畫色糊頂棚

葬儀屋（槓房）

あちらでは冠婚葬祭のやかましい國だから、仲々幅を効かしてる商賣で、古くからあるものだといふことは、綸看板に描かれた、葬式用の帽子、枕、靴などがいづれも前清時代の形式のものなので判る。葬儀屋と葬具屋とは我國なら同じだが、支那では違ふ商賣で、別々に成つてるのは面白い。葬儀屋は葬儀の請負が主で、葬式用の品物を便宜上賣る。

北京のある店の看板に、張子の人間の首をブラ下げてゐるのには、びつくりした。人が死んだといふわけかと聞くと、それは葬式の際に墓場で燒く人形の首だといふ事である。こうしたものは本格に行くと、葬具屋の仕事であつて、葬儀屋のやるべきものでは無い。でもあんまり珍奇なので、その一例として此處へ加へて見た。



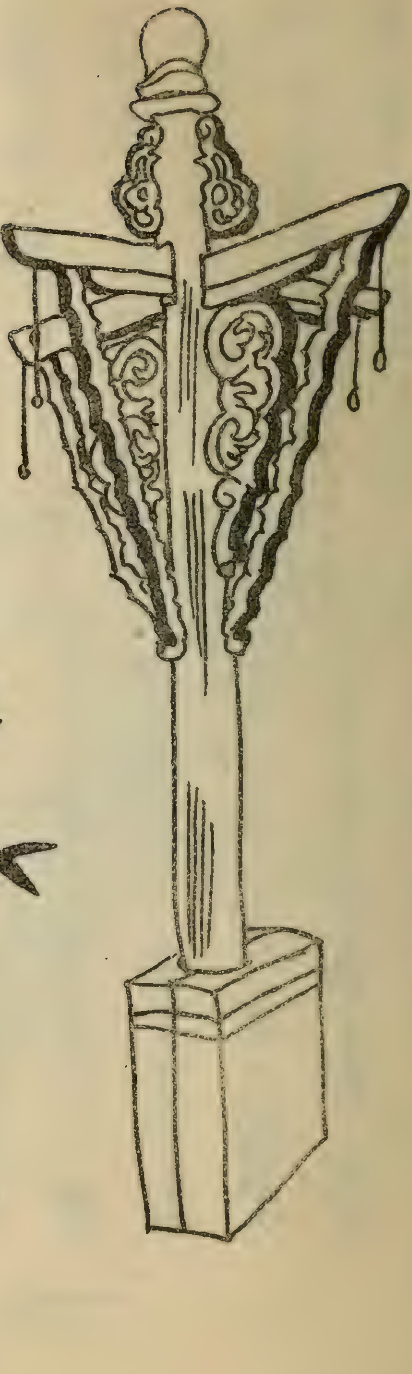
廣告柱（告牌塔）

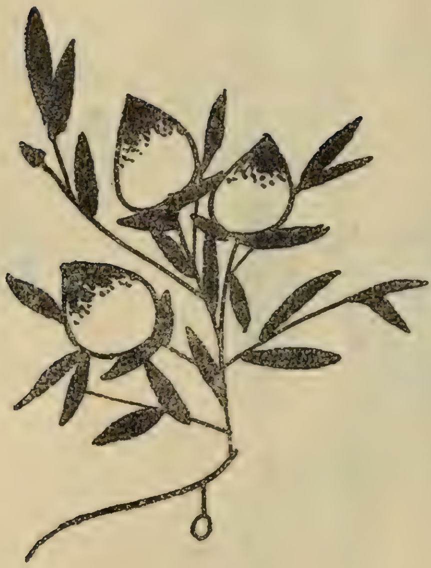
外國にある廣告塔と同じ役目のもので、古い支那の遺物の一つであるといふ。北京の街はづれに殘つてゐた。街はづれと云つても、街の四辻の角にあつて、店屋と關係なく立つてゐる。四方になつてゐる上部から看板とか、廣告用のものを吊り下げて、道ゆく人の目を引かせたといふ。今で言へば一種の有料廣告塔といふところである。相憎、今は一枚の看板もなく廣告柱の名に背いてゐる。

看板支柱の上模様

看板を吊す支柱の棒の上の模様は、いろ〳〵今迄出てるもので、御覽になれば各種ある事が知れるが、左圖の樣なのは變つてゐるので、別に描いてみた。

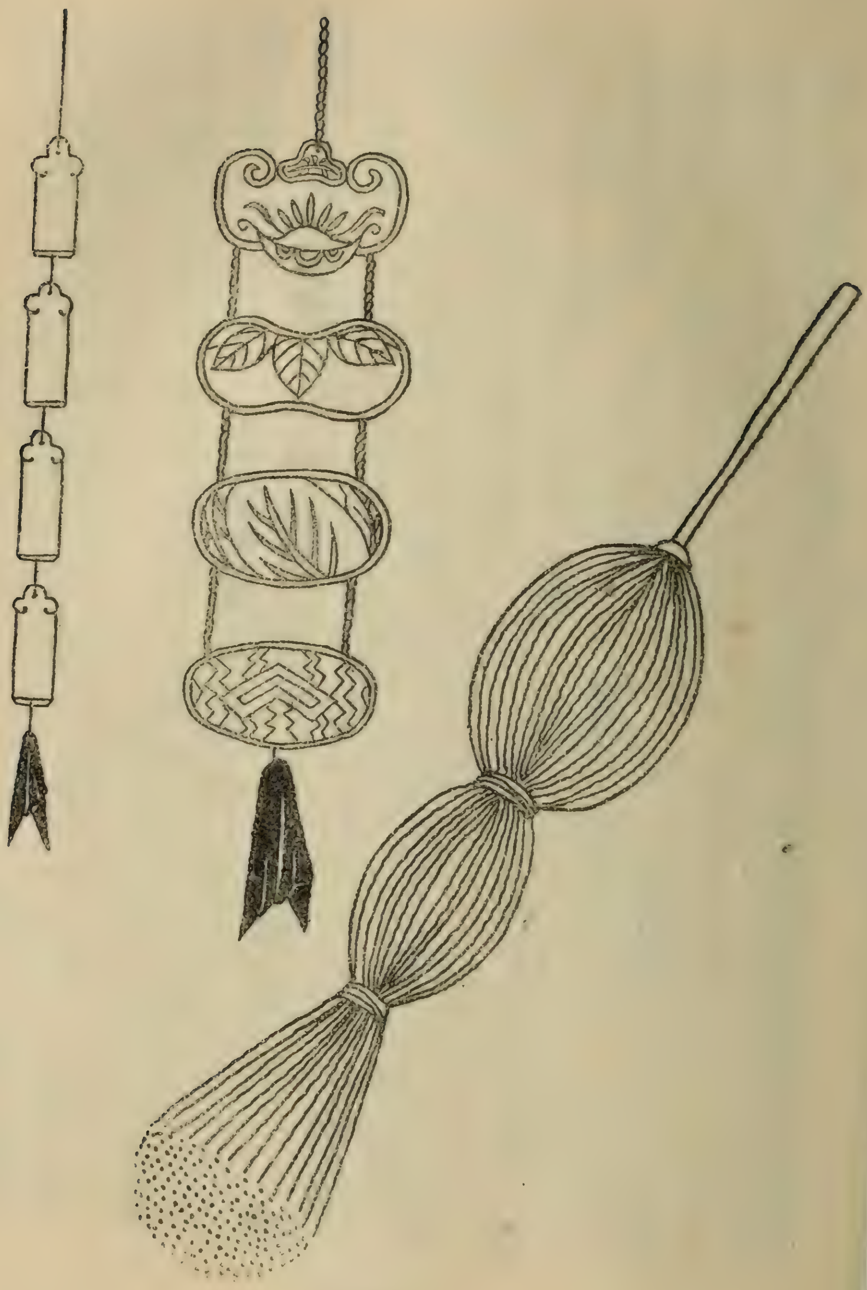
これは「如意紋」と云ふ雲形を表したもので、吉祥の表象になつてゐる。雲なのでその上に星が現はれてゐるのは子供だましの樣で面白い。桃も左下圖の樣な變つたのがある。





元宵餅や（元宵餅舗）

この箒みたいのは「元宵餅屋」の看板で藁で出來てゐる。元宵節といふのは正月十五日で、元夜とも言ふてる。この日を祝ふて必ず喰べる、丸い餅を形どつたものであるといふ。煮團子の事を、元宵ともいふ。この餅は日本のしるこの樣に甘い砂糖湯で食べたり、油であげて喰べる。この看板だけを出す餅菓子は、非常に數が少なく、小店などでなくては見られない。普通は、菓子屋が元宵の時に、臨時に出す方が多い。左の二圖は一尺長方圓の板、厚さ三寸位な金粉塗で、菓子の形を表現したものである。左のは長さ五寸程、二寸五分巾の板で、これも金粉塗りである。これは何でもある菓子屋の看板である。



支那看板について

支那の看板には必ず紅い布を結び付けてあるのが特徴とされてゐる。その付け方や大きさは一定してないが、大てい看板の下に方形の紅布の一端を結びつけて、ぶら下げ擴げると菱形になるのが普通である。中には細長い三角形のもある。普通は一條、たまには二條三條のもある。異つた方としては看板の上部に∩字型につけたのがある。これは店を開いた時に飾つたのを、普段でもそのまゝ附けてゐるもので、これの場合は下の方に菱形布を附けたのと、無いのとの二通りがある。

昔から支那では紅い布はお目出度い意味として用ひられてゐて、事の大小に關係なく、喜び事、正月の祝ひ、その他の祝賀には、必ず例外なく紅布が用ひられる、また紅布には魔除け、火防せ、生産の意があると云はれてゐる。こうした民間傳説の一つとして次の樣な話がある。

昔々その昔、北京の清代門外の花市大街に大火があつて、商家が一百餘戸、千百餘棟を

焼いて、損害數千萬元といふ大損害があつた。その中に首飾屋の天吉泰と洋品店の徳祥永の二商家だけが不思議に燒殘つて話題になつた。その大火のあつた前の日、一人の老人がある呉服屋に來て紅い布を一尺買つて行つた、その翌日夜の一時頃西方から火が出て夜明までに全部を焼拂つた、その中に燒殘つたは、天吉泰と徳祥永の二軒だけ、後で調べて見ると紅布を買つた老人といふのは、火神仙爺と云はれる火の神さまで、二軒の燒殘りの家は、旗桿の上に紅い布をつけてゐたので、災害を免れ得たのだと、眞面目に紅布火防の効めの云ひ傳へがある。日本では火事の時、女の赤い腰布を火防になるので、振つたと云ふ事が、江戸時代にあつたとある。これなぞは支那の紅布信仰からの轉化らしい。赤い都腰巻をして、大正の大震災で水へ飛び込み、毛糸が水を吸收して、その重みで逃げられず、焼死した婦人が澤山あつたとの事だ。水につけずに振れば、案外一命は助かつたかも知れなかつたであらう。

支那の看板は「幌子」「招牌」「牌子」と言ふてゐる。看板によつて客を招くの意である。もつとも元始的な實物看板と、繪畫を利用した看板、文字による看板、按示的の品物で表

現した看板と、まじないと縁起物を付けた看板、宗教的看板と大別出來る。實物看板は實物を店先に掛けて、文字の知らぬ人にも、すぐ判ると云ふ手で、日本の足袋店の看板に足袋の形を表したと同意である。繪畫を利用したものは、所謂繪看板である。文字看板は繪を文字に代へただけ。按示的看板は、日本ならば酒屋の看板に、杉の小枝を毬形にして下げてあるのや、燒芋屋の看板に十三里とかいて、九里四里で、栗よりうまいと言つてゐるのと同意で、支那も日本もこの點は一寸では解しかねるものがある。まじないと縁起の看板は、それを表象したものを付した物の意で、利殖繁榮をシンボライズした物を付けるとか、瓢簞の形の看板をつけ、口から甘露の流れを現して、瓢簞から駒が出たといふ縁起を現はした類である。宗教的看板とは、回々教徒のみに品物を賣る店の看板で、支那でも滿洲でもこれは、はつきりと示してゐる。（この記事は、小林胖生先生の御教示による）

街の物賣

目で見る看板に替つてこんどは耳の看板を描いて
みる耳による職業は音によつてその何物かが解る

研　や

鋏庖丁とぎ屋は、鐵の板を四枚程、綱でつないで、丁度日本の樂器のびんざゝらに似たのを、ガチャリン〳〵と振り鳴らしながら歩く。この鐵の板を「鐵拍板」と云ふ。この研屋の中には、チャルメラを吹いてくるのもある。（右上）

理髪や

かみどこ屋さんは、毛拔に似た眞鍮製の物の中に、眞鍮棒を入れてビーンビーンと、はじいて氣持のいゝ音を立てゝ來る。客用の腰掛と、洗面用のかなだらひや、ブラシ類の一式を天びんにかついで居るのが面白い。（左上）

猿まわし

日本のと違つて猿まわしは大抵犬も遣ふて居る。中には犬ばかりだと、廿日鼠を相棒としてる。犬ばかりは犬の曲藝といふてゐる。ガンガンガンと、銅羅を鳴らして客寄せもし曲藝の伴奏にもする、これは猿まわしも、犬の曲藝も同じである。（下）

胡弓うり

支那樂器の一ツ、胡弓の賣手は、自分で一曲や二曲は彈けなければ、商賣に成らないといふ。日本と同じ樣に流行唄もやるが、大抵は昔から傳はつてゐる、支那の唄が多いさうである。（左中央）

豆菓子うり

ガンガンガンと、連續的に小さい銅鑼を木片で叩いてくるのは、豆を餅で包んで蒸した菓子を賣りに來る商人である。容器の側へ、小さい薄い腰掛をつけてゐるのは、自分が往來で休む時に用ゆるのである。（上）

玩具うり

グワーン〳〵と小銅鑼を、棒片で叩いて來るのは小童相手の玩具やさん。青龍刀あり、武者の面あり一錢で二ツの太鼓あり、泥のお人形や鷄、あやつり人形もある。私が見たのには、賭博で分廻し式に玩具を並べ、廻した針で、一錢で十錢位のものも取れる樣にしてゐるのがあつた。賭博の國支那だけに子供が喜んで、この玩具やを取圍んでた。（下）

燈油うり

カランカンと振太鼓から音をたてゝ來るのは燈油屋だ。電氣があるので、今は神前や佛前用に使はれる。この太鼓は銅板で作つてある太鼓で、西藏の方から出てきたものであるといふ。それだけに音が、皮太鼓より鈍いが、調子は高い。（下）

鍛冶屋

鍛冶屋と言つても、茶碗のつなぎもする。かついでゐる屋體に二寸七八分の小さい銅羅を下げてあつて、その上に、くさりに分銅が付いてブラリ〱うごいて居る。これはブラブラ歩くと肩の工合で、揺れ動いて、ひとりでに銅羅に分銅がぶつかつて、チーンチーンと音を出す。相當あたまの良い不精者が發明したものであらう。（上）

食用油うり

中央が高く飛び出てゐる。銅羅を木槌で叩いてくるのは、食用油うりである。銅羅の大きさは八寸五分位直徑の丸さである。油屋は上着の上に必ず前掛、又は別にもう一枚、上着を着てゐる、油がつくからである。（右中央）

賣卜者

俗に算命とも言はれてゐる、大抵瞽者である。蛇味線を彈いて來るのに賴むと、依賴者の生年月日と干支を聞いて、蛇味線に合せて歌のやうな口調で、運命や身の上を語る。單に、蛇味線を彈いての門付は、それは遊藝師の方で、賣卜はやらない。圓板狀の鐘を手に提げ、その握りについてる撞木で、カーンカーンと鳴らして來るのも賣卜者だ。一つところに鐘と撞木とがついてるのが他の算名者と違ふ。この樂器は銅點と又は點子ともいふものである。大抵占料は十錢から六十錢といふのが相場である。（上）

梅汁うり

最近は酸味のシロップに水を割つてるといふ。手の中へ入る樣な、椀と皿との合の子の銅製の物を、片手の中でチンカラチンチン、チンカラチンと鳴らして「うまいよ〳〵呑むと胸がスーッとする、一杯一錢だよ」と言ひながら賣つてゐる。この商賣は夏の物。（下）

飴細工や

日本でもある飴細工や、日本の近頃は衞生上、口でいき吹き込んで、ふくらますのは否けないと言ふので、その姿が見えなくなつた樣だ。支那の銅鑼をボーンボーンと叩いてくる。作る物は支那芝居のものが多い。

爪切り

日本では考へもつかぬ商賣だ。風呂屋では營業種目の中に入つてゐるが、流しのあるのは珍である。T形の木をV字形にして、下の釘がゆるく、手で動かすと頭の一文字が打ち合つて、微妙な諧調音を出す。（下右）

算命

賣卜者にも、その看板に色々變つたものがある。片手で横笛を吹き片手で杖を突いて來るのがあり（上左）報君知と云ふ四ツ竹の樣な竹、片方は完全な半分位のもの、これをカチカチ叩き合せながらやつて來るのもある（左下）報君知の方は目開きもある、といふ。

靴釘や

革の雨靴の裏へ打ちつける釘、打つて置けば、へりが少ないといふ釘である。釘を西洋料理のランチ皿を大きくした樣な容器に入れて、片棒の荷には、鐵で出來た大ぶりな金槌と釘拔きをぶら下げてゐる。これを鎖で下げて、これを打ち合はせ音を出す。釘は近頃は西洋風の靴が出て來たので、それにも用ひられてゐる。（上右）

盆賣り

平たい食器の事を盆といふ。これが腰高になると鐉といふ。この食器はいづれも木製である。これを賣るので、それの小さいのを撞木で、カンカチカンカチと叩く。案外遠く迄その音は響く。昔はこの食器は賣るばかりでなく、物々交換だつたといふ事だ。（下）

油うり

普通の食用で無い油を賣る商人は、梆と云ふ樂器を用ひてる。これは木魚の様に木をえぐつて作つてあるので、冬寒夜靜時、賣可賣聲數里と云ふ程、音が高い。殊にこの梆を使ふ商人の中でも、この油賣りは特に叩きが激しいといふ。カンカンカーンと強い音が出る。支那芝居では夜廻人がこれを叩きながら出てくる。（中央）

台所道具うり

臺所道具屋と云つても、家庭道具も交つてゐる。笊もあれば、はたきもある。籐枕でござれ、蠅叩き、ブラシ御座いである。圖にある乳のやうなものは、瓢箪を二ツに割つたもので、水を汲んだり、米をよそふ杓子にも成るものである。これをトンテン、テントンと拍子面白く叩いて客寄せをする。（上）

細麵の油燒賣り

麵の細いのを纏めて、それを油燒にした菓子を賣つて歩く。この外たいてい饅頭の上に、日本の道明寺風に米をつけた菓子も一緒に賣つてゐる。この菓子屋も油賣の使ふ「梆」の小さいのを鳴らしてくる。（上）

かりん糖賣り

これも梆を叩いてくる。かりん糖の事を油果糖といふ。かりん糖と云つても、日本のより大きい。グルグルとねじつてあるのを見ると、一尺位のもある。この賣手の梆は細麵の油燒賣りよりも少し大きいが、油賣りより小さい。（下）

蒸菓子うり

米を主材にした餡入の餅菓子を、いつも湯氣の出てる樣に、あたゝかくして賣つてゐる。これも梆を叩いて、客寄せをする。（左中）

砂糖菓子うり

かんな屑で作つた喇叭を吹いてくる。と思つたら、蘆の葉を捲いたものださうだ。砂糖菓子といふのは、砂糖を基礎にして作つたもので、飴玉とか、ドロップ式のものである。（右中央）

雑貨うり

歯ぶらし、歯磨、簪、靴下と言つた様な雑貨を賣つて歩く商人は、太鼓と銅鑼の二ツが一緒になつてゐる樂器を鳴らしてくる。太鼓がテンテン、銅鑼がチンチン。兩方でチンテンテレテンチンと賑かである。（上）

飴うり

棒に成つてゐる、さらし飴を賣りに來るのに、銅鑼をボーン／＼と叩いてくる。銅鑼を打つてくるのは、我國なら小間物屋だ、所かわれば支那かはるである。飴は飴でも日本の様に顔の出てゐる様な、オッタサン飴は無かつた。（下）

屑屋

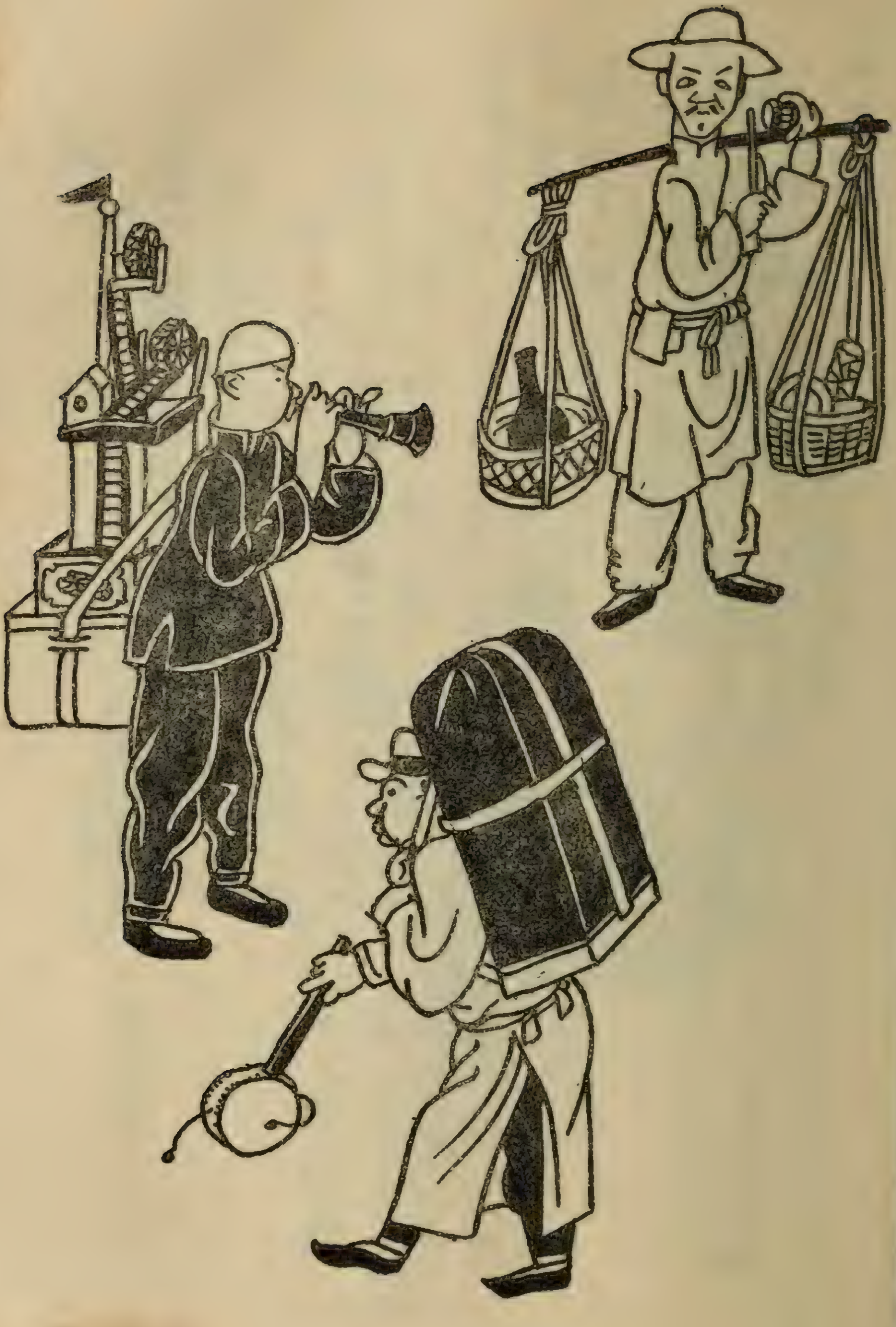
屑イお拂ひ　屑屋でムい、と日本なら言ふところを、小さい手の中へ入る樣な太鼓をカチカチカチと叩きながら、口では何にも言はずに來る。かついでる籠の片方には、蒲團が敷いてあつて、こわれてはいけない物を入れる樣にしてゐる。(右上)

當テ物や

要耗子といふ、鼠を使つて賭事をさせる商賣人がある。支那人は賭博が好きだ、子供の時分から金を賭ける事をやつてゐるので、こうした商賣が成り立つと見える。チヤルメラをピーシヤラシヤラと吹いて客寄せだ、下の臺の中から鼠が出てきて、ボールの家の中から札をくわえてくる、その札で丁半を決める。(左)

背負布や

日本なら呉服屋といふ所。主として布地ものを賣る。太鼓の兩側に紐をつけ、この先に木の玉をつけ、振るとそれが太鼓に當つて音を出す、テレンテンテンと調子をつけ、音樂的に高低調を出す。日本のデンデン太鼓の大きいのと思へば、間違ひない。(右下)



賣卜者

これも算命だ、手首に太鼓の紐をかけ、その手で長柄の撥を持つて、片手だけで、ドードーンと鳴らしてくる片手の方は杖を突いてゐる。(上)

藥うり

日本の馬鈴に似てゐる眞鍮製の丸い輪に成つたもので、菓子のドーナッツの形を想ひ出してくれゝば一番いゝ。中は空に成つてゐて、玉が入つてゐる。これを第二指と第三指の中に差し込んで、カラーン、カラーンと振つてくる。音だけでは判らないといけないので、膏藥の模樣をつけた旗をかついでゐる。この樂器は四川雲南の方へ行くとお經を讀む時、坊さんが使つてるといふ。(左)

糸針うり

振り太鼓と同じ仕掛けで、太鼓の代りに丸輪の中央にに鐘がついてゐる、昔あつたマイクロホンみたいである。カーンカラーンと、手で調子をつけて音を出す。糸と針の外に欄杆と言ふ袖口につける布を賣つてゐる。(下)

背負ひ小布や

大きな太鼓が小さなのに代つたゞけの違ひだ。その代り音も違つて、テンカラン〱とかん高い調子が出る。この小さい太鼓は揺稜鼓と言ふて、宋時代から有るものだといふ。これもデンデン太鼓式に作られてゐる。(右)

氷砂糖賣

小さい二寸七分直徑の銅鑼を、ガン〱と右手に木片を持つて、叩き鳴らして來るのは冰糖うりである。日本の樣に砂糖を何にでも使ふ國から見れば、支那や蒙古方面はまるで使はないと云つた方がよいかもしれない。そんな事で、糖分のものは支那人は貴重がる。それだけに糖分を要求する事も人一倍だ。求めると、ポケットから、藁半紙の樣な安紙を切つたのを出して、包んでくれる。(左)

油うり

大蔴子、落花生、棉花子から取れる油を賣る人達は、大鈴鐺といふ、五重塔や寺の軒先に下つてゐる、風鈴に似た形の鐵で出來た鈴を、リーン〱と鳴らして來る。(下)

支那芝居を見る心得

これだけ知つて置けば言葉は解らなくても、面白く支那芝居が樂しく見られる

音聞北京芝居譚

支那人は芝居狂

「北京では、チヤン〳〵芝居をやつてゐるといひますが、本當ですか」

「本當ですヨ、それも盛んでネ、一週間の中、五日間、ラヂオ放送があるんですから、御想像がつくでせう。ラヂオといへば、向ふでは播電と書きまして、ラヂオと書いても通じませんヨ」

「それは無電な事ですな、所變れば支那かはると言ひますが本當ですネ、それにしても一週間に五日とは、支那の國民は餘程芝居が好きなんですネ」

「先天的に好きらしく、切つても切れぬものらしいですネ。北京郊外の萬壽山にも、故宮博物館になつてる宮殿の中にも、ちやんと芝居の舞臺が出來てゐて、清朝以前から皇室と芝居との緣が結ばれてゐた位だから、上の好むところ下之に倣ふ、といふわけで、民間で

（芝居の番附）

も一寸した大きな家には、舞臺がある位ですョ。熱河の承徳離宮にある、乾隆皇帝が見物した舞臺といふのが、一番あの邊では古いさうだが、三階建で一度に一階、二階、三階と芝居をやつたといふのだから驚いてしまふ。北支の方では、清朝末に西太后が離宮として作つた、有名な萬壽山の中に、これと同じものがあつて、これも三階作りで、二階で芝居をやつてる役者が、ロープづたひに二階の板間から、下の舞臺へ出て來られる仕掛がしてあつたり宙乘りの時にでも使つたんだらうと思

ふ鍵が下つて居たり、仕掛ものが澤山あつて、一階の舞臺の奥には高二重があり、こゝでも芝居をやつたといふ事だ、この時分に西太后が見た芝居のプログラムといつたものが、國劇學會といふ北京の芝居研究者の集まりがある。その中の傅さんと云ふ人が持つてゐて見せて貰ひましたョ。肉筆で書いた筋書で、簡單なものだが珍しいものださうな」

「肉筆ぢや一冊しか無いからですネ」

「その中でも面白いのは、御飯をたべながら、芝居を見るので、本の型では汚すといふので、小さなお經本みたいに、黄色い紙を折つて、それへ書いてあるのがあつたが、これは更に珍本ださうだ」

「黄色い紙といふのは、何か芝居に關係があるんですか」

「黄色い紙といふのは、皇室にのみ許された色で、當時民間では使用出來なかつたもので支那の宮殿の屋根瓦の黄色いのも、それが爲、芝居でも皇帝が出てくる時には、道具等が黄色づくめだ」

「成程、すると清朝が潰れて、中華民國が生れた今日でも、やつぱし宮中では芝居をやつ

たんでせうか」
「中華民國が誕生した時には、皇室が潰れたんだから宮中との縁は立ち切れになつてしまつたのサ。しかし支那人の芝居好きには變りは無くつて、北京政府が十七年も居た間は、何にしても支那の首都は北京なりで、その繁昌振りは大したものだつたといふ事だ」
「ぢや國民黨が政權を握つて、首都を南京に移した時はどうでした」
「聞くところによると、北京改め北平になつて、政治的には古都になり、中央政府といふ大きな消費階級を失つたので、さびれたらうと思ふと、これが何とまア、一向に衰へを見せなかつたといふんだから、今日の北京で芝居が盛んなのも、不思議が無いと思ふね」
「すると北京に居る支那人は、芝居氣狂ひと見てもよいわけですね」
「まア、ファンを通りとして、マニヤといふた方が早いかも知れない、今度の事變で、北京は鐵砲玉や大砲玉の、洗禮を受けなかつたからといつても、蘆溝橋事變があつてから、四ケ月たつた十月には、もうポツポツ劇場が開かれて、十一月の末には、夜の芝居も平常通りになつたといふ事だから、北京に居る芝居好きの連中と云ふのは、時勢の動きによつ

て變ると云ふ階級ではないらしい」
「抗日排日の空氣と、芝居とはどうです」
「その點演劇愛好者には少ないらしいと云ふ事だ、ひどい排日家は、とうの昔に逃げてしまつてゐて、梅蘭芳のよき脚本家であり、指導家である、支那唯一の劇通家であつて、本を澤山出版してゐる、齋如山といふ先生なんか、ずつと藍衣社の親分だつたので、日本軍北京入りといふ前日、親しい友人達に電話で、今晩御馳走するから來てくれと、料理屋へ呼んで置いて、自分は席に出ないで、ドロンをきめこんで、南の方へ行つてしまつた。親しい友人に見つかると、逃げ出しに五月蠅いから、一堂に集めて置いたなんて、仲々脚本を書くだけあつてうまいものだ」
「筋書通りと云ふわけですネ」
「この齋如山といふ人が居ない爲に、一北京の芝居でなく、支那全土の芝居に對しての、啓蒙者が居なくなつたので、その道の人達は大分がつかりしてゐるといふ事だ」
「後繼者はあるのでせう」

「その人達が作つた國劇學會のメンバーが殘つてゐて、ポツ〳〵やつてゐて、その一歩として梅蘭芳の藏品を第一にして出來てゐた、國劇陳列館といふ東京早稻田の演劇博物館といつたのが、事變前あつたが、その陳列場が、例の韓復榘の住宅であつた爲、一時閉鎖されてゐたが、今度放送局の一部を貰つて、陳列を初めた。もつと早く開場しなければ成らないものだが、戰爭關係で色々やゝこしい事があつて、延び延びになつたといふ譯だ。芝居の好きな支那人にとつては慶福すべき事だ」

「時局の不安に遠慮はなしですネ」

「不安なんか、全然見當らないネ、第一に見物人が芝居ファンなんだからネ」

「梅蘭芳はまだ生きてますか」

「生きてゐて、この頃は香港あたりに居るさうだ」

「どうして北京に居ないのです」

「そいつは僕には判らない、人の噂に聞くと、女の關係で、北京に居られなくなつたとかいふ事だ」

「やつぱし、どこの國でも俳優と女とは、縁があるものですネ」
「僕も初めは、さう思つたんだが、支那の俳優は、梅蘭芳とその一、二を除いては、非常にその點は固くて、女關係は皆無といつて良いさうだ」
「さうですか」
「何にしろ支那の男といふ者は、自分で第二、第三、第四なんて夫人を澤山置いてある癖に、妻君の浮氣する事は嚴禁して居る位で、大の燒餅屋だといふ事だ。支那婦人の纏足といふ風が殘つてゐるのは、それが爲の一ッでも有ると、いはれてゐる位だ」
「花柳界の女だつたら、かまはないでせうネ」
「どうも困つたネ、僕アその當事者ぢやないのだから、返答にこまるネ。何にしても、現在の支那俳優諸君は、非常にその點は固くて、さういふ事があると人氣にもさわるし、藝ことに咽喉にさわるので、愼んでゐるといふ事だ」
「へー咽喉にさはるんですか、どういふわけで」
「支那の芝居と云ふものは、日本のと違つて、人に歌を唄はせておいて、踊つたりするん

で無くて、役者自身、歌を唱つて芝居をするんだから、相當なものだ。死んだ勘彌が北京で日本歌舞伎をやつた時、見物の連中は、あの役者は歌は唱へないから、大した役者ぢやないのだらう、と言つたとかいふ事だ、だから御難の安來節の一行が、北京で興行した時には、踊ッ子が皆、鰡ぢやく\アラエッサッサ……と歌を唱つて踊つたので、大入滿員でプレミヤム附で入場券が賣れて、御難の連中が、したゝま儲けて歸つたといふ話だ」

「すると支那の芝居は歌劇といふところですネ」

「さうだヨ、唱ふといふ事は支那劇の、科白と共に重要な要素なつてゐるのだから」

孤軍奮闘の崑曲劇

「支那劇は歌劇だと言ひましたが、それぢやその歌に附きものの曲風とか、いふものは勿論あるんでせうネ」

「それは有るサ、と言つても、僕は專門でないので受けうりだが、二黃、西皮、反二黃反西皮、秦腔、梆子腔、高腔の七調で、二黃、西皮、反二黃、反西皮と云ふのは、胡弓を樂

器とする四つの曲目から出來てゐて、大體現在の支那劇を音樂の方面から形造つてゐるんだといふ事だ」

「今度は勿論それを見たんでせうね」

「見たよ、現在北京でやつてゐるのは、京劇といつて、今いつた二黄、これは音がやゝ低くて、旋律が緩やかなものだ、それに音が高くて旋律が早い西皮とを組合せたのを主としてゐる。だから京劇の事を西皮と、二黄との一字づゝ取つて、皮黄劇と云つてゐる、この西皮、二黄といふのが、各々十幾種の曲目に分れて居て、それ〳〵歌の節廻しが違つてゐて、恰度日本の三味線が長唄、常盤津、端唄、清元と相手によつて調子をかへて行くのと同じ様に、胡弓が歌手の伴奏をやるんだ」

「すると支那芝居は胡弓が幅をきかせてゐるんですネ」

「京劇といふのはネ」

「では、京劇といふのでは無いのは違ふのですか、京劇でなければ新派だが」

「洒落なさんな、京劇の二黄、西皮以外の曲目には、崑曲といふのがあつてこれは横笛だ

（崑曲の囃子）

秦腔といふのは腕琴、梆子腔は拍子木、高腔が銅鑼と云ふ事になつてゐる」

「段々やかましく成つてきますね、今言つたのも見たり聞いたりしましたか」

「北京ぢや今いつたのは、段々すたれて來たが、滿洲の承德で梆子腔を見たよ、崑曲だけは、上流の家庭では婦女子が歌ふので、北京に崑曲の芝居は殘つてゐて、日本にも來た事がある韓世昌といふのが、白雲生といふ相手役と、がん張つてやつてる。孤軍奮鬪といふ形で、見てゐても氣の毒な程の入りであるが、見物人は質が良くて、日本でお能を見にゆく連中が、お能は二の次にして、謠本と首引きで、唸つてゐるのがあると同じ様に、崑曲の譜本を持つお孃さんや親父さんや、相當な家庭といふ事が、一見で判る樣な妻君達が、芝居よりも韓世昌の歌を聞きに來てゐる。芝居は見ないわけぢやないのだが。役者でも支那劇をやるには崑曲を、一通りやらなくては本格と言へないさうだ。滿洲國の中國銀行の理事をやつてる、榮厚先生に會つた時も、機會があつたら崑曲を見なさいと言はれたが、都合よく北京では珍しい位に、この崑曲が上演されてゐたので、三回見てしまつた。普通の支那劇では銅鑼、太鼓、日本ではデヤランボンといつてる鐃、拍板といふ木を合せて音

を出すもの、單皮鼓といふて固い皮の太鼓に、胡弓三絃、月琴、笛、チャルメラ式の喇叭でドンチャン〳〵囃すが、崑曲は、笙に横笛、それに太鼓、小銅鑼、柏板、單皮鼓といふ様な樂器で、非常におとなしく囃すので、日本人にはピタリと來て、支那劇は五月蠅いものだと思つてゐた連中は、驚いてしまつてゐたョ。劇場の人に聞くと、歌の文句なんぞも、外のより大へん文句が上品ださうだ。崑曲劇を見たのは大いに參考になつた」

「成程さうですかな、ところで北京では、芝居小屋はどの位あるんです」

「前門外と云つて、東京の銀座と淺草と、新宿を合せたと云ふ様な賑やかな所に、中和、慶樂、第一舞臺、開明といふ戲院がある。日本で何々座といふ様に、あつちでは〇〇戲院とか〇〇大戲院と云ふてる。西單牌樓には、新々、長安といふのがあつて、東安市場には吉祥がある。この他西單牌牌の薪商場といふところには儒林茶樓。鮮魚口内といふ所には、華樂戲院。地安門に暢叙園。天橋に女優劇專門の魁華舞臺といふのがある、戲院といふのは新らしい立派な劇場が多く。茶園、舞臺、樓と云ふのは舊式な劇場に多い名前だ。

観劇料とチップ

「ところで入場料はどの位ですか」

「それは役者によつて違ふが、前排といつて、日本の小屋でいふと、正面の座席の一等席八列ぐらゐ迄に當るところが、最高一元二角だ」

「それは幾らの事です」

「元は圓で、角は十で一圓二十錢だ。最低は三角、三十錢だね。との頃は八十錢から五十錢位だ。一等席の後を後排と云つて、前排が八十錢なら後排は五十錢、五十錢なら卅錢位だ、二階の前後排を俗に池子と云つてゐる。二階の横の兩側及び後方を、廊子と云つて二三十錢位で見せて居る。二階には包廂散座といふのがある、包廂は五人位入れるボックスで、最高八圓位から、最低二圓、普通は四、五圓と見れば間違ひない。散座は二階の、觀覽席の後の方の一人座席で、あまりいゝ場所でないので、ずんと安くなつてゐる」

「矢張り前賣りといふのがありますか」

「有るヨ、當日賣りの切符賣場も勿論あるが、我々日本人から見ると不思議に思ふのは、支那人は切符賣場があらうとそんな事は知らん面して、ずん〳〵入つて行つて、空いてる自分の好みの席へ坐つて、見物する事だ。もつとも、さういふ客には切符賣り、向ふではマイピヤヲダ（賣票的）と云ふのがついて行つて、席が空いてれば、すぐ其場で切符を賣つてゐる。自分のふところ工合と、席との相談で見物するなんて洒落てゐる」

「中錢みたいなものは、有りますか」

「あるネ、坐ると茶を持つて來る。この茶代が要る、小屋によつて蒲團を敷いてあるのがある。すると蒲團代を取られる。この前上海へ行つたとき見た、芝居小屋では熱い蒸タオルを出したが、北京では何處も出さなかつた、この外に、出方への少費と書くチツプが要る、これは大てい十錢位で澤山だ」

「お茶を呑まない時は、どうするんです」

「呑みたくなければ、呑まなくてもいゝ。前の腰掛の後に、ちやんと茶をのせる爲の臺があるから、其處へ持つて來た時、こつちがだまつてゐれば、呑む事を承認したのだから、

呑む呑まぬにかゝはらず拂はせられる。何でも、この茶を賣る習慣は「品茗聽曲」と稱して、風流韻華の樣に考へてゐるのださうだ」

「へエ」

「チップの事で甘く見られた面白い話があるよ。大てい茶代を取りに來るのが、夜の芝居だと十一時頃、そのとき十錢やつたのサ。すると一時間もたつた頃、そのボーイが來てネ『さつき貰つた十錢は邪だから取かへてくれ』と言ふのサ、邪とは正邪の邪で正しくないので僞金の事だ。しやくにさわつて『ベラ棒め、すぐなら、俺が出した十錢だから、いや應はねエが、一時間もたつてから持つて來て邪も安珍もあるものか、どこに俺が持つてたと云ふ印が付いてるんでエ』と江戸前のベランメー啖呵を切りたいが、生憎なことに、そういふ支那語の會話は、まだ敎はつてゐないし、舞臺は今や芝居のクライマックス、そんなものに取あつてゐられないので、泣寢入りで、邪でない十錢と取りかへられたが、言葉が通じないと、かうした失敗がある」

「さういふ啖呵が切れゝば、一人前でせう」

「さうだね、つく〴〵支那へ行くには、少くとも會話が樂々出來る樣にして行くと、見物しても面白味が增すことだね。そこへ行くと北京あたりに住んでる日本人、殊に婦人ときたら、支那語を覺え樣ともしない、支那人の方が日本語をやるから用がたりますヨなんて言つてゐる。だから車に乘つた婦人が『チヨイト違ふんだヨ、あつちヨ〳〵』と車夫と問答してゐる。日本の俗語は、支那人にはそうすぐ判るわけがない。それでも指さした形でどうやら用がたりるので、殊更支那語を覺え樣ともしない。これから發展しようとする日本人は、是非支那語を覺える事だ。支那の商店でも會社でも行つてゐると、支那人のボーイを始め、勤めてゐる人が日本語早わかりとか練習とか云ふ本を讀んで勉强してるには感心させられた」

「支那語が判れば芝居が面白く見られた事でせうネ」

「日本の歌舞伎劇でも、相當難解の臺詞で、判らぬ事がある位だ、支那芝居はそれに輪をかけて居る位だから、さう判らないのは當り前だと思ふネ。歌なぞ滿足に判る日本人は今でも少いといふ事だ。昆曲の芝居では、漢文の臺本を賣つてゐるから、一字々々ひろつ

てれば、どんな意味の事を言つてるか大略判るから、その點大いに助かつた」

支那劇の約束

「さつき夜と晝間の芝居があつて、夜の方が高いと言つてましたが、どうしたわけです」

「それは夜の方が見物人が、仕事をすましてから來るので率も多いし、それに役者も身を入れるから、どうしても高くなるのだ。映畫だつて同じものをやつても、夜の方が高いといふんだから、恐るべきだ」

「舞臺の作りなんテ、內地と同じですか」

「新しいところは、ひまの時映畫をやる關係もあり、內地に似てゐるが、舞臺が觀客席へ突出した半圓形になつてゐる。本格のは長方形の舞臺が見物席へ突出してゐて、横幅は十七八尺から二十尺位ある、一段と高くなつてゐるのは何處も同じだ。大きな柱が兩角に立つてゐて、舞臺の周圍に手すりが出來てゐる。新しい小屋は照明などを並べて、手すりといふものは無くなつてゐる。舞臺のうしろ横、左右に疊八枚から六枚位の小舞臺がある。

これは囃子方が、入つて居るところだ。だがこうした古い形の小屋は、二三しか現在は無い」

「芝居には舞臺裝置をしないといひますが、さうですか」

「そのとほり、中には新しいのは舞臺裝置を使つてゐるが、平凡なので、面白味がないネ支那劇はお能の様に何もなくつて、觀客自身が、頭でその劇に當はまる背景を考へるところで、いゝのぢやないかと思ふ。金小山の一行の呉李秋といふ女優は、照明を使つてクライマックスを演じてゐたが、これは梅蘭芳の眞似だといふ事だが、使ひ方がまづいのか成つてない、むしろ無い方がましだ」

「芝居は能の様に、象徴的だといふ見本を聞かせて下さい」

「まづ、どの芝居にもよく出てくるのは馬だ。日本なら馬の脚が二人で、本馬になつて出てくるところを、あつちでは色々な、房のついた鞭一本ですませる。大てい末といふ端役の馬丁が、その鞭を下げて出てくる。それを主役が受け取つて、自分の兩足を交互に蹴つて馬に乘る動作をして、馬に乘つた姿勢になつて、鞭を横に持てば、役者はもう馬上の者

になつてゐる。戰爭なぞに出る所では、鞭をブン〳〵振りつゝ舞臺をグル〳〵廻つてゐる有樣を象徴した事になるのだ。その技術たるや上手いものだ」
何回も廻る事は道のりを示すものだ。その場合、鞭を渡した馬丁が、一緒にグルグル廻つて、宙返りしたりすると、これは主人の乘つてゐる馬が非常な荒馬で、四方八方に荒れ廻つてる有樣を象徴した事になるのだ。その技術たるや上手いものだ」
「相手が馬だからですか、それから」
「机の上に椅子を載せて、そこへ登れば、高い所へ登つた形、時には椅子がない事がある、例へば和尚が椅子の上に乘つて、物を叩く樣な仕草をすれば、まづ鐘を叩くか、半鐘を鳴らす形で、鐘堂に登つた事になる。テーブルは、この外、城壁にもなる。黄いろい布の旗に車の輪が描いてあるのを持つてくれば車だ。それを主役の女なぞが、旗の頭の方を自分の兩手に握る。この時は旗は二本ある。後に端役が竿の方を握つて、舞臺を歩いたりすると、この女は車に乘つてゐる事になつてゐる」
「大きな品物は、すべて出さないわけですネ」
「そういふ事だ。波に綺が描いて、魚が泳いでる旗を持つてくれば、海上の場合か、水中

の場面だ」

「相當、客の方が頭を使ふわけですネ」

「みんな約束だから、少し見てれば、すぐ判るョ、家へ入る時は右足をあげる動作をする家の門を開ける時だつて、手で門のかんぬきを拔き取る形をして、手前へ八の字に擴げれば、門を開けた事になる。この動作をしないで臺詞や歌を唱ふ時は、すべて門の外での事だ。中の人との對話は、門の内外で話す事になつてゐる。能狂言を見ると、これと同じのがある。關東の茶番、關西の仁〇加にもこれと似た事をする」

小道具のいろ〳〵

「能狂言と似てると言ひましたが、舞臺は橋掛りが無い形ですネ」

「さうだョ、動作は能であり、歌ふところはオペラだ」

「さつきの小道具の話を、もう少し聞して下さい」

「一枚の木板に紙を貼つて、その上に線を引いて、文字を書いたのがあるが、これは何だ

と思ふかネ」
「解りませんヨ、何ですか」
「これは石碑なんだヨ、二本の竹竿に、模様のついた布を垂らすと、これが臥床。二本の短かい旗を、低く横にすると、轎といふ駕になるのだ。いま臥床になつたといふ二本の竿を其儘にして、兩方に開いて、前にテーブルを置くと、これが役所に成るんだから、手品以上と言ひたい」
「山なんか、何で表はしますか」
「山は二折か、四折の屛風を持ち出して來るヨ、その屛風に山の繪が描いてある。山の中へ這入つてしまつたと云ふ筋に成ると、それ

山を示す小道具

荀慧生の白娘子

をすぐ片づけて仕舞ふ。片づけてしまふものに、城門がある。一間位の高さに城の門を描いた布の四ケ所ぐらゐに竹竿をつけて、小道具係が持つて舞臺へ出す。中央に門があつてこれは開閉できる様に成つてゐて、出入りの時は、小道具係が開ける、これも竹竿がついてゐる。役者がこの城門の布の後上から首を出して、何か言ふと、この役者は城門の上に乘つてるといふ事に成つてゐる」

「いよ〳〵能ですネ」

「よく支那芝居で三角の旗を、背中につけて出てくるのがあるだらう」

「ア、寫眞で見ましたヨ、あれにも何かあるのですか」

白娘子に出てくる蛇身

「あの三角の旗が、單なる飾りかと思ふと何とそれは大違ひ、あの旗一本が一千人の家來の印なんだ四本あれば四千人の家來を持つてゐるといふ印になるのだ。だから

背中の三角旗は武人の役に決まつてゐる。四千人と云つたが、三國史の張飛みたいな偉い人物になると、忽ち一千人が一萬人に變つてしまふ。すべてこれは見物人の方が、判斷をしなくては成らない」

「見物人も樂で成いですネ」

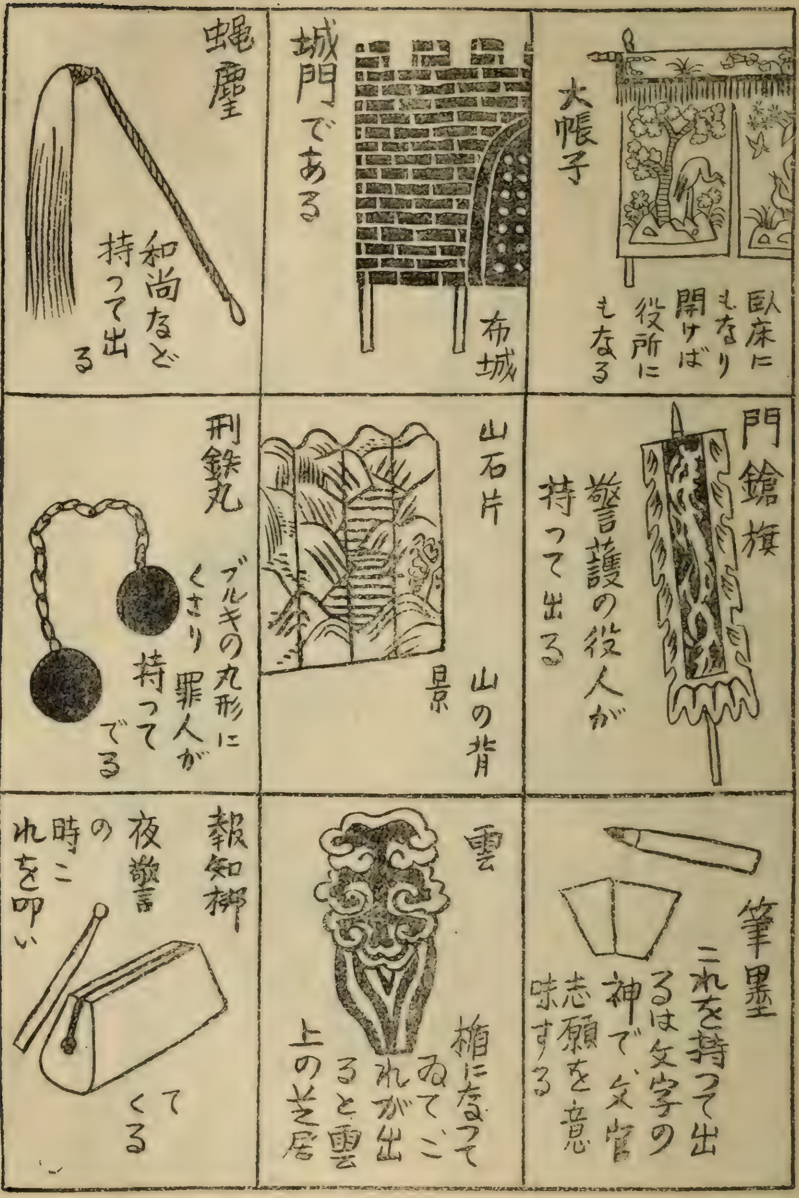
「すべて判斷力が無くては、支那芝居は解し得ないネ。雪の場面には、雪の模様のある旗を持つて出てくる。風の吹いてる場面は、雲の様なのが飛んでゐる旗を持ち出す。命令を出す場面なら、令・御注進は報の字を書いた旗を持つて出てくる。これはいづれも端役がやるのだ。僕にどうしても判らなかつたものに、椅子を横に倒して、その後から役者が首を出してゐたのがあつたが、なんとこれが牢屋なんだ」

「へー成程、それは判らないですネ」

「それから舞臺をチョコ〳〵腰を下して歩くのがある。これは二階へ上る表現だ。下りる時は前と反對の向きで、チョコ〳〵歩きをする。俳優の紛裝などでその役の見判けをつけるのは日本と同じだが、頭から白い一寸幅ぐらひの白布を下げて、出てくるのがある。と

傘
黄色ハ皇帝
赤色ハ文武官
帥
師旗
總大将の印
令
令旗
フチ赤色
命令の場面
水旗
水上、水中の芝居を意味する
風旗
風の強い場面には振ってくる
車旗
これで車の代用
馬鞭
これ一本で馬が出た事になる
印兩
黄色の包、高貴又ハ文官の印入れ
銀
金銭で張子製銀貼金貼あり

提灯
これを持ち出すと夜の場面
ミドリ
アカ
陰旗
あの世の印陰風で鬼とか幽霊の出に使ふ
櫂
これを持つて漕ぐと舟が出たわけ
聖旨
皇帝の命であると言ふ時これを持ち出す
令箭
戦の折上官が誰々を討てといふ時与へる矢
大將旗
張
四本八本又ハ十六本出る
桌
テーブル正装したところ
椅
正装した椅子
凳
大勢腰かける時に用ゆる


大帳子
臥床にもなり開けば役所にもなる
城門である
布城
蝿麈
和尚など持って出る
門鎗旗
警護の役人が持って出る
山石片
山の背景
刑鉄丸
ブルキの丸形にくさり
罪人が持ってでる
筆墨
これを持って出るは文字の神で、文官志願を意味する
雲
楯になつてゐてこれが出ると雲上の芝居
報知梆
夜警の時これを叩いてくる

れは死んだ人の靈で、足の生へてる幽靈だ。死ぬ場合は、赤い小布を顔にかけて樂屋へ入つてしまふと、これで死んだ事になる。日本の舊劇の赤毛布と同じだ。死靈が生きてる人間と話をする時は、黑い薄布をかぶつて出てくる。これら幽靈や怪物が出てくる時は、火彩と云つて舞臺の上で、その掛りの者が、松脂を粉にしたものに鋸屑の一種を混ぜた花火を、パツパツと投げ掛けて燦爛とした舞臺面が見られる。これは劇戰や、火を付けて家を燒き拂ふ場合にも使はれてゐる」

「煙草が隨分あがるでせうネ」

「もう〳〵と立上つて物凄い時があつた。これが美事に行くと、見物人は拍手喝采だ。まづいと途中で消えて、鋸屑のまゝ舞臺の上に散ると、見物人より役者がブーブー云つてゐる。むづかしい物らしい。こんどは船の場合を話さう。舟は櫂一本でいゝのだ、これで舟が出た事に成る。櫂を斜にして舟を漕ぐ形をすると、もう舟は水上に浮んでるのだ。もし船上の人が對話の時は中央に椅子テーブルが出て、テーブルの左右に居る。船頭はそのどつちかに居ればいゝのだ。舟に乘つてる人と、船から離れた所に居る人と、對話してる時

は、舟は必ず岸邊に著いてる事になつてゐる」

「夜の場面は、何で表現しますか」

「簡單さ、提灯を持つて出てくるんだ、照明が無いから舞臺は明るいまゝだから、提灯の中は何にも燈は入つてない」

劇の種類

「芝居の種類は、どんな工合に成つてますか」

「何と云つても舊劇で、舊戲、老

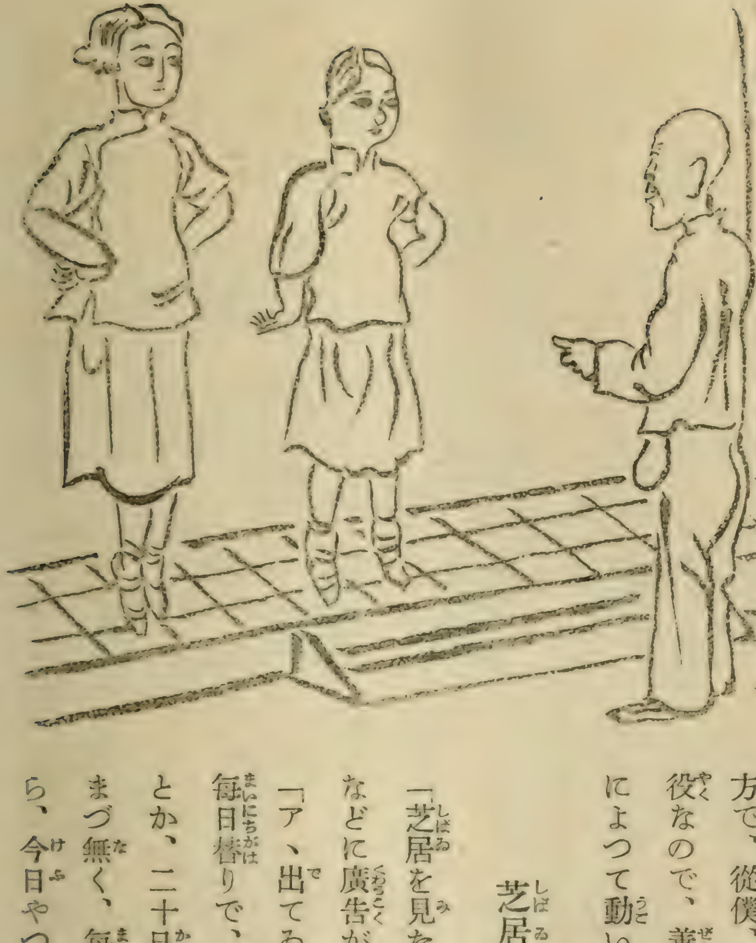
戯と言つてゐて、歴史的の舊作、清朝以前の事柄や、舊時代の世話物、我國でいふ歌舞伎もの荒事物で、一定の定まつた型で演ずるものが、支那劇の八九十パーセントを占めてゐる。この中でも歌を主とするものと、さうでないものがある。新劇といふのは舊式的新劇と、新式的新劇との區別があつて、舊式的と言ふのは新作だが、矢張り歴史的、舊歴史的社會的の物が多くて、その演る型も舊劇と同じもので、新式的と云ふのは全くの新式で、歌は殆んど抜きで、清朝の末代の事柄か、現代の事柄、重に風俗に關するもので、梅蘭芳の十八番の天女散花とか嫦娥奔月とかいふのは舊式的新劇に當る」

「では劇の性質といつた様なものは」

「立廻りや、荒事が無く歌とか臺詞とか、優しい所作が主になつてゐるのが文劇で、この中にも滑稽的なものと、さうでないものの二通りに分けられてゐる。チャンバラものが主になつてるものは武劇と言つてる。文武の兩面を兼ねた芝居を文武劇と、日本流に言へば種別できる。この文武劇といふのは、主人公が武士だが、普通の武劇の人物と違つて、立廻りなぞは少く、歌ふ部分が大部分あるのを言ふてゐる」

「役柄は矢張り、日本式に立役、敵役、二枚目、三枚目の樣になつてゐるのですか」

「支那では、役柄の事を、脚色と言つてる。日本では芝居の仕組を脚色といふが、それとは意味が違ふ。男形のことを男脚、女形を女脚と言ふてる。役柄を分けると、生、旦、淨、末、丑といふ五ツに成つてゐて、生と、淨と丑は男脚の方、旦は女脚、末は男女混合。一口にいふと、生は、主に立役、旦は女役、淨は敵役、丑は道化役、末は端役だ。生といふのは平和の人物で、善惡兩種あるが、比較的善人が多い。旦はやつぱし善惡兩種あつて其中で、正旦、老旦といふのが、善人が多く、花旦には淫婦型が多い。淨は暴惡型のものが多く、割合に惡人が多い。丑は善惡どつちもあるが、概して滑稽的で野人的の人物



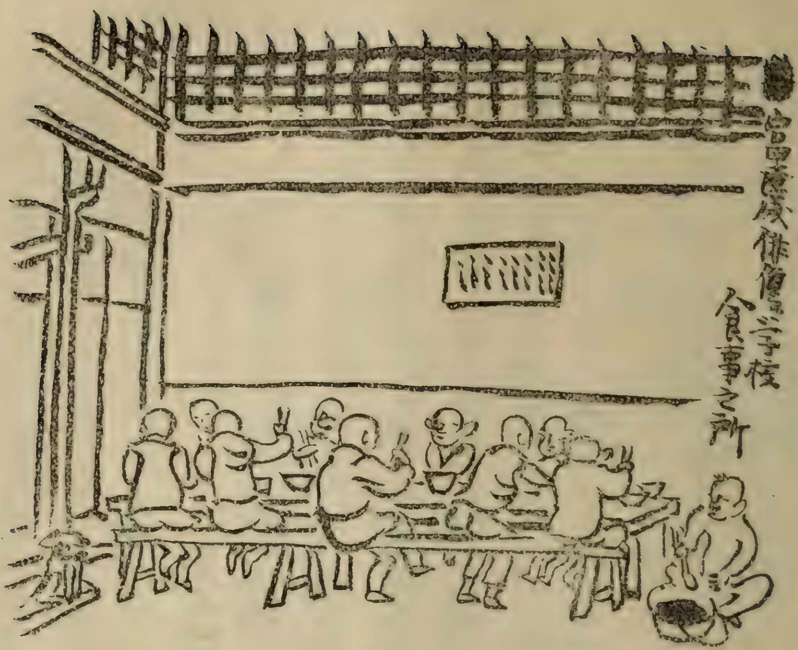
戯曲學校生徒に爪先立ちの練習させてる所

が多い。末は日本の馬の足といふ方で、從僕、馬夫、兵士、侍女の役なので、善惡兩所その芝居の筋によつて動いてる」

芝居を見にゆく迄

「芝居を見たい時は、矢張り新聞などに廣告が出てますか」

「ア、出てゐるヨ、支那の芝居は毎日替りで、日本の樣に一月うつとか、二十日興行といふ事はまづまづ無く、毎日〳〵狂言が違ふから、今日やつてるのは今日見なけ



れば駄目だ『今天』とか『明天』とか書いてあるその中にも、晝間やるのと夜やるのと分けられてゐる。芝居の數は單出戲といふ一幕もの。接子戲といふ二幕もの四幕もの、六幕もの。それから連臺戲といふ、數日間續けてやる三國志の様な大物を適宜組合せて、四番か六番やつてゐるのが普通だ。俳優學校の生徒のやつてる芝居小屋は、どうかすると八番ぐらひやつてるといふ事だ」

「俳優學校といふのがあるんですか」

「大有りで、日本の俳優學校が成り立た

たないのに、北京では三十年以上の歴史のある富連成社戯曲學校といふのがあつて、梅蘭芳その他名優を澤山だしてゐる。新しいところで、程硯秋のやつてる、中國高級戯曲學校があつて、大勢生徒が居るのには、參觀に行つて、びつくりしたネ。まるで小學校のやうだ。女の子も交じつて、チヤンチヤン奇術の樣な藝の練習をしてゐる。なんでも、無料で教授をして、毎日練習の爲に芝居小屋へ出演して勉强をする。その時とる入場料が全部學校の收入といふ事になるので、無料教授が出來るわけらしい」

「六代目菊五郎、顏色けですネ。一體あちらの芝居は、何時間位やつてゐるんですか」

「晝間やる「日戯」とか「早戯」と云ふのは午前十二時ごろから四時半ごろまで。夜戯とか「晩戯」といふ、夜の芝居は六時から十二時まで。これは新時間で、支那式の時間でいふと夜中の一時がハネだ。遲いので、歸りの車が無くなつて困つた事があつたヨ」

番附面の見方

「番付面に出てゐる、役者の格の見方を教へやらか」

荀慧生

何佩華　陳喜星　朱斌仙

慈永勝　孫福亮　王多壽　郭春山　耿永順

全部白娘子

これを例として言ふと、一番上の荀慧生が一番、二番が下の中央、陳喜星、三番が右の何佩華、四番が左の朱斌仙になる。五番は三段目の中央の王多壽、六番はその隣の孫福亮七番は郭春山、八番は一番右の慈永勝、九番が左端の耿永順といふ順序になる、一番下のは狂言題名で白娘子を全部通しでやるといふ事になつてゐる。日本のやうに右左、右左と、外側から數へてゆくのと反對なのが變つてゐる」

「支那にも、やつぱしさうした格式があるんですかネ。一體いまは、どんな役者が有名なのですか」

「まづ梅蘭芳、次に程硯秋、荀慧生、尙小雲、これを四大名旦といつてゐる。名旦とは名高い、女形といふ事だネ。崑曲の韓生昌は別格の名旦としてある。男の方では、馬連良あ

たりが賣れッ子になつてゐる」

「日本の様に音羽屋、播磨や、高島屋と云つた様に、掛聲がありますか」

「僕の見てたところでは無かつたネ、その代り聲をかけたいところは好好といふ掛聲だ。素敵だ、たまらない、うまいと云ふ意味が、みんなこの好好の中に含まれてゐるんだ、といふことだョ」

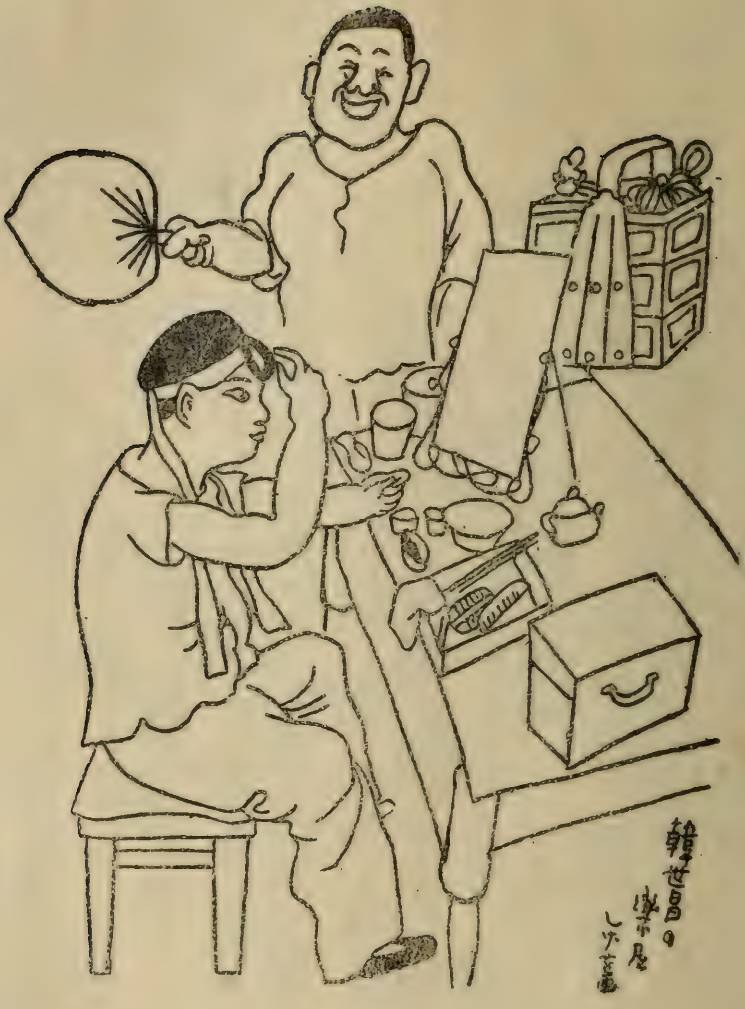
「簡にして、要を得てますナ。あなたの話も、大分好々です、おかげで支那芝居通らしくなつて、支那芝居が急に見たくなりました」

支那芝居雜話

北京で日支文化の爲に、貢献しておられる橋川時雄氏のお招きで、梅蘭芳に次ぐ、大御所程硯秋と崑曲の大御所韓世昌と、その外、北京の劇壇の御歴々と、一緒に食卓をかこんだ。一つの席に二人の俳優が顔を合すといふ事は、めつたに無い事で、きつとどちらかゞ缺席をするのが、普通となつてゐるものと決められてゐる。招待者が日本人なので、その點が融和的になつて、顔が合つたといふわけである。また支那の風習として俳優は一般人の渇仰の的になつてゐるが、宴席に出ると、昔の日本と同じく河原者あつかひで、下座の方へ坐るのが常識となつてゐる。支那の宴會はテーブルを圍むので、主人側の坐るところが下座になつてゐる。俳優は名優であつても、この主人の隣に坐らせられる。ところが橋川氏はこの例を破つて、現在の日本風に俳優を主として招いた時は、俳優を上座に据える方針をとつてゐるので、支那の俳優は非常に感激してゐるとの事だ。そしてそれだけに主

人側に近く席を與へられた劇評家なぞは、內心大不服ださうな。支那で一番低い地位は床屋と、湯屋の三助だといふが、役者もいかに秀才でも、この級であるものを、上座に坐らせられゝば、誰だつて惡い氣持はしない。食事に入つたが、程硯秋も韓世昌もあんまり甘いものや餘りにも鹹いものは、遠慮してゐる樣だ。しかし韓は酒を盛にやつてゐた。酒と煙草は、俳優にとつては、咽喉を最も大切にする點から、禁制のものとなつてゐる。その

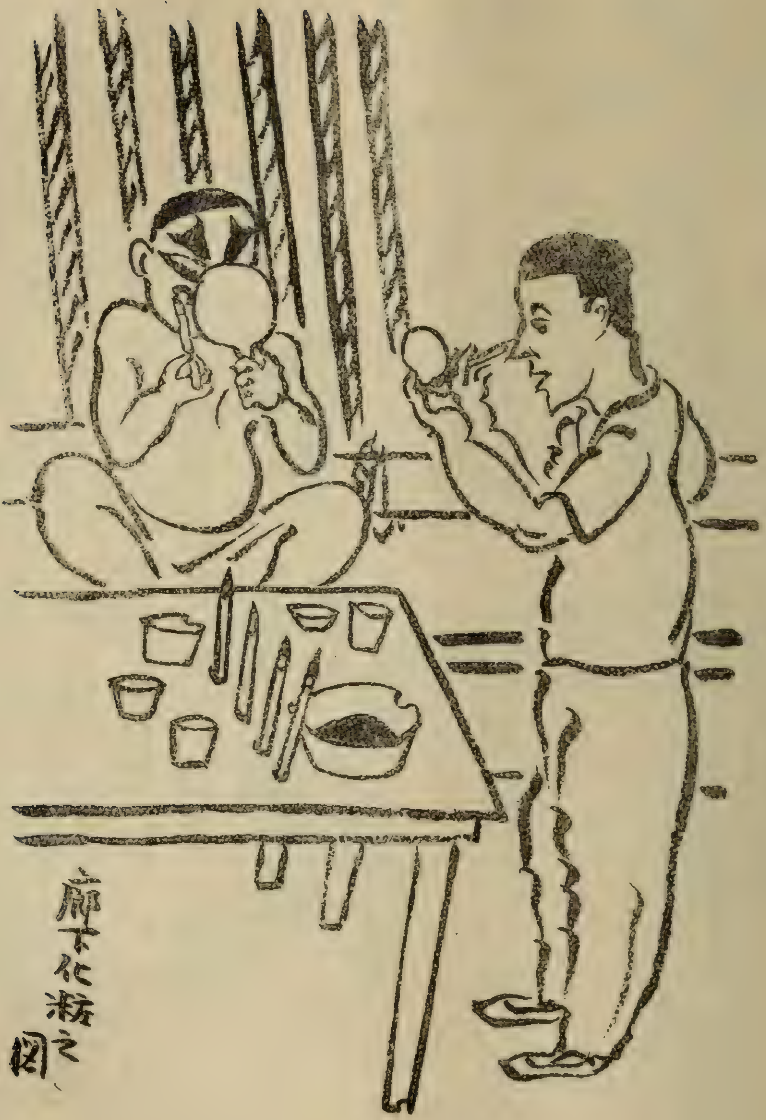
程硯秋　しげを畫


韓世昌の楽屋
しげを画

せいか韓は舞臺へ出ても、ビールが祟るので、鹽からい聲を出してゐる。この點、崑曲を愛好してゐる連中から惜しまれてゐる。韓側の人に言はせると、支那芝居の根本をなす崑曲を、一般人があまりにも顧みてくれないので、やけ酒であるのだ。と言つてゐる。

この會の翌日、韓世昌に用があつて、彼が掛つてゐる劇場の樂屋へ訪ねた。支那芝居の樂屋は、東京、大阪の歌舞伎座ほどには思つてなかつたが、行つてみて想像外だつた。淺草公園にある芝居小屋と、道頓堀にある萬歳小屋ぐらひの物で、韓と小生俳優の白雲生が部屋らしい一室に入つてゐるだけで、他の連中は廊下の隅ツ子に立ちながら、メーキアツプをしてゐる。四角のテーブルが通路の隅にあり、缺けた茶碗の中に溶いた繪具が三ツ四ツ、卓子に穴をあけて、繪筆がさし込んである。何のことは無い小屋掛の茶番の樂屋だ。

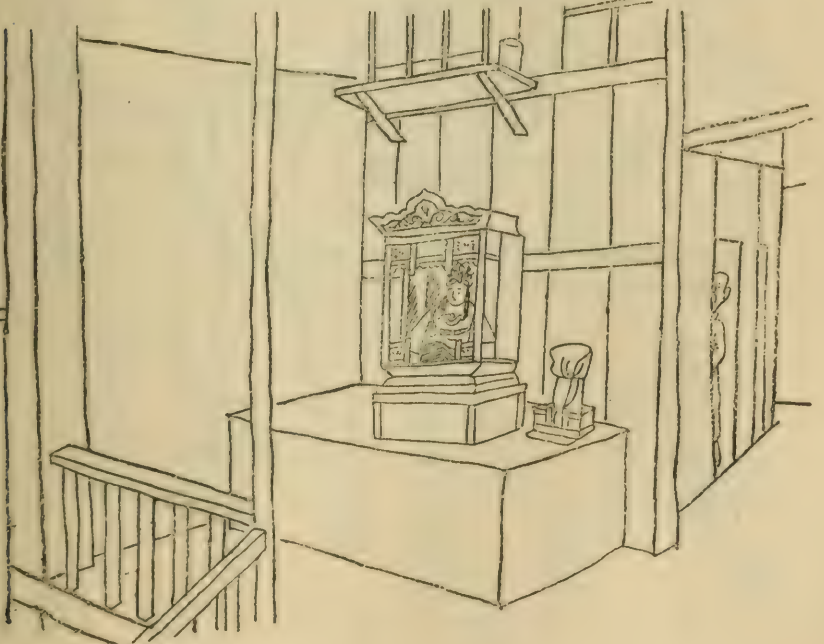
韓が入つてゐる樂屋といふても韓一人では無く、頭取役といつた人や、弟子達が一緒でゴタ／＼してゐる。その中で大テーブルの上に、置き鏡を置き、白粉と紅、女形なので、色んな變つた繪具はいらない。外にかもじや櫛なぞの入つた箱が置いてある位で、その質素加減はびつくりする位である。白雲生の部屋を覗いた。二枚目役なので、白粉を白く塗



廊下化粧之図

つて目のふちに少々赤く朱をさすだけなので、鏡の外に白粉と朱皿が一つテーブルにのつてるだけである。こうした簡單さは、狂言が毎日替りであり、小屋がちよい〳〵變る關係から、大きなものは持ち込めないからでもある。東京の歌舞伎座に專屬的に一室をもつてゐて、出勤しない時は、他の者に使用させないで居る俳優の話をしたら、びつくりしてゐた。

　廊下に芝居の神さまが祀つてある。日本なら稻荷さまだが、あちらのは玄宗皇帝か關羽だ、玄宗皇帝は芝居の愛好者であり、獎勵者であつたので、神さまとし



吉祥戲院 樂屋の
芝居の神樣

て祀つても可笑しくないが、關羽は武人だか變である。理由を訊ねたら、關羽は强いので隆盛といふ意味があり、芝居に限らず一般的に崇拜されてゐる神様となつてゐるそうだ。俳優は下ツパでも舞臺へ出る時は、きつと禮拜してから出る。

支那芝居は、一劇すんでも幕をしめない。見物席から見て左手の入口から出て、右手の入口から裏に入るのが常式とされてゐて、前の芝居が終つて、まだその役者が右手へ入るか入らないのに、もう左から、次の別狂言の役者が出てくる。のべつ幕なしといふ言葉はどうも支那芝居が本家らしい。樂屋へ入つた役者連中は、べちやくちやおしやべりをしない。もつとも、急がしいので出來ないのかもしれない。

私が樂屋へ訪づねる時、案內役の人に、夢の話は、迷信的に嫌つてゐるので、遠慮してくれと言はれた。役者連中は、夢といふ文字は、樂屋でも舞臺でも忌んでゐて、殊に話は禁物になつてゐる。迷信はどの社會でもあるが、この世界では槍の柄を取つて、トン〳〵と床板を突く事、樂屋裏で口笛を吹く事（これは吹と言ふ文字は、成熟しない意味があるからだといふ）傘を樂屋へ持つて入る事は勿論、小道具用の傘でも舞臺以外では擴げては

ならぬ、とされてる。これも文字の上から來てるもので、散と傘は同音で、一座が離散する不吉のいけない意味なので、傘といふ代りに「雨蓋」とか「開花」といふ言葉が用ひられてゐる。樂屋で、將棋や錢賭博はいけない。これは先に行けとか先に行くといふ言葉が、死を意味するからだといふ。膝を抱へる事もいやがる。普通の人達の家でも足を組んで膝ツとへ兩手を組んで、掛けるのを嫌つてゐる。一ツの箱が並んでゐる時は、けつして腰掛けてはいけないといふ、箱と箱との間は人間の咽喉と見なしてゐるので、のどを塞ぐ事は、一座繁昌にならないからだと、こうした禁止すべき事は澤山あるとの事だ。

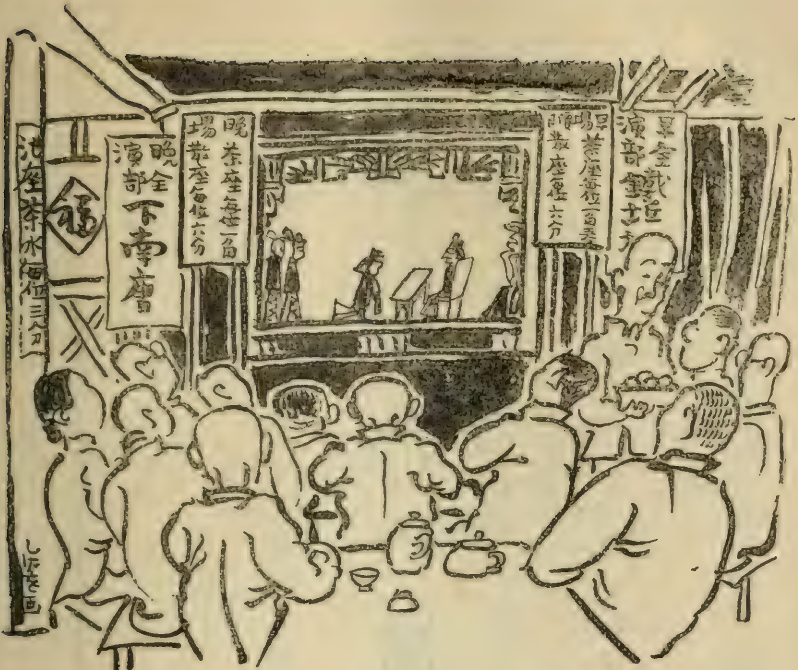
支那芝居でも、日本の文樂人形にのみ殘つてゐる開演前の三番叟に當るものがある。その前に本格的なのは、舞臺に使ふ道具である。椅子、テーブル、旗、天蓋、槍、刀なぞを、ズラリと並べて見せる。これはせい／＼二十分ぐらひ飾つてあつて、片づけられると開舞戲といふ三番叟に當るものが出てくる。衣官束帶の北斗星、これは福の神といはれるのが、假面をかぶつて出てきて、舞臺中央に立つて、卷いた物を開いて見せる、それには「天官賜福」といふ文字が書いてある。テンテレンツテンカンテンといふ樣な囃子で、舞

支那土民の三番叟

臺裏へ、引つこむと、そろ〳〵その日の芝居が初まる。全部の芝居が終ると二人の子供役者が舞臺の前の方に並んで、腰をかゞめて、觀客を見送る禮をして、プープーと喇叭が鳴ると、散戲と云ふハネた事になる。

舞臺で我々に變つて見えるのは、役者が平氣で、自分のボーイから、茶を汲ませて袖で口を隱して飮む事だ。これは歌を唱つたり、立廻りをした後は、二度でも三度でもやるのだ。舞臺の横といつても、觀客席から見える所にボーイが立つてゐる。この男衆は暑いときは團扇で風を送つたりしてゐる。それから舞臺の上で、ペツ〳〵と痰をはく、これには一番前に席を取つた時などは參つてしまふ。奇麗な花形がやる時などは、幻滅を感じてしまふ。その痰をはいた舞臺を、戰爭物をやる時は、兩手をつけて逆立ちや、とんぼ返りをやる。手へつきやせんかと、ヒヤ〳〵する。

ちよいのぞき 支那の風俗



支那影戯

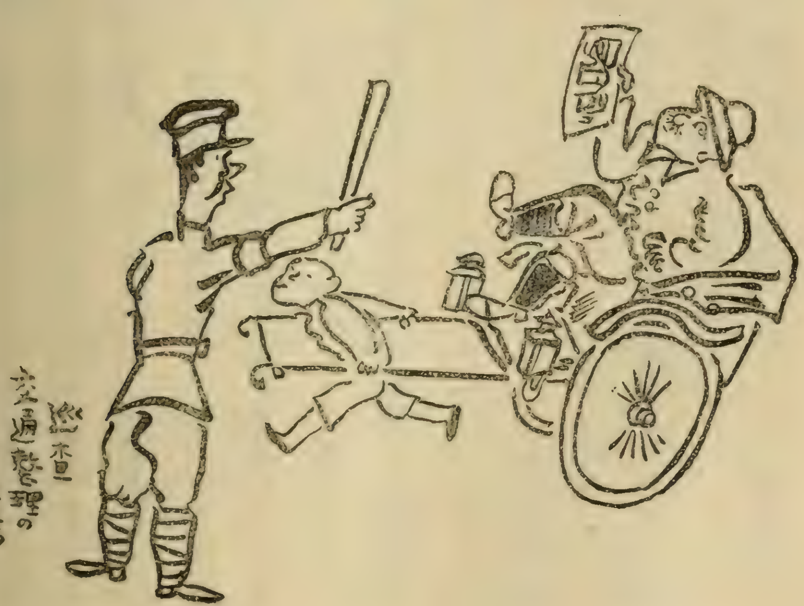
影戯といふのは影芝居の事で羊の皮を切り抜いて、人形や動物の形を作つて、色を塗つて、それを動く部分に棒をつけて、踊らして見せるもので、實演はこんどの旅では奉天と北京で見たが、本場は山海關から天津へ向つて行く、鐵道沿線の蘭州である。スクリンは大畫箋紙の裏打ちに枠につけて、少し斜に上を前かゞみにして、電氣を内部につけて、その光りによつて、映し見せる様になつてゐる。北京のは五人

一座で呼ぶと一晩十圓位でやつて見せてくれる。常小屋を置いても、はやらないと言つてゐる。影繪人形を遣ふのは二人で、あとの三人はお囃子方で、ヂヤンボン、ヂヤンボンとやる。田舍の百姓が北京見物に來てびつくりする樣な、たわいない筋や、西遊記の一節等をやつてみせる。奉天の方は、ちやんと小屋が出來てゐて、晩は十錢と六錢の場代を取つて見せてゐる。これは芝居を見にゆくより安いといふのではなく、影繪は影繪のフアンがちやんと有るんださうで、相當に入つてゐる。中央部を茶座といひ、その周圍を散座といつて、此處は安くなつてゐる。お茶を呑みたければ三錢出せばいゝ、湯が無くなれば註文すれば、幾らでもお代りをくれる。

人力車

人力車は日本で發明されたので、東洋車といつてゐる。東洋とは日本の事である。最近は東亞といつてゐるが、かつての歌に東洋平和のそが爲にと云ふ詞があつたが、これでは日本平和のその爲にで、支那には通用しない。東洋車略して洋車といふのが、通り言葉で

ある。北京はこの洋車の數が非常に多くて何處へ行つても拾ひ乘りが出來る。一時間十五錢が相場だから大ていな所へ行つても十五錢位で行かれる。近頃はずるくなつて立派なアスハルトの、道路道を通らないで砂利をしいたガタガタ道を通つて、車が痛んだから餘計くれなんて言ふ雲助車夫がある。日本人が多くなつたので、大分日本語を使ふのが居るが、筆のたつのは百人に一人位といふのだから、言葉の善惡や、使ひ方を知らないから、前門街といふ北京の盛り場で「オイヤンチョウ デカイロカ」なんて聲をかけてくる車夫がある。これは日本



人同志の話をそのまゝ聞き覺えたものらしい。そうかと思ふと、宿屋を出るとき梶棒を持ち上げながら「イッテラッシャイマセ」と車夫自身が言ふ。これは宿屋の女中が送り挨拶に言ふ事を、そのまゝ鵜呑にして、いゝ言葉であると信じて言つてる。これなんか御愛嬌だが客をつかまへて「オイ」には恐れ入る。十三位の子供の車夫が、ビヤ樽位の異人をのせて走つてゐるのを見る。びつくりすると共に、あんな子供に稼がせねばならないかと思ふと哀けなくなる。約束以外に金をせびるのは困りものだが、門内に入つてしまへば、けつして惡追ひをしない所は、あきらめのいゝ支那人の性質を露骨に現してゐる。

買物符號

支那商店の買物をする時は、必ず符諜が付いてるので、それを知つておくと、放外な吹きかけをされなくなるといはれてゐる。もつともこの符諜は、わざと解りやすく付けて置くもので、これが付いてゐないと支那人間では、賣買が成立しないとさへ言はれてる。ハハアこの品物は幾らとついてるから、もうけを入れると幾何に成る、それ以上ねぎるのは

可哀さうだと、いふわけであるが、旅行者はそれが解らないから、いゝ加減の買物をしなければ成らない。

〡〢〣〤〥〦〧〨〩　（記號用符號）

一二三四五六七八九　（普通用）

壹貳參肆伍陸柒捌玖拾佰仟萬　（商業書類用）

支那食物漫談

○

支那の汽車は、のどが乾かないのが何よりだ、といふと、いつも汽車がしめツぽい様に思ふが、さうぢやない、列車ボーイが茶をサービスして呉れるからだ。降車驛近くなると、蒸タオールのサービスもある。勿論チップはやるのだが、日本內地の様に氣張る必要はちつともない。十錢もやれば濟むのだから有難い。

○

僕は食物に神經質なので、大陸旅行中はスープとカレーライスに、列車の中の食事は決めてしまつた。この二品なら、まづ〳〵安心だ。チキンカツを取つた事があるが、筋のあるのを庖丁で二ツに裂切つて揚げてあるのなんかにぶつかつて、嚙み切れず、齒の方を痛くしてしまつた。支那人で洋食をたべるのはモダンの方だ。北京の東安市場といふ所に喫茶店があつてアイスクリームやフルーツポンチ等を食べさせる家がある。僕の行つた時は夏だつたが、こゝへ來て、さういふ物を食べてゐるのは、頭をパーマネントにした若い娘達が多い。パーマネントをする事はモダンガールの資格の一ツだ。その手前アイスクリームも必要なのだ。この家で洋食も食べさせるので、これ又繁昌してゐる。こゝの洋食と云ふのが何とロシヤ式なのだから面白い。支那人はロシヤ料理を食つてアメリカ料理を食つたと喜んでる。支那人のアメリカ禮讃は、馬鹿々々しい位トコトン迄アメリカニズムだ。日本では、こんな大きな軍艦があるぞと宣撫班が、支那民衆に陸奥の寫眞を見せたら、アメリカには、もつと大きいのがありますヨと言つた。アメリカニズムの良き一例だ。自分の國に無くともアメリカに有るので、これで溜飲を下げて居る。アメリカが支那の同情者

だと言ふ事で、アメリカがうれしいだ、愚かな事であり、考へらせられる事だ。

○

支那人は火を通したものを食べてゐるので、身體が丈夫なのだといはれてゐる。然しアイスクリームや、アイスキャンデーが賣れてゐるのは、この限りでない。アイスキャンデーは價も安いので、大人も小供も、盛んに割箸に固着した赤とか黄色のついた氷を、しやぶつてゐる。この間北京を寫した、映畫の中に、苦力が水を呑んでゐるところがあつたがあれはどうもお芝居らしい。支那人はけつして水を呑まぬ國民だ。苦力や、俥夫といふやうな階級の連中でも、わかした湯か茶を呑む、さういふ連中を相手に、內地の支那そばやで使ふ、丼、あの緣の薄いのへ、茶を三杯で一錢位に賣つてゐる。それを呑みながら、うどん粉を煎餅の樣に燒いたのや、マン頭といふ、うどん粉で出來たパンと饅頭の合の子なのを一口たべては、味噌つけた、ニンニクをたべて居る。三杯の茶はそう一度には呑めないので、注いだのを側において置く。砂ほとりが茶の中に入るので「何かで蓋をしないのか」と聞いたら「何大丈夫です、靜かにしておくと、底の方へ沈んでしまひます」これだ

支那といふ國の存在は。

○

支那料理屋へ入ると、日本人の客と見ると、袋入りの內地製の割箸を持つて來る。これは大變に日本人に取つては有難いことだ。それ程にするだけ、今の支那へ日本人が入つてゐる證據にも成つてゐる。北京でも、張家口でも、山海關でも、蒙古へ入つて厚和の都でも、みんな割箸だ。こんどの旅では、何といつても北京が一番うまいものを食べさせる。さすが大都市である。まづ內地だつたら一人前五圓位の料理で、六人位で食べるから五六の三十圓とにらんだ料理が何と十三圓で、チップをやつておつりが來るんだから、びつくりする。それで一流と云ふ料理屋だ。この家は少々高い家ですよ、しかも二百年も前からあるといふ歷史のある家ですよといはれた料理屋でも、六人で四十年位前の紹興酒を呑んだところが十五圓でおつりが來た。支那料理は、やつぱり本場が安い。

○

紹興酒といふてもピンと來ない讀者もあらうが、これは老酒と云つた方がよいかも知れ

ない。質は老酒よりずんと上等だ。これの質の落ちた悪いのが老酒と云ふ名で賣られてゐる。日本内地では、あんまりこの紹興酒の來てる所は多くない。紹興といふ中支の土地で出來るのでその名がある。日本人は老酒でも紹興でも支那酒と云ふと、氷砂糖を入れたがるが、こんな事をすると、本場の國では笑はれる、どうして笑はれるといふと、純粹の紹興や老酒は氷砂糖を入れなくても呑める位に、甘味を持つてゐる。下戸の僕だつて、舐められる位な甘さだ。氷砂糖を入れるのは、品物が悪いので、ピリピリするのに限つてゐる。だから氷砂糖を入れなくては甘味が出てこない。何とおわかりに成りましたか。

○

支那人は、物の數に一、三、五といふ樣な奇數を喜ばない。日本の樣に七、五、三は目出度き數なり、なんテのは流行らない。二、四、八といつた工合、松井源水が刀の切れ味を調べる時の紙切りの樣に二枚は四枚――十六枚は三十二枚、花は落下吹雪と御座いでなくては納まらない。だから骨董屋でも、一對の內一個だけ買つて行くのは日本人か西洋人の客に限るといつてゐる。一個だけ高く賣れてしまふと、殘りの一個は賣り物に成らぬので

顔馴染の日本人なんか來ると、他の品物につけて、たゞみたいな價で買ひ取つて呉れといふさうだ。これで掘り出し物をした日本人もある。だから支那人に物を送るのには、偶數でなくちや成らない。と云つたつて、九錢の買物をして十錢やる必要はない。

○

汽車が止まると、物賣りがズラリと店を並べてゐる。日本の樣に賣りに來るのは、日本辨當に新聞に雜誌屋だ。タバコ屋でも、蒸饅頭屋でも、店を張つてる所まで行かなくては駄目だ。蒸饅頭は初の程は、汚らしいと思つてゐたが、一つ食べて見てから、すつかり蒸饅頭黨になつてしまつた。しかし之れの冷たくなつたのは、うまくない。ある驛でのは、蠅が澤山たかつてゐたのを寄こしたから、そつちのを呉れと、たかつてない方を指さしたら、こつちでも同じだ、蠅のたかるのは、おいしくて新らしいから、たかるのだ、と言つて、どうしても替へてくれなかつた。支那人は蠅を差程に苦勞に思つてない。往來の食物屋でも蠅のたかつてゐるのを平氣で賣つてゐる。客も平氣でそれを買つてゐる。

○

支那にコレラが流行るといふのは、夏になると西瓜や眞桑瓜を洗はずに食べるからだといふ。水で洗つたらよからうと思ふと、その水は危險だといふので、洗はずに、手で泥をおとした位で、ガリガリと噛つてゐる。往々この中にコレラ菌が入つてゐるので、病氣に掛るのだといふ。これが家の中で死んだなら良いが、往來で死ぬと行路病者といふ事で、檢視がすむまで、そこに置かれる。この檢視なるものが慢々と云ふ所ですぐ來ない。一晩位ほうり出されるのは當り前だ。夜になると貧民が出て來て、その行路病者の衣類を剝して持つて行つてしまふ。だから翌日になると眞裸の死體が轉がつてゐるのは、皆な衣類を盜まれたのだ。奪ひ取つた衣類は、さつそく貧民氏の衣裳となつて現れる。忽ちそこで傳染。それ又行路に倒れたとすると、剝ぎ取られ、次から次へ傳染して行くのが、支那の傳染病の傳染する方法だといふ事だ。

○

學校の先生が、萬壽山を見物に行つた時、茶を呑みたいので、湖畔の休憩所へよつた。湖畔といつても、西太后をばさんが作つた大きな池だ。その池に臨んだ亭が、今は皆な休

憩所になつてゐる。そこで茶をまづ所望した。支那では茶と云はないで茶水といふ言葉がある。それを言つたところまだ北京について間もないので、發音が惡かつたので、卓子の上に出たのは、茶水でなくて燒豚だつたといふ。そこで仕方がないので、今度はチャーシュウと發音したら、變な顏をして叉燒豚を持つてきたので、仕方なく、そこらを見ると柱に汽水とあるので、何かの水だろうと、指さすと、サイダーを持つてきたので、サイダーで燒豚を、二人前食つたといふことだ。サイダーの事を支那では汽水と書く。あとで先生「茶水を註文して燒豚を持つてきたんだから、燒豚を註文したら、茶水を持つて來るかと思つたョ、わしの支那語も燒豚だけ發音は正確ぢや」と言つてゐた。

○

北京の隆福寺といふお寺の門前に、二百年前から、うどん屋をやつてゐるといふ店がある。案内される。支那の料理屋は何處でもそうであるが、入口に調理場がある。これは私の家では、この通りの料理を致すのであります。と云ふ事を示すものださうだ。食べる室は、その調理場を拔けて奧へ行つたところにある。二百年前からもあるうどん屋だから、

さぞかし古めかしい、黴の生へた、饂飩でも出すのかと思つたら、やつぱり新らしい、饂飩を出した。こゝの名物は、あんかけうどんだ、自慢だけあつてうまい。汁も掛けずにニンニクや胡瓜をかじり乍ら、うどんを食べる方法もある。この方は、まだ口なれぬせいかうまいと云ふ所まで行かなかつた。乗つて來た車屋が入口でたべてるのを見たら、肉の入つた汁をかけた饂飩だつた。一杯七錢位だといふ、すると俥夫はそれで晝飯にしたらしい車屋あたりでは家族四五人で一日三十錢もあれば暮せるといふ話だ。苦力なんか一日六錢の食事をして、日本人の四五倍も働く。日本から勞働者を滿洲や北支へ送らないのは、こうした安い勞働者が居て、とても相手に出來ないからだ。今支那あたりで求めてゐるのは頭腦の勞働者だ。都會でマゴ〳〵してるインテリ級の勞働者は、思ひ切つて、つてを求めて北支方面へ進出すべきである。食物は支那料理のおいしいのが安くてふんだんにあるから心配はいらない。日本料理なんか食つて居ては、とても金が掛つてたまらない。日本料理屋も澤山出來てゐるが、高からうまづからうでお話に成らない。支那の材料を使ひとなす程の、調理人が居ないからだ。その代り日本の疊とスフの着物きた女だけは豐富だ。

看板物賣 索引

ア

油屋
- 香油屋……一二八
- 油うり……一六八、一七八
- 燈油うり……一六三
- 食用油うり……一六三

飴屋……一七三
- 飴細工や……一六四

荒物屋……七六

當テ物や……一七四

あんぺら屋……一三八

疣とり……一二四

イ

糸屋……六四
- 糸針うり……一七六
- 一膳めし屋……三〇

入目屋……一〇

入齒屋……一〇

衣服屋……六八

ウ

占師……三四

流し占……一六四、一六六、一七六

エ

絵具や……五六

オ

玩具うり……一六〇

カ

書舗……一〇八
嗅ぎ煙草屋……六
籠屋……一一四
傘屋……六二
菓子屋……一六
油焼菓子うり……一七〇
かりん糖うり……一七〇
元宵餅屋……一五二
氷砂糖うり……一七八
砂糖菓子うり……一七二
干菓子屋……一六
蒸菓子うり……一六、一七〇
豆菓子うり……一六〇
菓子屋文字看板……一八
鍛冶屋……三八
流し鍛冶屋……一六二
刀鍛冶屋……一四
樂器屋……四八
胡弓うり……一六〇
かもじ屋……一一八
皮屋……七四

キ

煙管屋……一一三
切麵や……三
着物屋……六八
金店……七四

金屬屋……四〇
銀椀屋……三八

ク

藥屋……四、八四
流し藥屋……一七六
丸藥屋……四
目藥屋……四
屑や……一七四
靴屋……三六
靴釘や……一六六
靴下底や……一四四
豚皮靴屋……五八
頸當屋……一〇〇
鞍屋……一〇六

ケ

藝妓屋……一三二

コ

小帶屋……一四〇
廣告塔……一五〇
胡弓うり……一六〇
穀屋……九八
米屋
うるち米屋……八二
古米屋……八三
粉屋……八〇
呉服屋……六六
背負呉服屋……一七四
背負小布屋……一七八

サ

材木屋……一一〇
雜貨屋……九〇
流し雜貨屋……一七二

酒屋……八八
造花屋……一三六
猿廻し……一五八
シ
シエンピン屋……八六
仕立屋……七〇
質屋……八
芝居
舊式劇場……一二四
新式劇場……一二四
寫眞屋……七八
燒酒屋……九二
獸醫……一〇四
薊屋……九六
ス
すき櫛屋……七四

錫器屋……一二四
セ
蒸籠や……一四二
扇子屋……一四二
扇子はり……一四二
ソ
葬儀屋……一四八
葬具屋……一四六
染物や……六八
タ
臺所道具うり……一六八
タオル屋……六三
竹細工屋……五四
煙草屋……六
チ
茶や……七三
提灯屋……六三
ツ
漬物や……九六

壺屋……五八
爪きり……一六六
角細工や……一〇二
テ　天幕や……一四二
ト　銅器店……一三四、一四二
燈籠屋……一四四
唐物屋……一三〇
研屋……一五八
賭博遊び……一五八
ナ　鞣革屋……一一三
ニ　肉屋……九四
ノ　呑湯屋……四四
ハ　梅汁うり……一六四
馬具屋……一〇〇

鞍屋……一〇六
頸當屋……一〇〇
爆竹屋……一三六
刷毛屋……一〇八
鋏や……一二〇
葉茶屋……七三
八卦屋……三四
ヒ　表具屋……五四
フ　ふいご屋……一三六
回々教徒飲食店……二八
筆墨店……一四〇
佛具屋……九四
ブルキ細工屋……一一六
風呂屋……二〇

ホ 文房具屋……一四〇
庖丁店……一二〇
帽子洗ひ……六〇
幌屋……一四三
　人力幌屋……六〇
盆賣り……一六八
マ 饅とう屋……八六
メ 眼鏡屋……一三三
眼藥や……三八
モ 毛布や……一四三
ヤ 藥酒屋……八八
宿屋……五三
　安宿……一四
　田舍宿……五三

ユ 湯屋……一一〇
弓屋……一〇三
リ 兩替屋……四六
料理屋……二
　回々教徒料理店……二八
　一膳めしや……三〇
　安料理屋……二
理髪屋……一三三
　流し理髪屋……一五八
ル 瑠璃細工屋……一三〇
ロ 蠟燭屋……一二八、一三三
轆轤細工屋……一〇八
ワ 綿屋……九八

昭和十四年五月二日印刷
昭和十四年五月六日發行

支那街頭風俗集

（奥附）

不許複製

定價　壹圓參拾錢

著者　宮尾しげを

發行者　東京市京橋區銀座西一丁目三番地
増田義彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
根本力三

發行所　東京市京橋區銀座西一丁目三番地
株式會社　實業之日本社
電話京橋五一二一—五番
振替東京參貳六番

大日本印刷株式會社印刷

最新刊

日支交渉史話

白柳秀湖著

價 壹圓五拾銭
送料十錢

本書は、我國の上代より説き起して近代に至り、その間に於ける日・鮮・滿・支の民族的、文化的、政治的交渉を闡明したもので、本書を讀むことによつて、始めて今日の日支問題の根據を正しく認識し得るのである。

大陸再認識の聲が高い現在、日支交渉についても、やゝともすれば現前の事象にのみ眼を注ぎ、彼我の歴史的背景や民族的交流の理解を忘れ勝ちであるが、本書に述べられるが如き眞の根本的知識こそ現代日本の要求である。

人も知る、著者獨自の行文は闊達にして流暢、讀書人にとつて誠に好箇の非常時讀み物である。

實業之日本社發行

東亞同文書院教授
馬場鍬太郎著

北支八省の資源

北支の資源の概括的著述として完璧を期するものは本書を以て嚆矢とする。本書は發刊以來學者・實際家の間に名著として賞讃の聲を專にしてゐる。

價 貳圓
送料 十四錢

東亞同文書院教授
馬場鍬太郎著

中支の資源と貿易

對支貿易業者・中支那に發展する人々は本書一冊の知識によつて、之を座右に具へることによつて、この地の經濟事情をすべて知得し得るのである。

價 貳圓五拾錢
送料 十四錢

原口統太郎著

支那人に接する心得

支那人の氣質や風習を知らないために無駄に損をしてゐる日本人は實に多數である。本書は事細かに支那人に接する心得を說いたものである。

價 壹圓參拾錢
送料 九錢

實業之日本社發行

野崎信夫著

培養手引 **盆栽入門**

盆栽といふものを大變むづかしく考へてゐる人々に本當の盆栽道を説いたもの、初歩の人には勿論であるが、通人達にも絶好の參考書である。

定價壹圓七拾錢　送料拾錢

栽培秘訣 **趣味の草花**

本書は多年この道で知られた著者が、心血を注いで書いたもので、どんな素人にも分るやうに説いてあり、知らず識らず花造りの趣味に引入れられる。

定價壹圓參拾錢　送料九錢

高濱虚子著 **俳句とはどんなものか**

定價八拾錢　送料六錢

高濱虚子著 **俳句の作りやう**

定價八拾錢　送料六錢

荻原井泉水著 **俳句の作り方と味ひ方**

定價壹圓五拾錢　送料拾錢

文學博士 佐々木信綱著 **和歌を志す婦人の爲に**

定價貳圓　送料拾錢

實業之日本社發行

海軍大將・內閣參議 安保清種著
銃後獨話
内外多くの海戰を語り戰時銃後の心得を說く國家元勳の名著。
價壹圓七拾錢 送料十四錢

永田秀次郎著
青嵐隨筆 **放送懺悔**
豐富な常識と潤澤なる經驗が生んだ翁獨自の心境を語るもの。
價壹圓參拾錢 送料十錢

本山荻舟著
日本食養道
料理の理論家であり實行家たる著者の實用的日本食養大全である。
價貳圓 送料十四錢

總持寺貫主 伊藤道海著
禪的處世法
著者の體驗と思索より生まれた碧巖錄中心の大處世法である。
價壹圓貳拾錢 送料十錢

永平寺前管長 日置默仙著
練膽術
膽成る所、自ら大人格備はる。禪師の心膽より發する大喝を聞け。
價七拾五錢 送料六錢

修養團主幹 蓮沼門三著
大願への歩み
天地の公道に則つて明朗な社會を建設せんとする大願への大獅子吼。
價壹圓參拾錢 送料十錢

東京文理大教授 保科孝一著
國語と日本精神
國民精神の血であり肉である國語の諸問題をといたもの。
價壹圓五拾錢 送料十四錢

野崎信夫著
盆栽入門
盆栽界の權威の集大成である。本格的盆栽入門書として絕好の書。
價壹圓七拾錢 送料十錢

實業之日本社發行

實業之日本社々長

増田義一著

書名	版	價	送料
國策と個人	最新刊	壹圓五拾錢	十錢
改訂増補 青年と修養	百四版	壹圓五拾錢	十錢
群を抜く道	十九版	壹圓	十錢
青年出世訓	十七版	貳圓	十四錢
立身の基礎	卅五版	貳圓貳拾錢	十四錢
運命の打開	六版	壹圓	十錢
處世新道	五版	壹圓五拾錢	十錢
大國民の根柢	十七版	壹圓八拾錢	十四錢
今後の進み方	五版	壹圓參拾錢	十錢

實業之日本社發行

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03003 3989